

Ⅱ－１．公営住宅における住み手の自主的増改築の考察

Ⅱ－１－１．はじめに

（１）研究の目的

本研究では、住み手自らが住環境形成に主体的・自律的に関わっていることを確認し、それが計画的集合住宅において、いかなる意義を有するかについて明らかにすること、さらに、そうした住み手の自律的環境形成と計画との相対的な関係のありようについて考察することを目的としている。

ここでは、計画的集合住宅における自律的な環境形成行動の典型として、古い公営住宅に見られる住み手の自主的増改築⁵⁾行為に着目し、それを多面的に記述し、そのメカニズムと計画とは異質の巧みさを解明すること、および、より良き環境形成と熟成に向けて住み手が主体性を発揮することの有効性と可能性について、計画との相互性を視点として分析する。

公営住宅の増改築は、必要に迫られて許容されたことや、定住を旨としない居住者の一時的な行為という点で特殊な事例であるという意見や、美学的な見地から捉えてスラム化しているという批判もみられる。しかしながら、住宅を所有せずともその住宅の利用可能性を自らのものとして活用するという考え方（「領有」）は、集合住宅計画においては分譲か賃貸かという二律背反的な枠組み設定を越えて、集合住宅を本質的な意味での「住まい（Housing）」として捉えるための手がかりになると考えられる。そこで、創発的方法を賃貸型の集合住宅に適用することの可能性の模索という意図を含めて、他律的な供給体系や賃貸住宅という枠組み、さらには様々な管理規約等、増改築に対する多重の制約の元での住み手の自律的環境形成の実態を明らかにする。

特に、昭和20～30年代に建設された公営住宅では、住み手による増改築や緑環境の育成が一般的に見られることから、これを研究の対象にしている。

集合住宅における住み手の自律的増改築に焦点をあてた既往研究には、重村⁶⁾、佐藤⁷⁾の、使われ方を通して住み手による住環境の補完・熟成過程を捉えたものや、松本⁸⁾、大月⁹⁾による増築の促進要因や維持管理への影響を解明した研究がある。また、宇杉¹⁰⁾、小川¹¹⁾は、公営住宅における増築の形態や機能の特性と居住者属性の関係から、狭小住宅における住み手の住要求を把握している。何れも増改築を住要求の実現手法として、また物的環境として機能面から捉えているが、本研究ではそれに加えて、つくられ方を通して、住み手の意識や価値観の投影された意味的行為として捉えることに主眼をおいている。

（２）研究の方法

住環境形成に住み手が自律的に関わることの特性と意義、並びに、形成行動を触発する条件について考察するために、研究の方法を以下の通りに設定している。

第一に、住み手による自主的な増改築のつくられ方について、・背景となる住要求・具体的形態の決定方法・施工方法・使われ方の四段階に分ける。各々に関して、住み手に対するヒアリング調査で得られた意見を類型化したものと、増改築の実測調査のデータより増改築の実態と住み手の意識との関係を詳細かつ体系的に整理・分析する。それを通して住み手自らが住環境形成を行うことの独自性や有効性について考察する。

第二に、定住意識、近隣関係、増改築に関する役所の規約とそれに対する住み手の意識に関するヒアリング調査・アンケート調査のデータから、増改築を促進・抑制する要因と形態の決定に関わる暗黙の了解、ないしは、制度的な規範について明らかにする。あわせて、そこには各自が勝手に増改築を行うのではなく、多様な規範意識が交錯する中で、空間的な影響や計画による誘導を無意識のうちに受容しつつ、住み手が自律的に環境づくりを行っている状況と仕組みを明らかにする。

第三に、こうした増改築行為が、計画が専ら立脚してきた機能合理性の側面だけでなく多様な意味性（様々な物語・記憶・愛着・誇り等）を生成しながら展開されていることを明らかにする。

最終的には住み手によるより良き住環境形成を触発することに向けてのハード・ソフト両面における計画技術の確立を目指すことも必要であるが、その前に、これまで、住み手によって自律的に展開されてきた増改築を多面的に記述することを通して、住み手の増改築（生活の力）を計画の力と相対化しつつ、環境の熟成化やより良き住環境形成にどこまで寄与するかという可能性を突き詰めることに本研究の主眼を置いている。

即ち、本研究における自主的な増築行為を「企て（プラクシス）」としての計画を越える「出来事（ブラチック）」として捉えることである。「企て」としての計画は、実現すべき未来（＝目標）に到達する合理的手段の体系をなすのに対して、「出来事」は、「企て」の体系的プログラムの外から不意に訪れて、予想を越える可能性を内在させるプロセスである。「企て」としての在来的な計画では、計画者が住み手・生活を規定するが、

「出来事」としての新しい創発的方法は、生活と環境にとって意味ある条件を多様に受容する可能性を根拠とする。こうした視点から、本研究では、個々の増改築を一つの「出来事」として、それらを集積することで、増改築の全体像を浮き彫りにすることにアプローチする。

（３）調査の概要

そうした研究の方法より、調査対象として、昭和20年代後半から、30年代前半にかけて建設された熊本県下の接地型（※注：本研究では、「弱い計画性」、「余地空間」が増改築を促進する条件となりうるという前提から接地型を選定している。接地型とは専用庭を有する平屋かメゾネットの住戸形式をいう）の公営住宅団地から、多様な増改築の実態を捉えるために構造形式（※注；木造平屋戸建・同二戸一・簡易耐火構造平屋・同二階建）に偏りがないようにした上で、50戸前後の比較的まとまった規模のものを任意に4団地抽出した。各団地の概要を表－1に示す。住戸は、戸建ての場合、6畳＋4.5畳＋3畳＋台所・トイレ（H・U・T団地）の構成で、3団地ともに同じプランが採用されている。二戸一の場合は、6畳＋4.5畳＋台所・トイレの構成でH・K団地は二居室が南北に配置、U団地は横置きプランである。なお、戸建て住戸には玄関とは別に勝手口が設置されている。

各団地の全世帯を対象に、属性・定住意識・住まい方・増改築の実態と評価・近隣関係等に関するアンケート調査を実施し、団地の全体像を把握した。表－2・3に示した通り、H・U団地では、高齢の夫婦や単身者世帯が半数近くで、居住年数も30年以上の世帯が3割以上を占め、居住者の滞留化の傾向が見られる。一方、T団地は、比較的若い世代の核家族で、居住年数10年未満が約半数程度を占め、居住者の新陳代謝が顕著である。K団地は、両者の中間的な傾向を示している。

さらに、アンケート調査に基づき、家族型・居住年数・定住意識等の属性に関して多様な世帯を任意に抽出して、「つくられ方調査」とでも呼べるような増改築の動機・方法・評価・規約に対する意識、外構の維持管理の状況とそれらと密接な関係のある近隣関係、住み方やしつらえ等に関するヒアリング調査と増改築、外構の実測調査を行った。特に、ヒアリング調査においては、個別の増改築に関する詳細な実態把握だけでなく、そこに内在する住み手の価値観や意味性の把握に努めながら、増改築の個別事例を広範に収集することに調査の力点を置いた。

接地型の古い団地においては、一般的に何らかの増改築が行われている住戸が大多数を占め、増改築の各事例には、従来の「計画の力」と相対化しうる固有のメカニズム・意味・可能性が認められ、十分な個性(*)を有している。それを多数の事例について収集することの狙いは、住み手の自律的な住環境形成に関する内容が、多様化あるいは、深化させ、相対化を多面的に行うことができると同時に、そのことが一般化への回路をも拓きうると考えている。

なお、いずれの調査も1991年9月から11月にかけて実施した。

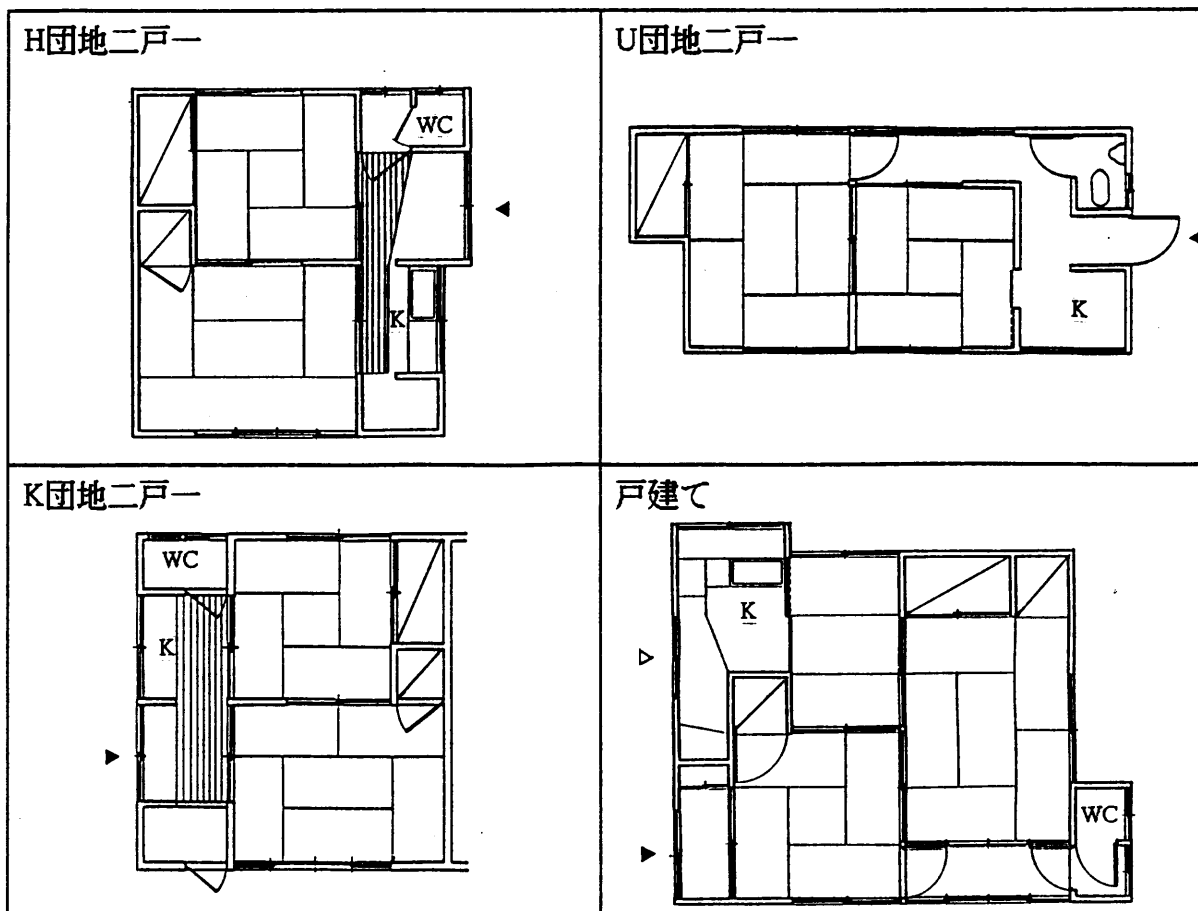


図 代表的な住戸プラン

表-1 調査団地の概要

項目	団地名	H 団地	U 団地	T 団地	K 団地
所在地		熊本市	八代市	水俣市	菊池市
建設年度(年)		S 29	S 30~33	S 28~30	S 31~36
敷地面積(㎡)		10823.1	11318.9	5982.5	11339.0
構造別住戸数 (住戸面積 (㎡))	木平戸建	17 (36.3)	34 (36.3)	27 (36.3)	8 (34.7)
	木平二戸一	48 (28.0)	12 (28.0)	—	24 (28.1)
	簡平	—	6 (19.8)	—	35 (34.7) (19.8)
	簡2	—	16 (40.9)	—	—
	計	65戸	68戸	27戸	67戸
現居住世帯数		62世帯	42世帯	27世帯	59世帯
調査票回答数 (%)		29世帯 (47%)	37世帯 (88%)	25世帯 (93%)	39世帯 (66%)
ヒヤリング調査数 (%)		18世帯 (29%)	18世帯 (43%)	12世帯 (44%)	9世帯 (15%)

表-2 家族型の分布 (%)

	Co-	C1	C2	B	S	E	計
H 団地	10 (34.5)	0	5 (17.2)	5 (17.2)	9 (31.0)	0	29 (100)
U 団地	17 (45.9)	0	8 (21.6)	5 (13.5)	5 (13.5)	2 (5.4)	37 (100)
T 団地	5 (20.0)	9 (36.0)	7 (28.0)	0	1 (4.0)	3 (12.0)	25 (100)
K 団地	3 (7.7)	7 (17.9)	11 (28.2)	5 (12.8)	6 (15.4)	7 (17.9)	39 (100)

表-3 居住年数 (%)

	30年 以上	20~ 29年	10~ 19年	10年 未満	計
H 団地	17 (58.6)	4 (13.8)	2 (6.9)	6 (20.7)	29 (100)
U 団地	10 (27.0)	12 (32.4)	14 (37.8)	1 (2.7)	37 (100)
T 団地	0	2 (8.0)	11 (44.0)	12 (48.0)	25 (100)
K 団地	4 (10.2)	5 (12.8)	15 (38.5)	15 (38.5)	39 (100)

Co-: 夫婦のみ(世帯主40才以上)
C2: 夫婦+長子12才以上

C1: 夫婦+長子12才未満
B: 欠損家族

S: 単身
E: その他

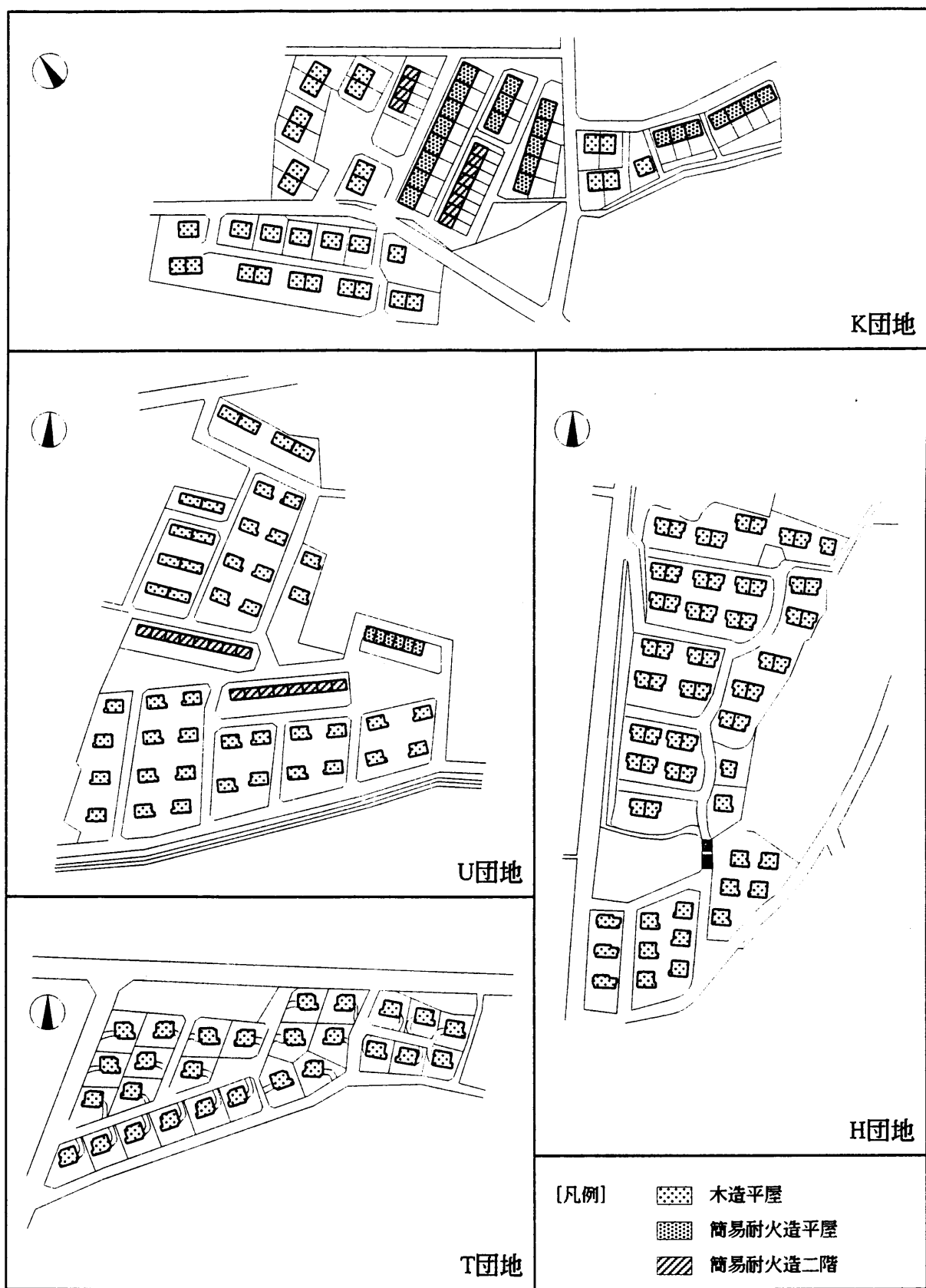


図 団地配置

Ⅱ－１－２．増改築のつくられ方の特性

（１）増改築の形態的特性

各々の団地毎の増改築の全体的な傾向を押さえるために、アンケート調査より、機能別の増改築箇所を見ると（表－４）、子供部屋・家族室・親の寝室・書斎・客間等の居室、浴室等の水回り、納戸・外部倉庫等の収納、庇・車庫等の半戸外空間、廊下・縁側・玄関等の動線等、住み手の個別の住要求に対応して、極めて多様な場所の増改築が行われている。各団地ともに、テラス・縁側を除いて高い割合で増築が行われている。特に、オリジナルの住宅には設置されていなかった浴室が72.7%（K団地）～97.0%（U団地）と最も高く、庇（75.4%）、子供部屋等の居室（66.1%）の順となっており、生活する上で最低限必要な機能を充足しようとする住み手の姿勢が見てとれる。

図－１（※注：以下の文中（典○）は、図中の番号に対応している）その中でも特に積極的に、興味深い増改築を行っている典型事例であるが、住み手の個別の住要求や個々の経緯によって多様な場所や方法が選択された増改築が行われ、巧みに活用されている状況が窺われる。

表－５・６（※注：以下の文中〈数字〉は、表中の意見番号に対応する）には、増改築に関する住み手の全意見を項目別に類型化し、その内容を代表する典型意見を抽出している。増改築の実態や意識について多様な意見が収集されている。

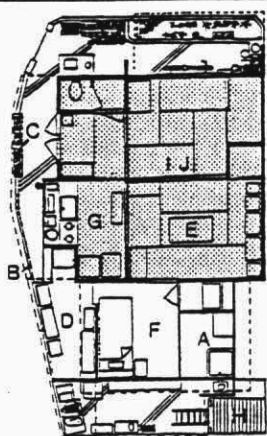
ここでは、主に増改築の目的や動機、位置や平面・立面・仕上げなどの形態的な特徴、形態決定に作用する要因等について明らかにし、形態面からみた増改築（特に、増築）の特性を構造的に把握する。

表－４ 増改築の全体概要

	H団地 N=29	U団地 N=37	T団地 N=25	K団地 N=39	全体 N=131
部屋	19 (67.9)	25 (75.8)	12 (50.0)	23 (69.7)	79 (66.1)
浴室	26 (92.9)	32 (97.0)	21 (84.5)	24 (72.2)	103 (87.3)
物置	13 (46.4)	15 (45.5)	12 (50.0)	13 (39.4)	53 (44.9)
庇・日除け	22 (78.6)	30 (90.9)	16 (66.7)	21 (63.6)	89 (75.4)
テラス・縁側	5 (17.9)	3 (9.1)	0 (0.0)	3 (9.1)	11 (9.3)
その他	3 (10.7)	1 (3.0)	0 (0.0)	1 (3.0)	5 (4.2)
不明	1	4	1	6	13

N=住戸数、各欄内の実数は増改築総数
()内は全住戸に対する増改築の割合を示す

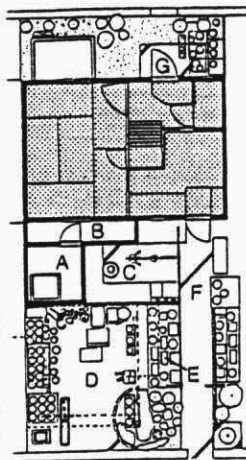
①偶発性への対応による増築の連鎖 [H団地・二戸一・S31入居]



- A: 入居3年目に許可が出、母屋から離れて風呂を増築した。建が年頃になれば通りに面するのは不用心と考えてこの位置になった。
 A: 人まわが激いで、よそはポリや五右衛門だが、風呂増築した。以前、風呂のドアが母屋6畳側にある、6畳から中が見えになるので、増築した部屋から風呂へ行くようにドアを付け替えた。
 B: 当初、杉の木を植えたが、子供がボール投げで玄関ガラスをよく割った。うちが気がつかないといけないと思い、ブロック塀を作る。雨戻しで玄関が濡れ、ブロック塀の上に板敷をした。
 C: 去年床板を替える時、長い角材が入らないので、弟が塀に開口を空けた。玄関前が道から丸見えで「紙芝居」みたいなので、塀を下げた。その後、弟から言われて、開口部に花を置いている。
 D: ブロック塀に窓を開けて外物置を作った。その後、居室に改造。タンス、ミシン、鏡台を移動したので、母屋がすっきりとなった。
 E: 入居まもなく4畳半に掘炬燵を作った。その後6畳に移設、夏は足を高くしてテーブルにし、椅子で食事や接客の場にした。
 F: 娘の部屋もいるし、来客時に狭いので増築したので、物置で申請したので、工事中の市の検査で母屋から離せと言われた。大工が規約遵守に見せかけるため苦心し、検査後母屋にくっつけた。
 G: 風呂(二度目)と台所と部屋の増築を一掃にした。

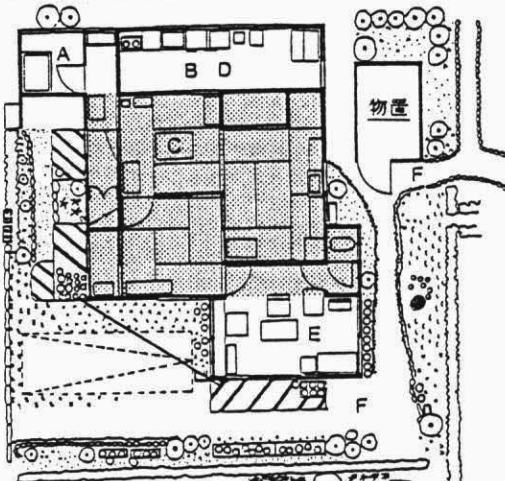
- H: 増築で庭が減ったので、屋根の上のように高い物干し台を作った。
 I: 主人が、母屋の天井を全部張り替えた。自分の出来る範囲で、手を入れようと思っている。家の中のことは市に頼んだことがない。
 J: 何もなくて、家が広いから50人の団地給金の場を提供する。
 ※増築によって、南隣の家に近くなったが、家は風呂とトイレでいつも使うところではないので迷惑にはならないと思う。

④近隣に配慮した趣味の場の増築 [U団地・二戸二・S45入居]



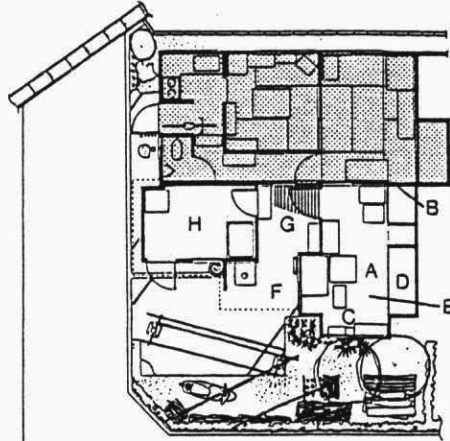
- A: 銭湯がなくなり、夫が日曜大工で風呂を増築した。姉の家が新築するので古材を使用、屋根はスレート。工事音が近所迷惑にならないように気を配った。
 A: 先に増築した人の参考に、一旦外に出る形式が多かったが、冬は寒そうなので、部屋から直接行けるようにした。近所の人もうちを参考に同じような風呂の増築をした。
 B: 増築で母屋が暗くなったので、天井に明かりとりをつけた。
 C: 洗濯物干し、自転車置き場、物置として底をつくった。
 D: 子供が大きくなったので、芝生の庭に丸太で車庫をつくった。現在、植木や物置場に使用。
 E: 車庫の先に花が伸びても良いように、花壇をつくった。
 F: 近所の人は南側から出入りする
 G: 玄関はセールスマンだけ、夏以外は開けず、物置にしている
 ※昔は、増築の許可を市にもらっていたが、今では気にせず増築する

②増築による母屋の改造と一体化 [H団地・戸建・S30入居]



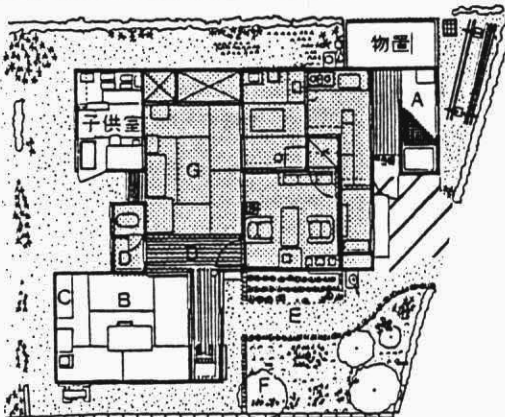
- A: 銭湯が遠く風呂を増築した。3回(最初母屋から離れて、役所の許可後、母屋に接続させた。3度目は台所の改造時)つくった。
 B: 台所を広げる時、一緒に浴室・北側居室の増築と押入改造をした。
 C: 3畳は使い手が悪いので、押入、台所を含めて4畳半に改造した。
 D: 狭い家に道具が増えるので、長女の勉強部屋を増築。その後、隣の下宿、さらに庭の勉強部屋へと変化した。現在は物置。
 E: 次女の勉強とピアノの場を増築した。母屋建築も一体化するよう改造。現在主人の書斎・趣味の場(書斎・ソファ・マッサージ機)
 F: 庭を通り抜けられるように縁側廊下を1間分張り出した。隣と行き来ができるように生け垣を開けて道を作っている。
 ※境界問題などが起きないように、北隣の工事に「お宅に迷惑かけないよう作って」と、北側の増築を頼んだ。市への許可申請も頼んだ。
 ※3軒続けて同じ大工による同様の増築が並んでいる。

③セルフビルド [U団地・二戸一・S38入居]



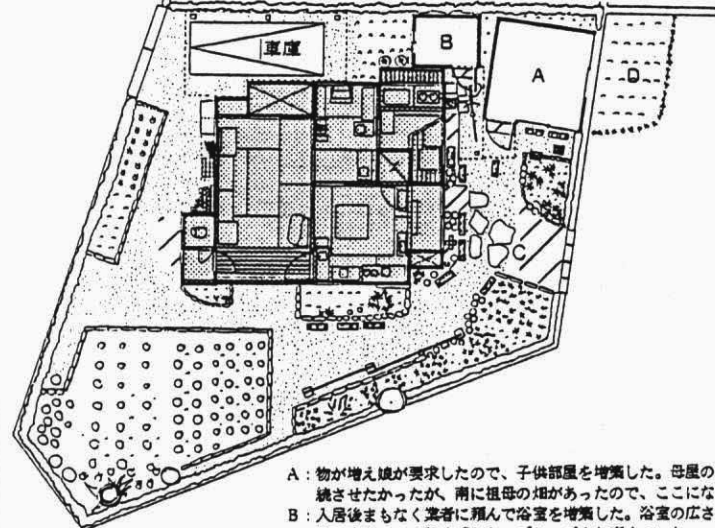
- A: 息子3人なので子供部屋を日曜大工で増築した。子供が一番喜んだ
 B: 退去時に増築部分だけ壊せるよう、母屋の戸袋を包み込んでいる。
 C: 出窓をフルに活用して基準面積内で納まるよう(2.5坪)工夫した
 D: 自作の2段ベッドを息子の背が伸びて、再度大きく作り替えた。
 E: 母屋との調和や、家を作る時物置に再利用できるよう瓦を乗せた。
 F: 洗濯干場がなかったの、部屋を増築する時一緒に底をつくった。
 G: 本来の玄関は、勝手口になっている。客も雨の縁側から出入りする
 H: 浴室は自分でブロックを積んだが体臭悪く、左官に上塗りさせた。
 ※夫が図面引き、「物置はこの位、風呂場に洗濯機置くのと痛むけど、他に置場がないから」等と夫婦で話し合いながら間取りを考えた。
 ※3男が校區外の学校に通学していたが、「捨家でも風呂場と勉強部屋だけは我が家でしょ」と引越さず。住まいに対する愛着はある。
 ※近所の人が見て、「こんな風に違つて」と2・3軒の依頼があった。

⑤思い入れをこめた増築の使用 [U団地・戸建・S31入居]



- A: 冬の銭湯は風邪を引きやすいので、風呂は入居してすぐつくった
 B: 接客、書斎として増築。上客の応接と妻の趣味活動の場として活用
 C: 仕事やお茶の道具を入れるのに造り付けのタンスを大工に頼んだ。
 D: 一緒に廊下も張り替え、トイレも仕切をはずし、洋便器に替えた。
 E: 底(植木置き・洗濯干場)は、一番目当たりのいい場所に作った。
 F: 増築後日当たりが悪くなり、花が枯れ、大きな楠の木一本残った。
 G: 壁などは、自分で業者に頼んで塗り替えてもらう。
 ※増築の機能毎に仕上げ・形態のグレードを変える。

⑥庭への強い欲求で増築位置決定 [T団地・戸建・S55入居]



- A: 物が増え娘が要求したので、子供部屋を増築した。母屋の南面に接続させたかったが、南に祖母の畑があったので、ここになった。
 B: 入居後まもなく業者に頼んで浴室を増築した。浴室の広さに対して柱が大きいので狭く感じた。プレハブより高かった。
 C: 女ばかりで不用心なので、人が来て分かるよう、砂利を敷いた。
 D: うちの土地ではないが、草ぼうぼうだったのを祖母が毎日草取りをし、花を植えて綺麗にした。

図-1 増改築の典型事例

(母屋)

表-5 増築に関する住み手の典型意見（その1）

■住要求

- ・【機能付加】銭湯に行くのは雨の日に困るし時間もかかるので、風呂を増築した。(1)
- ・洗濯物干し、自転車置き場、物置として底を造った。(2)
- ・【機能拡充】息子3人で家が狭く、子供部屋を増築した。(3)
- ・【機能改善】3畳は狭く勝手が悪いので、押入とあわせて4.5畳に改築した。(4)
- ・【楽しみ・ゆとり】一部屋でも余分にあった方が、一人でも多く泊まれるし、広く感じるのでサンルームを増築した。(5)

■増改築の形態

○増改築の位置・平面

- ・【母屋からの動線】母屋から離すと冬寒いので、母屋の部屋から直接行けるように作った。(6)
- ・【近隣増築の参照】
 - ー同じ並びの家の増築を見せられて、こんな風にしたら良いかと参考にした。大工と一緒に見に行った。(7)
- ・【敷地形状との関係】南の庭が狭く、北側に敷地の余裕があったし、北側は庭づくりもできないので、そこに作った。(8)
 - ー南側の増築は、庭が広く空いていたからそこに決めた。(9)
- ・【同一形態の波及】庭がどこも同じ大きさで、出す場所が一緒だから、増築の作りはほとんど同じである。(10)
- ・【役所の規約】
 - ：【面積制限】市の決まりで3坪以上建てられないことになっていたので、2.5坪にし、庭を確保するように努めた。(11)
 - ー居室の増築は役所に届けたが、申請面積をごまかした。(12)
 - ：【母屋との接し方】風呂場は、母屋から離さねばいけなかったがほとんど違反していない。「離れに傘さして行く」(13)
 - ：【原型復旧】母屋には手を付けられない規約だったので腰窓を残し、風呂に行くには、腰窓をまたいで出入りする。(14)
 - ー退去時には、原型復旧しなければならないが、改造してはいけないとは思わない。(15)
 - ・【機能・使い方】風呂場の位置について、娘が年頃になったら、通りに面するのは危ないので、奥に作った。(16)
 - ートイレ脇に入口を考えていたが、そこは裏鬼門にあたると言われ入口を変更した。(17)
 - ：【母屋との連続性】増築に独立した入口を作ると、人の出入りが分からない。母屋を通るようにし、ドアも作らなかった。(18)
 - ・【相隣関係に配慮した自律的調整】
 - ー周辺に迷惑がからないように、面積や位置を考えた。隣家に築が近づかないように配慮した。(19)
 - ーある程度隣と離れているので特別の配慮はしなかった。(20)
 - ：【ゼロロットライン】増築は、隣に面さない西と南側に窓を設けた。(21)
 - ー境界のブロック塀を作るとき、隣が老人世帯だったので、行き来が出来るように一部を開けてある。(22)

○仕様・デザイン

- ・【経済的合理性】姉の家が新築する時の廃材をもらってきて日曜大工で風呂を造った。屋根はスレート。(23)
- ・【時間的合理性】
 - ：【リサイクル】増築部に瓦を乗せたのは、将来、自分の家を持ったときに、そのまま物置に再利用するため。(24)
 - ：【転用性】大工に頼んだらお金が倍かかるし、引っ越すときに取り外せるからプレハブにしようと思った。(25)
 - ：【仮設性】子供が高校を出るまでの3年間で良いから、一番安い材料で、簡単に作って貰った。(26)
- ・【思い入れ】
 - ー「長男を下屋に住ませてはイカン」と主人が言ったので、増築には下屋ではなく、切妻屋根と玄関を作った。(27)
 - ープレハブは仮設事務所のように見た目も軽くて嫌いなので、きちんとした木造の増築をした。(28)
 - ー風呂は日曜大工なので形は減茶苦茶、広ければ良い。(29)
- ・【母屋との調和】
 - ー母屋と違和感がないよう外壁には木目トタンを選んだ。(30)
- ・【場所性・団地内での位置づけ】
 - ：【景観の個と全体】各自、自分の所をきれいにすると全体がきれいになるという意識があり、自分の所だけ汚くできない。(31)
 - ：【場所性】団地の入り口で目立つのできれいにと思う。(32)
 - ・【定住意識と増改築のグレード】入居当初は定住しないつもりだったので、金掛けず取り外しが可能な形で改造した。(33)

■施工方法

○専門家、大工ー縁故者、知り合い

- ・【コストセーブ】妹の夫が大工なので頼んだ。そのころ3万か5万で、安くしてくれた。(34)
- ・【信頼感】北隣の住人が大工だったので頼んだ。境界の問題など何かあったときに心配だから。市の許可も頼んだ。(35)
 - ー知り合いの大工は腕が良く台風の時も大丈夫だった。(36)
- ・【作り手、住み手のコミュニケーション】風呂の増築は、知り合いの大工と色々話し合いながら作った。最初の大工の案からは、少し広げたり、雨の扉と窓の設置などをお願いした。一方、大工も風呂場前に「底を出しましょう」と提案してくれた。(37)

○専門家と住み手の共同

- ・基礎は大工に作って貰い、あとを自分達で組み立てた。(38)

○セルフビルド

- ・【経済的負担の圧縮】風呂場は日曜大工で4～5週間で作った。古材を買ってきたので、全部で約12万で出来た。(39)
- ・【時間をかけて少しずつ完成させる】風呂場は使用できるが完成ではない。天井もこれから少しずつ仕上げていく予定。(40)
 - ー底は鉄骨が丈夫かとも思ったが、「壊れたら、またつくったらい」といいながら、夫がこつこつと木材で造った。(41)
- ・【小回り性】父親がありあわせや仕事場でもらってきた材料で、増築後の2段ベッドも自作した。息子が大きくなりすぎたので、途中でサイズを大きくし直した。(42)
- ・【多様な材料の使用・身体性・有機性】色々な材料を組み合わせて手作りの味わいのある浴室を作った。(43)
 - ー毎朝7時に起き、球磨川の石を拾い風呂の縁に並べた。(44)
- ・【材料のリサイクル】風呂場を作るのに、転出した居住者の車庫の屋根を買ってきて、下をブロックで作った。(45)
- ・【偶発性による増築の連鎖】風呂の材木が大きい木だったので、余ったのを切るのがもったいなくて底を作った。(46)
- ・【特技・能力の発揮ーブリコラージュ】すべて日曜大工が趣味の夫の手作り。(47)
 - ー主人は大工で出窓を活用して基準面積内に納めている。(48)
- ・【存在の痕跡】玄関アプローチの石張りは亡くなった主人が作った。主人の思い出の道なので、そのままにしておきたい。(49)

■増改築の連鎖性

○増改築が新たな増改築を喚起

- ・【増築の隙間を埋める】嫁の家具置き場が必要になったので、増築部屋と母屋の間に、4畳の板の間を増築した。(50)
- ・【徐々に改善していく】風呂は全部で3回作った。1度目は住戸から離して、2度目は台所を広げるとき一緒に、3度目は住戸から出入りできるように次第に使いやすく改善していった。(51)
- ・【充実感による展開】セルフビルドによる風呂の増築の出来映えには満足しているので、また増築をしても良い。今度は、底を作ろうと材料をだんだんそろえている。(52)

○増改築の改造（時間的な発展）

- ・増築によって母屋が暗くなったので、増築の天井に透明板をはって明かりとりを造った。(53)
- ・母屋は市のものでからいじれないという気持ちがあるが、増築した部屋は自分のもので手を加えやすい。(54)

○母屋の改造

- ・風呂場を作り替えた時、台所も一緒に改造した。(55)
- ・増築の部屋と連続するように母屋の廊下もはり替え、ついでにトイレも仕切をはずし、洋便器にし直した。(56)

○自律的維持・管理意識の高揚

- ・家の中のことは市に頼んだことがない。自分の出来る範囲で、手を入れようと思っている。(57)
- ・台風19号で被害があったとき、近所の人たちが底の修理や瓦の葺き替え、アンテナのセットなどしてくれた。市は、とても手が回らない状態だったので、自分達で直した。(58)
- ・ゲートボール場の小屋も自分達で作った。(59)

○近隣への増築形式の波及

- ・増築はうちが一番早かったので、近所の人が見に来られて、「台所を上げよう」と真似された。(60)

表-6 増築に関する住み手の典型意見 (その2)

■増改築による住意識・意味の生成

○住み手による評価

- ・【満足】便利になった。満足している。(61)
- ー縁側の増築で家が広く感じる。日向ぼっこも出来る。(62)
- ー父親自作の子供部屋で子供が一番喜んだ。(63)
- ーKさんのところは、増築も庭も眺めに行きたくなるくらいきれいだった。(64)
- ー増築の騒ぎに関して、最初の人がいかりした物を造ってくれていたのが良かった。自分も次の人に差し上げたい。(65)
- ・【反省・デメリット】もっと大きな増築をしたかったが、スペースがなかった。(66)
- ー子供部屋を増築したので子供に目が届かなくなった。(67)
- ー増築後、母屋の日当たりが悪く、一日中電気をつけたままになった。(68)
- ー増築によって庭が狭くなり、盆栽の数が減った。(69)
- ・【近隣トラブル】6畳の窓を開けていると隣の増築からの視線が気になったので、管理人に文句を言ったら、隣人が謝りに来て、隣は窓を開けなくなった。(70)
- ー隣の増築の影響で、野菜も半分しかできない。(71)
- ー隣の増築は境界線を越え、雨水もうちの庭に落ちる。(72)

○住まいに対する愛着・誇り

- ・【持ち家意識】ずーっと住むという考えで、いろいろと手を加える。それで、愛着が生まれ、本当に自分の家に思えてくる。娘と一緒に住もうと言ってもいやと言っている。(73)
- ー引っ越しの話が出たが、「風呂場と勉強部屋造っていたので、借家でもそれだけは我が家でしょ」と引っ越さなかった。住まいに対する愛着はある。(74)
- ・【アイデンティティ】主人は人まねが嫌いで、自分だけ違うのが良い。自分は木の風呂がよいと言って作った。(75)
- ・【定住意識の生成】住居に手を加えたことと、環境がよいので定住希望に変わった。(76)
- ・【誇り】汚いといって引っ越しした人もいるが、増築すればきれいに住める。外観よりもみんな住戸内をきれいにしている。(77)
- ー娘は今は立派な家に住んでいるが自分の故郷は忘れられない。「どんな粗末なところで故郷だと思う。」(78)

○環境生成行動に内在する意味

- ・セルフビルドの神様「主人は何でも出来るんです」もう何十年も経過しているので、屋根も替えないといけませんが、「うちの大工さんに、私が費用を出さないもんだから、してくれない」(79)

○個性的な使い方

- ・【愛着使用】
- ・【生活拠点】手作りの部屋を主人専用の場として使っているが、自分の物を色々置いて、ここから決して出てこない。「気に入ったようにつくっているから良いんでしょう」(80)
- ー増築の子供部屋には、ピアノ・ベッド・本箱・タンスが置かれ娘の域になった。(81)
- ・【ハレの場】増築は、上客の応接や妻の趣味活動(お茶、お花)に使っている。それ以外は、母屋で対応する。(82)
- ー増築した小屋には、子供の遊び道具、教科書など、使わないがなつかしくて捨てられない物を収納している。(83)
- ・【近隣への開放】当時、周辺の人々がうちの五右衛門風呂に入りに来ていた。風呂上がりに、お茶飲んだり、麻雀、トランプなどをして楽しかった。(84)
- ー何もなくて、家が広いから団地の総会(年1回)の場所を提供する。50人全員集まる。(85)
- ・【特化使用】
- ・【身体化】増築では、長女(下半身不随)のベッドから手の届く範囲に何でも置けるように棚を作った。(86)
- ・【家族関係の保持】娘の様子、母屋から見えるので、母屋で何かしながら娘に声が掛けられる。友達が来た時もわかる。(87)
- ・【洋間の活用】主人が病氣したときには、病院からベッドを借りて、増築部屋に置いていた。その後、便利なので自分でもベッドを購入し、按摩用の椅子も買って置いている。(88)
- ・【転用性】娘が中学時代に同居した時にプレハブの増築をした。その後、ピアノを姪に返し、プレハブは兄にあげた。(89)

■増築の促進・抑制要因

○定住意識

- ・【定住意識が増改築に及ぼす影響】
- ・【定住型】ずーっと住み続けたいと思っている以上は、自分達の使いやすいうように手を加える。(90)
- ・【定住移行型】退職後引っ越そうと思っていたから、増築する気はなかったが、妻がここに住み続けたいと言ったから「じゃー増築しよう」ということになった。(91)
- ・【転出型】子供は部屋が欲しいと言っているが、持ち家を建てようと思っているので増築しない。(92)
- ・【借家意識】持ち家と借家では、金のかけ方が異なる。借家はいつ出るかわからないので、金を掛けないようにしている。(93)

○受容する空間の特性

- ・【未完性】市の持ち物だけで自分で改造しなければ、不自由だから、便利が良いようにする。細かいことを頼んでもいつしてもらえんか分からないので、市に改造を頼まない。(94)
- ・【余地空間】各自の敷地境界が柵や生け垣で区画されているので自分の領域ははっきりしている。各自に割り当てられた土地の中は、好きなように自由に使える。(95)

○増改築に関する自治体規約

- ・【許可】書類を出せばいいという感じだから、増改築に対して、気兼ねはしない。(96)
- ・【制約】役所に申請して、許可がでないと増築できない。風呂は当初許可が下りなかったが、銭湯がなくなったので、作れるようになった。やたらに増築は出来ない。(97)
- ー一部屋増築したいが、手続きが面倒臭いので我慢する。(98)
- ・【規約の逸脱】みんな内緒で作っているのに右に習えて作った。届けを出したら、役所からダメと言われる。(99)
- ・最初、風呂は母屋から離して作った。役所の許可が下りてから、母屋と一体的で直接行けるように作りなおした。(100)

○近隣との相互関係

- ・【近隣の増築による触発】一緒に銭湯に行っていた近所の人と話し合って風呂の増築をすることにした。「風呂を作ろうかと思っている」「じゃあ、私も作る」(101)
- ーみんな増改築しているから自分もするという感じ。(102)
- ・【共同増築】風呂は、隣のひと話し合って、同じ大工に頼んで、一緒に増築した。(103)
- ・【相互調整】増築で、もめ事が起こったことはなかった。自分の土地にすることだからよその人が口を挟むことはない。(104)
- ー隣の増築で、影になったが、ある程度譲り合って、お互いに辛抱することも必要(105)
- ー影になるかもしれないので、隣のひとに増築することは話した。だから、少しは影にならないように気を付けたが、詳しくは考えなかった。隣の人も別に良いですよと言う感じだった。(106)
- ー増築の位置が隣の浴室に近く、うちのピアノの音で迷惑をかけるかもしれないので、隣に増築のことわりに行った。(107)
- ・【隣の増築のために土地の提供】管理人から「隣の増築用に少し土地を分けてくれ」と頼まれ、隣家はそこに増築した。(108)
- ・【工事中の配慮】「工事しますので、やかましいでしょうが、宜しくお願いします」と近所に挨拶に行った。(109)
- ・【増築の抑制】増築を考えたこともあったが、通風など周辺に迷惑になりはしないかと考えて断念した。(110)
- ー隣の増築は自転車小屋ということだったが、実際は部屋が増築されたので通風が悪くなった。事前に部屋だと分かっていたら反対した。(111)

○増築しない要因

- ・【財政事情】祖母も主人も亡くなり、子供達を抱えてとても増築する余力はなかった。しょうとも思わなかった。(112)
- ・【生活スタイル】家に日が当たらない、風が通らないのは嫌いなので庭は出さない。(113)
- ー子供に目が届いた方がよいので、個室は増築しない。(114)
- ・【将来予測】息子2人は、子供部屋の増築に対して、「将来、ここにはいないから要らない」といった。(115)

イ) 増改築の動機・目的

増改築のモメントは、基本的には計画との不適合を克服しようとするものであるが、その具体的な内容を計画された空間（母屋）の機能との関係から類型化する。

- ① [機能付加型] : 浴室や庇に見られるように、当初の計画では設けられていない機能を新しく付加する増築。日常生活を行うには不可欠なために積極的に行われている〈1・2〉。
- ② [機能拡充型] : 居室のうちの子供部屋・家族室あるいは収納等、家族構成や使われ方から生じる相対的な住戸の狭小性や室数の不足といった機能的制約に対して、それを拡充する〈3〉。
- ③ [機能改善型] : 使い勝手の悪い台所の改造に見られるような既存機能の生活上の不備を改善する〈4〉。
- ④ [ゆとり型] : 住機能の向上だけをモメントとするのではなく、増築しなくても生活に支障はないが、空間や生活面のゆとりを希求する〈5〉。

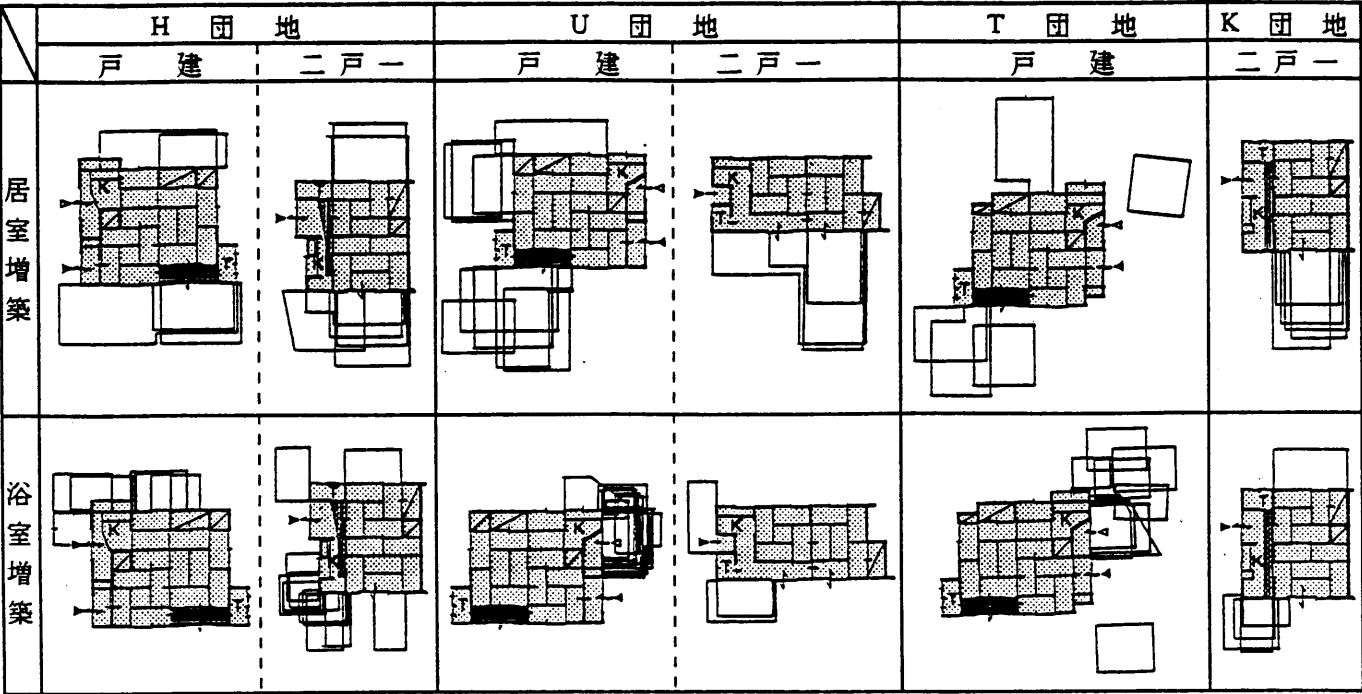
こうした機能の付加・拡充・改善行為としての増改築は、個別の住要求を充足しつつ、既成の計画を補完したり、乗り越えることで、住戸に多彩な機能の複合化をもたらしている。加えて、計画空間の機能性と対峙する意味性を帯びた空間が生成されている。

ロ) 増改築の形態的な協調性

増改築は、個人的な行為であるにせよ、住み手の生活実感に根ざした独自の多方面への配慮がなされつつ、豊かな個性の表出が行われている。

団地別・住棟形式別に、増築の割合の最も高い浴室と居室の増築位置や面積規模をみると、そこには共通性が認められる（図-2）。結果として、団地毎の増築形態には一定のまとまり感や協調性が感じられる。

その要因の一つは、増築面積・母屋との接し方・退去時の原状復旧等を規定した各自治体の増築規約（表-7）が存在しているが、「離れに傘さして行く」や「母屋には手をつけられない規約なので腰壁を残し、風呂に行くには腰壁をまたいで行く〈14〉」など、住み手はそれを基本的な規範(CODE)として遵守していることにある〈11・13・14〉。そのため、母屋の改造を最小限に留めることと、母屋から出入りしやすいことが両立するように、居室では、縁側（戸建て）や6畳和室（二戸一）の掃き出し窓が、また浴室の場合は勝手口（U・T団地戸建）や増築居室（H・K団地二戸一）が出入口に活用されている（図-1：典型事例⑤）。規約遵守を背景に、母屋の平面型が増築への動線（出入り）を規定することで、増築の位置に共通性を生み出している。



図一 2 機能別増築位置 [凡例：◀玄関 ◁勝手口 T 便所 K 台所 ■母屋 □増築]

表一 7 増築の自治体規約 (承認基準)

自治体	Y市(U団地)	M市(T団地)	Ku市(H団地)	Ki市(K団地)
増築種別	居室,物置,浴室	物置,底,車庫 他市の許可物	浴室,物置, 日除け	営業目的以外 のもの
増築申請書	○	○	○	○
隣家の同意書	○	○	○	○
退居時原状復帰	○	○	○	○
母屋との距離	1 m以上	90cm	60cm以上	60cm以上
増築面積(㎡)	10以下	9.9	9.9	10以下
構造	組立式	木造プレハブ	—	—
その他の基準	・南庭空地設置 ・境界線より 50cm以上離す	・撤去容易な基礎 ・瓦葺き不可	・隣家より50cm 以上離す	

表一 8 増築時の配慮 () : %

内容	団地名	U団地	T団地	H団地	K団地	全 体
他住戸に対する 配慮重視		6 (35.4)	3 (37.5)	4 (44.4)	3 (30.0)	16 (36.4)
自住戸の 生活重視		4 (23.5)	4 (50.0)	3 (33.3)	2 (20.0)	13 (29.5)
両者を配慮		7 (41.2)	1 (12.5)	2 (22.2)	5 (50.0)	15 (34.1)
合 計		17	8	9	10	44

また、居室の増築規模も、9.9～10㎡以下の規約が概ね遵守され、4.5畳～6畳程度の増築に集中している〈意11〉〈典型事例②③⑤〉。「出窓をフルに活用して、規約の面積内に収まるように工夫した(③C)」などは、面積規約に対する遵守意識の強さを象徴している。

二つ目には、「庭がどこも同じ大きさで、(増築を)出す場所が一緒だから、増築のつくりは殆ど同じである〈10〉」など、各住戸の敷地形状が、団地毎、住戸の構造形式毎にほぼ同一であるために、増築の位置と規模が共通に決定されることである〈9・10〉。同じ住戸平面でも、敷地のゆとりがU・T団地の戸建では勝手口前〈典型事例⑤⑥〉なのに対して、H団地戸建では住戸北側〈典型事例②〉にあることにより、浴室の増築位置が団地内の共通性と団地間の相違(図-2:U・Tでは勝手口前、Hでは北側)を引き起こしている。

団地毎の平面的な共通性に加えて、増改築の形態的な協調性も見られる。「同じ並びの家の増築を見せてもらって、(中略)参考にした〈7〉」など、より良き増改築を実現するために、近隣の先行事例を参照することにより、また、団地に居住する同一の大工に依頼することで(典型事例②③)、同一形態が団地内に伝搬する。

母屋(計画的に供給された住戸)を増築形態・仕様の規範とする意識も見られる。「母屋と違和感がないよう外壁には『木目のトタン』を選んだ〈30〉」というように、増築を母屋と景観上連続させて調和や馴染みを図ろうとする意識や、「(各々が)自分のところをきれいにすると全体がきれいになる〈31〉」など、個々の増築を全体に協調させるような配慮、あるいは団地の中で自住戸の位置する場所の特性を考慮して増築を整える〈32〉など、景観に対する住み手の多様な配慮によって、形態決定の自由度を自律的に抑制するような意識が見て取れる。

増築の際に住み手は近隣や自住戸に対して、日照や通風などの環境条件の確保・プライバシーの保護・外観の調和等に関する配慮をどのように行っているかのアンケート調査の結果を表-8に示した。自住戸だけでなく、近隣に対する配慮も7割の世帯で行われている増築の際に隣家の同意書が必要という増築規約の影響もあろうが、具体的には、日照・通風などの環境条件の確保のために増築規模や位置を検討したり〈19〉、視線・音から近隣のプライバシーを保護するために開口部の位置を工夫する〈21〉といった相隣環境に対する配慮。あるいは、「境界のブロック塀をつくるとき、隣が老人世帯だったので、行き来ができるように一部開けてある〈22〉」というような、近所付き合いを増築によって阻害しないような配慮に満ちた関係保全の発想など、住み手は、良好な近隣関係を保持するために増築の形態を自律的に調整する意識を有している。一方、近隣に対する配慮が行われないのは、敷地が広く増築が近隣に悪影響を与えないという住み手の判断によるものであ

る〈20〉。いずれの場合にも住み手は、増築によって近隣関係を悪化させないことを最低限の暗黙の規範として、付き合いの程度や相隣環境等に対する住み手個々の柔軟な判断により、増築形態を自律的に調整している。

「計画（母屋）」・「場所性」・「全体性」・「近隣関係」などは、住み手が増築の形態を決定する際の規範となることで住み手の自律性を触発し、増築を自分勝手に行うことを抑制するような多様な秩序感を住み手にもたらしている。

ハ) 増改築の個性・合理性

位置・規模等、平面を規定する基本骨格の部分や形態に関しては、統一性や協調性を生み出しながらも、開口部の位置や大きさ、屋根形状や棟の高さ、仕上げ（仕様）など、立面の形態デザインや材料選択では、住み手個々の価値観や住要求が反映され、個性的で多様な増築が見られる。

具体的に一つには、「『長男を下屋に住ませてはいかん』と主人が言ったので、増築では、（中略）切妻と玄関をつくった〈27〉」という格式性重視、「トイレ脇に入口を考えたが『そこは裏鬼門』と言われ入口を変更した〈17〉」という家相重視、「増築に独立して入口をつくと人の出入りがわからない。母屋を通るようにしドアもつくらなかった〈18〉」という開放的な親子関係の希求など、住み手の個別の価値観や思い入れが増築の形態に積極的且つ自由に活かされていることである（他に16・28等）。そうした「価値の投影」によって、増築空間には意味とアイデンティティが付与され、計画の画一性に対して、個性的な場を創出している。

二つ目は、住み手は自らの将来の生活変化を他の誰よりも的確に想定するという有利性を活用して、変化を前提にすることで、時間的・経済的に合理的な増築が行われることである。定住意識が希薄な場合には、転居を予定して安価な増築にしたり〈33〉、あるいは、「増築部に瓦を載せたのは将来自分の家を持ったときにそのまま物置に再利用するため」など、増築を転用することや材料のリサイクルを予め考慮すること〈24・25〉が行われている。また、将来の家族構成の変化を確実に予測できる有利性を生かし、「子供が高校を出るまでの3年間で良いから、一番安い材料で簡単につくってもらった〈26〉」など、期限付き利用を是とする仮設性のある仕様の例がある。生活をダイナミックに変化するものとして動態的に捉えることにより、時間を考慮した経済的な合理性が窺われる。

三つ目には、所定の機能や目標を確保・実現できる範囲で、「適材適所」が重視され、仕様や形態に柔軟性を持たせて肌理細かく対応していることである。増改築による機能実現とそれに伴う財政的な負担の均衡・両立を図るような合理的な価値観である〈23〉。増

築機能別の屋根形状・仕上げの関係からは（図-3・4），居室・水廻り・物置と形状が切り妻から片流れに，仕上げも鉄板から波板へと移行している。典型的な事例では，居室（客間）は切妻・瓦屋根，居室（子供室）は片流れ・瓦葺き，浴室は片流れ・スレート葺き，物置、庇は片流れ・波板葺きで，棟の高さも徐々に低くなるというように（図-5），増築の機能や重要性に応じて，材料や形態のグレード（質）を変えるといった住み手独自のヒエラルキーと制度に束縛されないが故の融通性が存在している。在来の計画における均質化された空間と対照的な「変質化された場」が生成されている。

二) 小括

住み手による増築は，計画（母屋の平面型や形態）や自治体の管理規約などの既定の「外在的規範」と、規約に対する遵守意識や相隣環境，近所付き合いへの配慮、全体性・場所性などの秩序感等、状況に応じて柔軟に判断される住み手の「内発的規範」といった他律的・自律的秩序の両者を基本的な指針とすることで、形態デザインの自由度を自己規制している。と同時に、住み手の自己実現の機会として伸びやかな個性表現や、住み手独自の価値観に基づく、計画とは異質の、合理性に満ちた柔軟な増改築が行われ、調和と多様性のある集住環境が生み出されている。

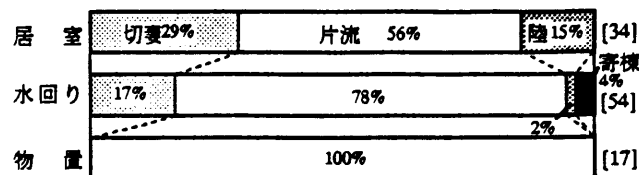


図-3 増築機能別の屋根形状

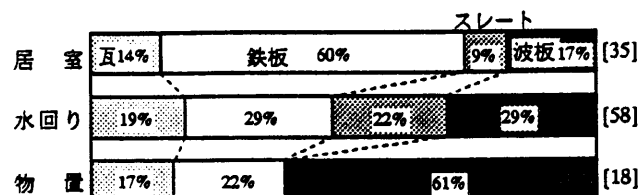


図-4 増築機能別の屋根材料

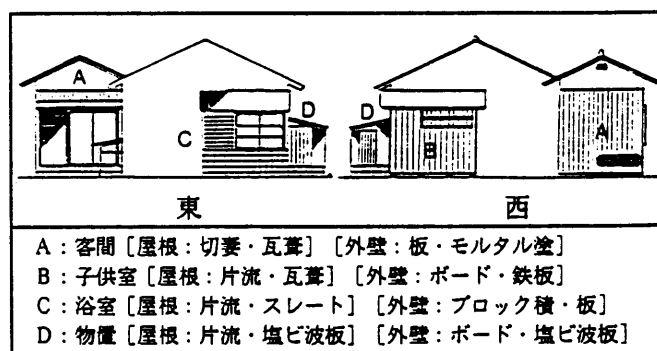


図-5 機能別材料のヒエラルキー例<典⑤>

（２）施工過程における増改築の特性

従来の住宅供給における生産と使用が分離する傾向に対し、増改築を施工する際には、両者の融合が図られている。増改築の施工は、大工などの専門業者、住み手によるセルフビルド、あるいは基礎工事は専門業者、上屋は住み手のセルフビルドといった分担・共同による場合があるが、いずれの場合にも施工者と使用者が密接な関係性をもっている。ここでは、住環境の生産者と使用者が融合したり、同一であることの意義について考察する。

専門業者が施工する場合、殆どは住み手の知己が選定されている。そこには、知り合いに頼むことで、できる限り安くつくって貰おうとするコスト低減に向けての経済性が窺われる〈34〉。また、既知の業者に対する技術的な信頼性に期待したり〈36〉、団地居住の大工に依頼することで、増築によって近隣関係を悪化させないように配慮する例も見られる〈35〉。加えて、施工過程において作り手と住み手との間に良好なコミュニケーションが生まれ、より良き増改築が実現されるという作り手と住み手の接近性が、施工過程で有効に機能している事例も見られる。〈37〉

増改築の施工過程での最も大きな特徴は、住み手が施工に直接関わるセルフビルドが頻繁に行われていることである。「風呂場は日曜大工で4〜5週間かけて造った。古材を買ってきたので全部で12万円で出来た〈39〉」というように、セルフビルドは、増改築に要する経済的な負担を軽減することを直接的なモメントとしてはいるが、セルフビルドが生成する種々の意味（物語）は、在来の集合住宅計画が対象とし得ない住環境形成に関する課題や価値を提起している。

セルフビルドによる増改築には、「風呂場は使えるが完成ではない、天井もこれから少しずつ仕上げていく予定〈40〉」のように、優先的に造るものとそれ以外の部位を仕訳し時間をかけて少しずつ完成させるといった時熟のプロセスを内包していること〈他に41〉、「父親が（中略）増築後の2段ベッドも自作した。息子が大きくなりすぎたので、途中でサイズを大きくし直した〈42〉」など、生活の経時的な変化や偶発的な出来事に逐次対処してセルフビルドを継続するといった機動性と柔軟性を有すること、「毎朝7時に起き、球磨川の石を拾い風呂の縁に並べた〈44〉」といった多様な材料の組み合わせによる親密で身体感覚的な場が生成されること〈他に43〉、「風呂場を造るのに転出した居住者の車庫の屋根を買ってきて、下をブロックで造った〈45〉」など、材料をリサイクルしながら活用すること、「風呂の材木が大きかったので、余った部分を切るのがもったいなくて、庇を造った〈46〉」など、偶発的な出来事による増改築の連鎖（他に典型①）等、実に様々なエピソードに彩られている。計画による無機的、画一的、静態的、予定調和的な空間とは対極に位置づけられるような多様な意味の込められた、あるいは意味を生成する場づく

りやアイデンティティの獲得が見られる。

さらにセルフビルドは、住み手自らの手作りによる住環境の創造という点で、創造活動の本質的意味をはらんでいる。即ち、特技や趣味を生かすことで、「（セルフビルドの）神様『主人は何でも出来るんです』（79）」など、個性の表現や自己実現の機会となり〈他に47〉〈典型事例③〉、住み手のブリコラージュ（手先の器用さ）ぶりを生かすことで、人間性の回復や生活歴の形態化、記憶の蓄積にもつながっている〈49〉。そのために、セルフビルドに対する住み手の満足感や充実感は極めて高いものがある〈52〉。

Ⅱ－1－3．増改築が生成する意味

従来の集合住宅計画は住空間の機能的側面を重視し、空間が介在する意味作用に関しては希薄だったように思われる。これに対して、増改築行為は、住機能を向上させるだけでなく、住み手に対して多様な意味をもたらしている。特に、住み手が自律的に空間を獲得する過程とその結果としての専有できる空間の存在は、従来の計画が住み手にもたらした意味とは異質のものである。

（1）増改築に対する住み手の評価

増改築の結果、住機能が改善され便利になった〈61〉や、開放感がでた〈62〉など、増改築によって生活の幅が広がり、ゆとりが生まれたり、住まいらしく整えられたことが、住み手には評価されている。その一方で、増築面積が不十分なことや子供部屋の増築によって親子関係が疎遠になったことに対する不満〈66・67〉、居室の増改築によって日照・通風などの母屋の環境条件の悪化、南側の専用庭が縮小したことに対する不満がみられる〈68・69〉。これらは、増改築に際して住み手の相反するような価値観の間での調停がうまく行われずに、それらがトレードオフ的に判断されて増築が行われた結果であろう。

（2）住まいに対する愛着や誇りの高揚

増改築は、住まいに対する住み手の愛着や誇りを高揚させる。「借家に住んでいても増築部分だけは我が家である〈74〉」や「手を加えることで我が家に思えてくる〈73〉」など、他律的に供給された公営住宅が、増改築によって個性的な我が家らしさというアイデンティティや専有性を獲得し、持ち家のような意識へ転換されていることが、住まいに対する愛着や定住意識を高めることにつながっている〈73・74・75・76〉。同時に、増築に対する住み手の満足感もそれを助長している〈61・62〉。

また、「増築すればきれいに住める。外観よりもみんな住戸内をきれいにしている〈77〉」ように、増改築は、我が家に対する誇りや自ら形成してきた住環境に対する自信を高めることで、自律的な住環境形成や維持・管理を発展的に継続させるモチベーション（動機付け）となり、住環境の時熟が促進される。

（3）増改築が生起する個性的な使い方

増改築空間は、単に機能的に使用されるのではなく、多様な意味を生成しつつ個性的に使用されている。

一つには、「手作りの部屋を主人専用の場として使っているが、自分の物を色々置いて、ここから決して出てこない〈80〉」など、セルフビルドによる居室を「自分の城」のようにしつらえ生活の拠点にするような愛着のこもった使い方や〈他に81〉、「とっておきの部屋」として上客の応接や趣味活動（茶道）などのハレの行為の場になる〈82〉〈典型事例⑤〉など、増改築した空間故に、思い入れを込めてしつらえ、使用する「愛着的使用」が見られることである。

二つ目には、広い増築スペースのある住戸が、団地の寄り合いの場を提供したり〈典型事例①〉、「当時、周辺の人がうちの五右衛門風呂に入りに来ていた。風呂上がりに、お茶飲んだり、麻雀、トランプなどをして楽しかった〈84〉」など、他者に先んじて浴室を増築した家が貰い風呂に活用されるなど、増築時には意図せずとも、結果的に増築空間が、団地の中で相対的な独自性や先進性を持ち得たことが、こうした偶発的な近隣の使用を喚起し、誇りや楽しみを生成する「近隣使用」である。

三つ目には、「増築では、長女（下半身不随）がベッドから手の届く範囲に何でも置けるように柵を造った〈86〉」という障害のある家族に適合するような機能的増築を行い、それをうまく使っている事例や、親子間の交流を重視した開放的な子供部屋をつくることにより、親密な親子関係が保持されている事例〈87〉など、個性的かつ明快な生活イメージが空間化されたことで、独特の使い方が生起する「特化使用」である。

個性的な使われ方は、増改築によって住要求の個別性と具体性が空間に的確に投影されることで、個々の増築が、意味と機能において独自性を持ち得たことに起因している。

Ⅱ－1－4 増改築の促進・抑制要因

増改築は、住み手が生活していく過程で顕在化した住要求を直接的なモメントとして展開されている。母屋が木造の場合には特に手が加えやすいなど、構造的な特性がそれを支えている。ここでは、増改築を促進・抑制する要因を検討する。

(1) 定住意識

入居当初と現在の定住意識を比較することで、

- ・〔定住型〕：入居当初も現在も常に定住意向をもつ
- ・〔定住移行型〕：入居当初は転出意向だったが、現在は定住意向に変化
- ・〔転出型〕：入居当初も現在も常に転出意向をもつ

の3タイプ（＊〔転出移行型；定住から転出へ変化〕は該当世帯なし）に分類し、各タイプ別に増改築の状況を（表－9）に整理した。

増築箇所に関して、各タイプともに、浴室や居室の増築はそれぞれ10割、7割前後を占めてほぼ同様の傾向を示している。一方、タイプ毎の違いは、「定住型」が物置や母屋の改造を伴う台所増築が、5割前後見られるのに対して、「転出型」では、代わりに「庇」の簡便な増築が85.7%を占め、「定住移行型」は両者の中間的な性格を有する点にある。

母屋の改造は、〔定住型〕や〔定住移行型〕で過半数を占め、「ずーっと住み続けたい」と思っている以上は、自分達の使いやすいように手を加える〈90〉」のように積極的な取り組みが顕著であるのに対して〈他に91〉、逆に「転出型」では14.3%と低く、生活に必要な最小限の増築に留める傾向が窺われる。プレハブ居室の採用も〔定住型〕では1割程度なのに対して、〔転出型〕では3割弱を占めるなど、増築を転用も考慮しつつ簡便に済ませようとの意識がある〈93〉。

定住意識の差異は、定住に向けて各自の意図する生活実現のために増改築を本格的に行うか、転出の際の原状復旧を前提にして最低限の箇所を簡便に行うかの違いを生じている。

そうした程度の差はあるにせよ、定住・転出ともに、他律的に供給された公営住宅が状況に合わせて改変する対象とみなしている。一方で、定住意向が増改築を促進し、それがさらに、定住意識や持家意識を高めるという増改築との間の相乗作用が認められる。

表－9 定住意識タイプ別増改築（ ）：％

定住タイプ	増築箇所					増築の特性	
	浴室	居室	庇	物置	台所	プレハブ	母屋改造
定住型 (19戸)	19 (100)	13 (68.4)	11 (57.9)	10 (52.6)	8 (42.1)	2 (10.5)	12 (63.2)
定住移行型 (21戸)	21 (100)	15 (71.4)	17 (81.0)	10 (47.6)	6 (28.6)	5 (23.8)	11 (52.4)
転出型 (14戸)	14 (100)	11 (78.5)	12 (85.7)	3 (21.4)	1 (7.1)	4 (28.6)	2 (14.3)
計 (54戸)	54 (100)	39 (72.2)	40 (74.1)	23 (42.6)	15 (27.8)	11 (20.4)	25 (46.3)

（２）領有性のある余地空間

接地型の古い公営住宅は、増改築を喚起しつつそれを受容する。当時の計画は、住宅不足に対応する大量供給の時代にあつての住宅の考え方は、最低限の居住性能を保証するというものである。年数の経過とともに相対的な狭小性や居室数の不足、浴室の不備や台所設備の前時代性（土間、竈、コンクリート流し等）などによって、結果的に住み手の生活に不便を強いてきた。計画と住要求との不適合性や〈意94〉、画一的な計画のために個別の住要求を満たしえないといった不能性によって、住み手の自主的な増改築が喚起されている。

同時に、各住戸の接地性、および、個々の宅地が植栽や柵で仕切られることで、明確に専用領域化していたことが、住み手に「各自に割り当てられた土地の中は自由に使える」という領有感をもたらし、増築に向かう意欲を触発している〈95〉。各々の宅地の管理責任は、個々の住み手に分担・付与され、併せてその使い方も計画によって規定せずに住み手の自由裁量に委ねられた「余地空間」としての性格を有していたために、自主的増築を受容する場となり、その促進に寄与している。そのことは、空間の隅々まで計画し尽くし、住み手を可能な限りコントロールしようとする在来の計画に対する問い直しを提起しているように思われる。

（３）増改築に関する規約

自治体で設定された増改築に関する規約（表－７）は、増改築の形態に強い影響を与えるだけでなく、増改築行為そのものの促進・抑制にも作用している。規約の範囲内であれば増改築が許容されることは、「書類を出せばいいという感じだから、増改築に対して気兼ねはしない〈96〉」のように、増改築を促進する作用を有している。

反面、「役所に申請して許可が出ないと増築できない。（中略）やたらに増築は出来ない〈97〉」など、規約の存在自体が、増築の抑制に作用しており、特に、規約の内容を逸脱した増築を行おうとする場合や、増改築のための申請手続きに対する煩雑感などが〈98〉、増築を消極的にしている。

住み手は、そうした規約の存在を強く意識しながらも、住み手によって、ネガティブにもポジティブにも捉えられている。「最初、風呂は母屋から離して造った。役所の許可が下りてから、母屋と一体的で直接行けるように造り直した〈100〉」など、規約の遵守と逸脱とを柔軟に往来しつつ、したたかに増築を展開している〈他に99〉。

(4) 近隣との相互関係

近隣との相互関係が増改築を促進するのは、「他人がするから、自分も増築する」というように、他者の行為に触発されて増改築が連鎖的に団地内に波及することや〈101・102〉、良好な近隣関係により近隣と共同して増改築を行う場合である〈103〉。

さらに、「自分の土地に自分で好きなように作るのに口を挟めない〈104〉」のように、増改築が専用領域での私的行為として暗黙のうちに了解されることや、「お互いに、増築に対して少しの我慢も必要〈105〉」という譲歩や理解など、「近隣からの配慮」と、相隣環境の悪化を懸念して近隣に増築の了承を受けたり〈106・107〉、工事騒音の低減を図る〈109〉などの自律的な「近隣への配慮」とによる「配慮の相互性」が増築を潤滑化している。近隣関係に支えられた自律的な相互調整により、増築が許容・促進されている。

逆に、良好な近隣関係が形成されていない場合には、相隣環境条件への過剰な配慮から増築を断念すること〈110〉や相隣環境の悪化を盾に、増築に対して抵抗する〈111〉等、増築の抑制に作用する。

(5) 増改築を抑制するその他の要因

そのほかに、家族人数が少なく、住戸の狭小性や居室数不足が問題にならない場合、増築の費用を捻出できない場合〈112〉には、当然増築は進まない。しかしながら、「家に日が当たらない、風が通らないのは嫌いなので庇は出さない〈113〉」という増築による環境条件の悪化、「子供に目が届いた方がよいので、個室は増築しない〈114〉」という住み手の生活価値観に基づく生活スタイルの堅持、将来予測〈115〉等、空間や制度などの他律的な制約ではなく、住み手自らの意志によって積極的に増築しない場合も見られる。

II-1-5 増改築の連鎖性—新たな環境形成行動の喚起

一旦増改築が始まるとそれが新たな増改築へと連鎖的に波及し、他律的な空間が自律的な場へと転換・拡大されたり、増築に手を加え続けることで空間の魅力が深化する。増改築の連鎖系の状況を取り上げ、人間—環境系の相互浸透過程の進化とそこにみられる増改築の意義について考察する。

(1) 増改築による新たな増改築の触発

増改築が連鎖的に展開されるのは、一つには、例えば増築と母屋の隙間に新たな増改築を行う〈50〉や、増築した庇の下に浴室を作るなど、当初の増築に新たな増改築を付加す

る場合である。増築によって生成された隙間や空間が、新たな増築を喚起する潜在力を持つことによる。

二つ目には、増改築に対する充実感や満足感など増改築が住み手の心理的側面に作用し、「また作りたい」という意欲をかき立てることである〈52〉。

三つ目には、特に、セルフビルドの場合によく見られるが、一旦増築した空間をさらに改造することである。当初の増築を最低限の機能充足から始め、その完成に向けて段階的に改造していく、一度作った増築をその使い勝手や外観の改善を目指して、試行錯誤的に改造を続ける〈51〉〈典型事例④〉等である。そこでは、使用を通して増築空間の使い勝手や美しさなどが検証・評価され、それを踏まえて増築空間を徐々に改善し、質的向上を図る「使用－評価－改善」のサイクルによる増築空間の進化の過程が窺われる。その背景には、母屋は借り物だから手を加えにくい、増築した空間は自分のものだから手を加えやすいという、増築空間が住み手に専有空間として捉えられている状況が見て取れる〈54〉。増築空間に対する専有意識は、住み手が環境に対して能動的に働きかける契機として、増改築を展開する上での基本的な要件であることを示している。

さらに、前住者から増改築を譲り受け、それを各自に相応しい環境に改造する事例も見られる。

（2）母屋の改造

退去時の原状復旧という規約により、一般的には母屋の本格的な改造が躊躇されるのに対して、増築を契機として母屋の改造へ向かう場合がある。浴室等の増築の際に台所も一緒に改善し、水回り全体を整備したり〈55〉〈典型事例②〉、増築に合わせて母屋の床貼りを同じ材料に替えたり、増築と母屋を連続させるために母屋の壁を撤去する等、増築と母屋との仕上げやデザイン上の一体感や空間的な連続性を高めるために、増築に主導されて、形態的・機能的に整合するような母屋の改造もある〈56〉〈典型事例②⑤〉。また、増築の新しさや雰囲気の良い等が母屋の質の相対的な低下をもたらすこと、あるいは増築に対する満足感に触発されて、母屋を改善する事例がある。

増築は、本来新たな空間の付加行為であるが、それによって、住まいづくり（Housing）に向けての住み手の関心と意欲の対象が、住戸全体へ拡張されていることを示している。即ち、住み手と住まいとの間の相互浸透的な関係の進行により、退去時の原状復旧という規約を逸脱してまでも母屋の改造へと拡張、深化し、他律的に供給された住戸が自律的な場へと変容している。

（３）維持・管理意識の高揚や共空間の自律的改変

増築行為は、その連鎖を喚起することに留まらず、住戸全体の維持・管理に対する住み手の自律性を高める。住戸の維持・管理の主体は通常、所有者である自治体にあるが、それを自治体に委せきりにするのではなく、住み手も積極的に関わっている。自律的な住まいづくりによって、身の回りの環境を自らのものとして整えていくことが、結果として、「家のなかのことは市に頼んだことがない、自分の出来る範囲で、手を入れようと思っている〈57〉」のように住み手に自律的な維持・管理意識を生み出している〈他に58〉。

また、そうした自律的意識は、住戸及び住戸回りの専用庭といった私空間内に留まらず、共用空間にまで拡張されている。例えば、ゲートボール場の小屋をセルフビルドで作ることや植栽を施して溜まり場を作るなど、住み手の自律的な環境形成行動が団地全体に展開されている〈59〉。

（４）連鎖系の意味

こうした増改築の連鎖系は、人間－環境系における相互浸透的な関係の展開と深化を意味し、自律的な環境形成行為（住まいづくり）が増築部分に留まらずに住戸全体、あるいは団地全体に拡張されている。連鎖系は、予定調和的なプラクシスではなく、実践の中に多様な価値が浮上し、状況に応じて偶発的（Ad-hoc）に方向付けがなされるといったブラチックなものである。住まいを含めた集住環境の全体が固定的・画一的なものでなく、経時的に変化・時熟する動的なものに転換されている。と同時に、匿名的な空間が、住み手個々の身体化され、多様な意味を帯びた自らの場へと変容している。

(1) 計画的集合住宅における自律的増改築の意義

住み手による住まいの増改築に焦点をあてた自律的な環境形成行動が、計画的集合住宅における住環境の質的側面に対して、いかなる意義を有するのかを以下にまとめる。

①自律的な増改築は、ステレオタイプ化した集合住宅に、個別の生活の具体性、住要求、生活価値を形態化（写像）することである。即ち、住み手の匿名性を前提に画一性や全体性に傾斜した在来の計画が想定し得ない、あるいは計画では実現し得ない、空間の個性化、身体化による自らの場の創造である。

それは、住み手の生活が計画に整合しないことを調整すると同時に、計画による生活の一義的な規定を越えて計画とは異質の、個々の生活の差異を担保するための巧みさ、状況の機微に対応する柔軟性、あるいは肌理の細やかさを有する環境形成である。

②その場合、従来二律背反的に捉えられていた全体性と個別性の関係は、計画と増改築の関係においては、両者が重層化することで、両義性として捉え直すことができる。即ち、増改築は、計画された空間からの制約や自治体の管理規約などの外在的規範と近隣関係や景観・場所性・全体性に対する自律的配慮といった住み手の内発的規範とを基盤としながら、伸びやかに個性が発現されることで、全体性（秩序）を保持したまま、同時に個別性を実現する点に意義がある。

そのことはまた、増改築が住み手の私的・個性的な行為であっても、多様な規範意識が作用し、増改築の形態化における自由度が自己規制される自律的行為であることの証左である。

③住環境を使用するレベルに留まることなく、住み手自ら住環境の創造に能動的・持続的に関わることで、固定的空間計画によって生活が一方的に規定される静態的關係からの転換が図られ、人間と環境との相互浸透的な動的關係が生成される。

それは、住環境が可変なるものであることを意味し、住み手に対して、自らに相応しい環境は自らの手で創造するという確信と「自律的な環境態度」を醸成し、より良き住環境形成に向けて住み手の関心や意欲を高揚させる。

それによって、住環境の創造や維持が、時間・空間・主体の広がりにおいて持続的・発展的・連鎖的に生起し、住環境が時間とともに多様性を深めつつ有機的に変化し、熟成していく「時熟」を生み出す。

④住み手自ら環境を創造する過程、及び、それを使いこなす過程は、住み手の自律性を基調とするが故に、他律的な空間を使用することを越えた多様な意味や意味の込められた場

を生成する。それによって住まいは住み手にとって、自らの身体化された親密（Intimate）なものとなり、住まいに対する愛着を高め、集住生活を豊潤化する。

⑤こうした住み手による自律的な住環境の形成行動は、計画によって誘導された予定調和的なプラクシスなものではなく、住み手が生活を重ねる中で、偶発的に生み出されたブラチックな行動である。

（２）集住環境生成行動を触発するための計画的条件

すべてを完備した空間を計画供給せずとも住み手は自らに相応しい環境を自らの手で自律的に創造する力を有している。それを「生活の力」と呼ぶならば、住み手を取り巻くヒト・モノ・コトに関する諸々の状況を包摂的に受容（Inclusive Capacity）した上で自律的に秩序化し、住環境を柔軟に再編成・再創造する「生活の力」を触発することに向けて、目標とその実現手法の間に直線的、排他的（Exclusive）な論理を潜ませつつ、住み手を規定・操作してきた「計画の力」を「創発の力」へ転換することが求められる。

①計画は、住み手の生活を規定し教導するのではなく、住み手の主体的な環境形成行動を触発するよう、従来の「強い計画」から「弱い計画」へ転換することが求められる。即ち、住環境は、住み手の働きかけを阻害するような硬質で、固定的なものではなく、寧ろ空間の生活規定性や形態の厳密性を「リザーブ（Reserve）」するような留保性・余地性・可変性が必要である。住み手の集住環境の創発を触発するために、創り方や使い方における住み手の自由裁量を担保するような計画が望まれる。

②住み手が集住環境を創発するための「弱い計画」は、計画の放棄（Unplanned）を意味するのではない。寧ろ、創発的方法が向かうべき方向は、住み手の自律性を触発するために、住み手自らによる内発的秩序づくりを支援しつつ、同時に、住み手の生活を規定するのではなく、「共有規範（CODE）」として住み手間に了解され、参照されるような外在的秩序づくりにあると思われる。

それは同時に、生活を動態として捉える住み手がダイナミックに集住環境の創発に向かうことを触発するような規範となる必要がある。

③住み手の内発的な秩序づくりに対しては、ヒト・モノ・コトの多面的な関係化を促進することで、住み手が常に他者や環境との間で、自己の存在・位置を認識し、自己生成することにその糸口がある。即ち、秩序づくりは、多様な主体間の「関係性のデザイン」であると言えよう。

そのためには例えば、空間構成において、公・共・私の空間領域と生活行為とを一義的に対応させるよう、その区分を分画的に行うのではなく、「領有」概念など、多様な性格

の行為や領域を重層的に融合させることを促進する方法が有効だと考えられる。

④従来の計画が些か、ハード面に傾斜していたのに対して、ヒト・モノ・コトの関係化や、計画の力と生活の力が相互浸透的に触発・作用しあう関係を動機付け、促進するために、ソフトな仕掛「ことづくり」をも創発の計画の一手法と見なす必要がある。

⑤住み手に対する計画のスタンスも、従来のような計画によって教導・規定される対象から転換し、集住環境の持続的創発のパートナーとして住み手を位置づけ、両者の特性を生かして相互作用を生成することが求められる。

注

- 1) 「強い計画」とは、計画（空間）と生活との対応関係において、計画が生活を規定する拘束力の強さと対象の広がり著しく、住み手が環境づくりを行う余地を残さない計画と定義する。
- 2) 延藤安弘・横山俊祐・古川智博「コーポラティブ住宅の計画研究としての方法的位置づけ—ユーコートの特質とその計画原理（1）」 日本建築学会計画系論文報告集 第396号、p.14,1989.2
- 3) 西山康雄『イギリス都市計画の歴史的構造—物象主義の系譜—』（博士論文）、pp.26-36,1977.11
- 4) 高橋鷹志「人間—環境系の計画手法」 『建築雑誌』 vol.104,No.1288,日本建築学会、pp.145-146,1988.8
- 5) 増築とは、母屋（当初供給された住戸）とは別に新しく建て増すこととし、改造とは、母屋や増築部を改変することとする。増築と改築の両者をあわせて増改築とする。また、環境形成とは、建築空間・外構・植栽等の住環境を実際に作ったり、既存のものを変えることとする。
- 6) 重村力・他「千里ニュータウンの成熟にともなう計画外非居住空間の発生」 第19回日本都市計画学会研究論文集、pp.475-480,1984
- 7) 佐藤滋『集合住宅団地の変遷』鹿島出版社、1989
- 8) 松本恭治・他「都市住宅の生活史的考察 その1～その7」 日本建築学会大会学術講演梗概集、1972～1977
- 9) 大月敏雄『住環境形成過程に関する実証的研究—同潤会柳島アパートの例を通して』（東京大学修士論文）、1992.3
- 10) 宇杉和夫・他「公営住宅の増改築に関する研究 その1～その2」 日本建築学会大会学術講演梗概集、pp.965-968,1977
- 11) 小川正光「テラスハウスの増築に関する研究」 日本建築学会大会学術講演梗概集、pp.945-946,1980

Ⅱ－２ 積層型公営住宅における住み手の自律的集住環境形成と維持管理

Ⅱ－２－１ 研究の目的

本研究は、昭和 28 年から昭和 36 年にかけて建設された公営住宅を取り上げ、建設後 30 数年経過した時点でのハードソフトの環境の「時熟」の状況を明らかにし、それを踏まえた団地更新の新たな計画手法の構築を試みることを目的とする。今日、こうした長い時間が経過した集合住宅団地は、構造・面積・設備面での老朽化や画一的な空間計画から、空間の陳腐化が指摘されている。

対象とする熊本県営 H 団地もそうした老朽化の側面が顕著で建替が予定されている。加えて、住戸・住棟計画は、RC 造積層型による非接地性と固い仕上げのために、住み手による増改築はほぼ不可能であり、また管理規約では退去時の原状復旧義務が謳われ、ハード面の環境に対する住み手の働き掛けを阻害しがちだと思われる。住棟間のオープンスペースは、当初無計画とも言える状態からスタートしている。そうした条件の下で、住み手の働き掛けがどのように作用し、その結果どのような質的特性を有する集住環境が生成されているかを明らかにする。

特に、当初の均質・画一的な住戸・住棟計画と無性格な住棟間スペースに対して、住宅とその周りの環境をセットにして住む居住者が、その空間や他者との間に「自己生成」的なムーブメントを持続的に生起することで、個性的な住みこなしや変化に富んだ有機的な外部環境へと改変している。他律的・計画的に供給された集合住宅団地を、住み手が自律的に成熟した集住体へと編み直し、進化させている事実は、極めて興味深い。そこには、住み手の「自律的環境態度」、即ち、「与えられた環境に対して、住み手が全体や他者に対する秩序感を有しつつ、自らの論理と意志で主体的に働きかける等伸びやかな個性表現を行い、環境を自らのものとして獲得すること」が通底している。そこで、既存団地において長年の間に培われてきたハード・ソフトの多様な居住資源（Housing Resource）を自律的集住環境の形成に求め、その特質や意義とそれが生成する条件や集住価値について考察する。

具体的には、住み手がハード・ソフトの集住環境に自律的に働きかけている状況に関して、以下の 3 つの側面に着目する。それらを人と人の関係や住み手の内発的な個性創出から生成する生活に価値を見出す視点から評価し、その有機的連関によって環境全体が「名状しがたい無形の質（Intangible Quality）」を獲得していることを明らかにする。併せて、それらの側面に見出される「計画の力」と「生活の力」との相互浸透作用の構造について考察を加えることも目的の一つである。

①改造に対する強い規約にも拘わらず、住戸の狭小性の克服をモメントとして間仕切の改変や棚の設置など、多様な住戸改造の実態。また、展開される生活行為に着目し、公私を区分した住まい方からの逸脱や開放型の住み方など、他律的に供給された住戸とそれが想定する住み方を、状況に応じて改造や住み方の工夫等の「住みこなし」を重ねることによって多様な住まい方へと個性化・再編成している状況。

②各住棟周りや階段室の清掃や草取りなどのメンテナンスが、硬直化した規則に縛られず、また全体性にも傾斜せずに個人や階段単位で展開されている自律性や柔軟性。

③本来、自治体側に管理権のある外部空間を菜園や駐車場として活用するといった、住み手が自然発生的に利用権を獲得し、「領有」¹⁾することによる日常的な利用と維持管理。

これらの側面は、どれも、計画的な空間による規定や規約による規制から逸脱して展開される行為である。そうした住み手の環境に対する主体的な働き掛けにおける自律性に着目し、その構造を明らかにすることも目的にしている。

Ⅱ－２－２ 調査概要

(1) 調査対象団地の概要

本研究で対象とする熊本県営 H 団地の計画概要を図－1 に示す。本団地は、昭和 28 年から 38 年にかけて建設された当時の典型的な計画である。

①全体計画：マスタープランは一切なく、用地が取得できたところから最大限の住戸数を供給できるよう、中層住棟を建設していった（図-1）。全体の住戸数は 309 戸。

②住棟：二戸一階段室型住棟 13 棟、三戸一階段室型住棟 1 棟、スターハウス型住棟 4 棟の全 18 棟で構成される。配置計画は、坂状住棟の軸線を地形に合わせて相互に微妙にずらして、対向する住棟間の視線の直達を避け、またスターハウスがポイント的に配置されている。

③住戸プラン：6 畳・4.5 畳・DK の 2DK のみで、時代を追って 3 タイプが用意されている（図-2）。「耐 8」等の建設省の標準設計が採用されている。一部住戸（A タイプ）の DK にはステンレス流しやカウンター式テーブルが設置され、当時としては非常にモダンな仕様で人気が高かった。また、物干し場や二戸で共用する続きバルコニーが設けられ、勝手口として、あるいは洗濯や物干し、行水、味噌・漬け物置き場として活用されたが、同時に、両住戸間の付き合いが行われる場所でもあった。このスペースは以後、浴室に改造されたが、現在でも続きバルコニーはそのまま残されている。スターハウスの住戸を除いて、3 つの居室は襖で仕切られており、必要に応じて開放・閉鎖・撤去が可能で可変性の高い仕様である。



図-1 配置図



図-2 住戸プラン

④外構計画：建設当初は外構の予算は一切なく、植栽は殆ど行われていない。後に、維持管理費をつかって植栽が施されるが、住み手が自主的に植えた樹木も相当数ある。住棟間の前庭は、当初は土のままだったものが建設後2～3年のうちに、各棟毎の意向を反映して家庭菜園に転用された。その一部は駐車場として利用されているものの、多くは菜園として住み手自ら維持・管理され、団地景観の熟成に寄与している。

当初はわずかに縁石を廻しただけの簡便な仕上がりによる団地内通路が確保されていた。また、車を団地内に進入させないように道路形態が複雑になっている。15棟の両端には共同の物干し場が設置され、当時は井戸端会議などの場になっていた。

⑤周辺環境：建設当初は、敷地南側に田園地帯が広がっていたが、市街地のスプロール化により、住宅地に変容した。また、敷地北側は現在では高密な住宅地となり、防災面からの問題が顕在化している。

計画概要から当時の状況を判断すると、住戸数の確保に迫られ、外構計画まで手が回らず、そのことが、住み手の自律的な働き掛けを誘発する契機になっている。また、続き間やバルコニーもその可変性故に、住み手の多様な使い方の工夫を促している。そこには、あるべき目標に向けて生活を教導・規定する「強い計画」ではなく、住み手の働き掛けを触発・受容するような余地性や可変性を有し、住み手の自律的な住まい方を助長する「弱い計画性」の可能性が窺われる。

（２）調査方法

本研究で用いた調査方法は以下の通りである。

①アンケート調査

全世帯を対象に、家族構成と入居後の変化、入居動機、定住意識及び居住者属性に関するアンケート調査を行った。（回答数 216 世帯／ 253 世帯、回収率：85.3%）

②住み方調査

居住年数、家族構成、住棟に偏りがないようにした上で、全世帯（253 戸）の約 4 分の 1 をランダムに抽出して、アンケート回収時に、住み方の履歴や住みこなしに関するヒアリング調査と家具・改造採集を行った。（調査世帯数：64 世帯）

ヒアリング調査の具体的内容は以下の通りである。

イ) 住戸内生活：入居当初からの部屋の使われ方や家具配置の変化、間仕切の設置方法の変化、改造の箇所と履歴、及び、それらの原因。

ロ) 住戸近傍・外部空間での行為：日常的なメンテナンス、家庭菜園の使用状況（入手経緯・位置・派生する行為）、駐車場の運営、表出・あふれだしの実態と意識、続きバルコニーの

利用方法、清掃活動への参加状況と意識。

ハ)集住マナー：音、視線に関する配慮、トラブル

ニ)近所付き合い・コミュニティ活動：日常的付き合いの内容、異世代間交流、付き合いの変化と意識、団地行事への参加、役員の経験歴。

ヒアリング調査においては、実態の詳細な把握と共に、自律性に関する意識や集住生活に対する価値観等を把握するようにつとめた。

③外構調査

本団地の外構の特徴である家庭菜園に関して、区画の設定状況を把握し、併せて利用者を確認した。

(3) 居住者属性

世帯主年齢は、50才台が中心でやや高齢化の傾向が窺われる。家族構成との関係(図-3)では、40才台を中心とした夫婦+子供の標準世帯と60才台を中心にした単身高齢者や夫婦のみの世帯に二極分化している。居住年数は、10～20年が全体の4割強を占めて最も多くそのうちの6割は核家族である(図-4)。また過去10年間の入居者の家族構成は、単身者が中心を占め、全体的に、本団地における居住者年齢の上昇と、社会的弱者の集中化傾向が顕著である。それには、住戸の狭小性と低家賃が作用している。

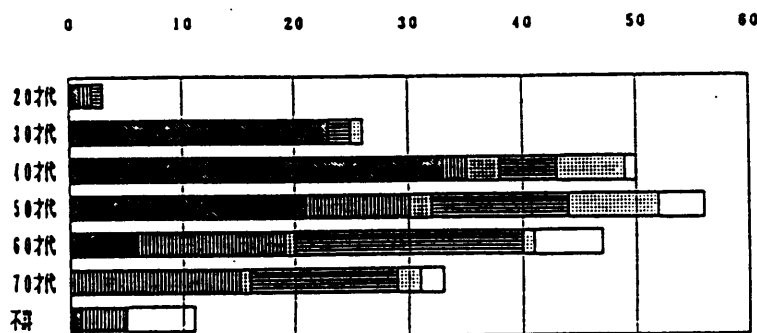


図3 年齢×家族構成

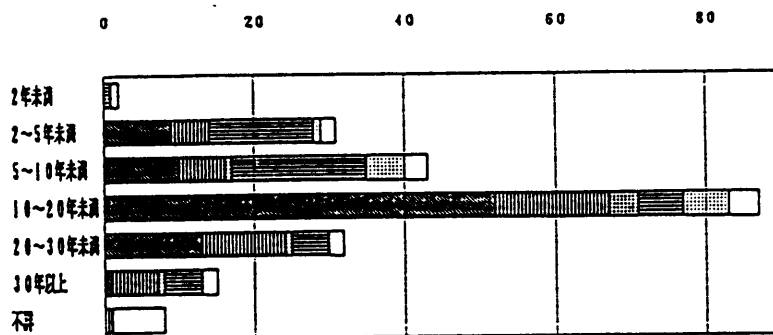


図4 居住年数×家族構成

凡例

核家族 夫婦のみ 3世代 単身 その他

住戸 番号	S29	S35	S40	S45	S50	S55	S60	H2	定住 期間
18	P sm2 sf2							P(82)	3
48	P b	Δ						P(84)	1
58	P GM GF b1 b2			x O	x O			P(82)	1
49	M P ml f1 f2 GF	Δ O						M(79) F(74)	8
42	M P ml m2 f2 f3			Δ Δ Δ				M(82) P(74)	1
2	F GF			x				P(83)	2
63	M P f1 ml			Δ				M(80) F(58) f1(30)	1
52	M P							M(72) F(78)	1
41	M P ml			Δ				M(88) F(59)	1
28	M P f1 f2							P(51) f1(28) f2(25)	2
45	P							P(60)	1
26	M P sm sf							M(83) F(80)	1
25	P s b			O Δ				F(80)	2
10	P GF							F(51) GF(85)	1
18	P m4			O				F(71)	3
51	P f1			Δ				F(80)	2
8	M P sf2 sf3							M(84) F(78)	1
9	M P f1			x Δ				F(50)	2
20	M P ml							M(82) F(85)	1 2
30	M P f1							M(54) F(34) f1(29)	1
37	P m2 f2							P(75)	3
1	M P ml m2							F(48) m2(17)	1
50	M P ml m2							M(48) F(48) m2(18)	7

住戸 番号	S40	S45	S50	S55	S60	H2	定住 期間
59	M P f1 f2					M(54) F(51)	2
60	P f1 f3					P(84)	1
27	M P				x	F(84)	1
53	M P f1 f2	Δ				F(58) f1(25) GF - GF(88)	2
57	M P ml f1 s			Δ O		M(88) F(87) s(82)	1
64	M P f1			ml		M(48) F(45) ml(12) f1(20)	2
55	M P ml					M(44) F(52) ml(18)	7 1
17	M P f1 f2					M(45) F(37) f1(20) f2(19)	6
32	M P m3 GF x					M(67) F(87) m3(28)	1
48	M P ml m2 m3 f4					M(59) F(58) m2(17) m3(17)	1
11	M P ml f1					M(49) F(51) ml(14) f1(18)	1
7	M P ml m2					M(51) F(48) ml(18) m2(15)	4
38	M P ml f1					M(42) F(48) ml(17)	5
23	P GF					P(40) f1(2)	1
36	M P f1					M(43) F(43) f1(15)	7
54	M P ml f1					M(40) F(40) ml(18) f1(15)	1
6	M P ml f1					M(38) P(35) ml(11) f1(12)	1 7
21	M P f1					M(41) F(41) ml(10) f1(14) f2(10)	6
34	M P ml m2					M(37) F(38) ml(15) m2(12)	3
40	P					F(58)	1

【凡例】 M: 夫 m: 息子 GM: 父 b, s: 兄弟、姉妹 O: 結婚 Δ: 就職・進学
 F: 妻 f: 娘 GF: 母 □: 近居 ◇: 離婚・別居

図-5 入居時からの家族構成の変化 (その1)

(4) 家族構成の経年的変化

ヒアリング調査から得られた入居後の家族構成の変化を居住年数順にみると（図-5）、入居時から家族構成に変化のない世帯は20世帯（33.3%）に過ぎず、家族数が減少した世帯が45.0%（27世帯／60世帯）と最も多い。そのうちの23世帯を居住年数15年以上が占め、長期居住する場合に家族数の減少を経験することになる。逆に増加した世帯は33.3%（20世帯／60世帯）で、居住年数20年未満が14世帯を占める。減少・増加とも、子供に関わる転出や出産が原因であり、反面、子供の居ない単身や夫婦のみ世帯では家族構成が変化しない場合が多い。

こうした家族構成の変化、さらには、乳幼児期の子供から青年期への移行など、住み続ける過程で生じる家族の変化は、それぞれの家族の住み方をドラスティックに転換させる大きな要因となっており、住み手個々の自律的な住みこなしが実践される、あるいは求められる背景である。また、生活スタイルが固定的なものではなく流動的であることが改めて浮き彫りにされている。

住戸番号	S45	S50	S55	S60	K2	定住志向
43			M ————— M(40) F ————— F(38) m1 ————— m1(14) m2 ————— m2(12) m3 ————— m3(8)			2
22			M ————— M(72) F ————— F(65)			1
24			M ————— M(40) F ————— F(37) m1 ————— m1(12) m2 ————— m2(10) f1 ————— f1(8)			7
62			M ————— M(61) F ————— F(58)			1
29			M ————— M(42) F ————— F(43) m1 ————— m1(12) m2 ————— m2(8)			2
47			M ————— M(61) F ————— F(64)			4
19			F ————— F(70)			1
31			M ————— ○ F ————— F(42) m1 ————— m1(10) m2 ————— m2(9)			7
39			F ————— F(32) m1 ————— △			3
58			F ————— F(67)			3
13			M ————— M(74) F ————— F			1
14			M ————— M(40) F ————— F(33) m1 ————— m1(7) f1 ————— f1(9)			1
44			F ————— F(62)			1
3			F ————— F(59)			1
12			M ————— M(39) F ————— F(35) m1 ————— m1(8) f2 ————— f2(8)			7
15			F ————— F(66)			3
33			M ————— M(39) F ————— F(39) m1 ————— m1(13) m2 ————— m2(7) f1 ————— f1(9)			7
61			M ————— M(32) F ————— F(35) m1 ————— m1(4) f1 ————— f1(7)			1
4			M ————— M(62) F ————— F(60)			1
5			F ————— F(56) m2 ————— m2(32)			1
35			M ————— M(41) F ————— F(42) f1 ————— △ f2 ————— f2(15)			1

【凡例】

M：夫 m：息子 GM：父 b,s：兄弟、姉妹
F：妻 f：娘 GF：母

○：結婚 △：就職・進学
□：近居 ◇：離婚・別居

図-5 入居時からの家族構成の変化（その2）

Ⅱ－２－３ 住みこなしの特性

(1) はじめに

RC 造積層型の集合住宅は、前節の木造接地型の住宅と異なり、狭小性を克服するための増築が基本的に不可能であり、また住戸に関しては、退去時の原状復旧義務という改造に対する強い規約がある。そのため住み手は、大幅な改造を抑え、限られた面積の中で「やりくり」をする必要がある。H 団地の 3 タイプの住戸プランのうち、A タイプは、DK－4.5 畳－6 畳間がすべて建具で仕切られて最も可変性が高いこと、また DK が造り付けカウンターによって炊事スペースと食事スペースに分節されていることなど、他のタイプにはない特徴を有する。オリジナルでは食事スペースとして想定されている DK の一部分は、居室に比べて面積が狭小で、開放性が高く、動線が通過している等の特徴を持ち、特定の機能を指示しない「余地空間」（注 1）として捉えられよう。使い方の自由度を高める可変性のある計画を、「弱い計画」と呼ぶならば、「弱い計画」は、住み手の自律的な働き掛けを触発し、受容する場を生み出しやすい。ここでは住戸内における「弱い計画」と住み手の「生活の力」との相互浸透関係に着目し、住み手が住戸を改変して自律的にしつらえ、個性的な生活を組み立てることの特質とその意味について考察する。

（注 1）：余地空間の活用と意味については、今田太郎・横山俊祐 使われ方からみた余地空間の評価 日本建築学会計画系論文集 第 505 号、PP.67-74、1998.3 に詳しい。

(2) 規約に対する意識と住戸改変の実態

県の管理規約では、住戸について「退去時の原状復旧義務」が定められている。そうした他律的な規約は、住み手の自律的な環境形成を抑制し、環境に対する働き掛けを阻害することも考えられる。そこでまず、規約に対する住み手の遵守意識や、それと実際の改変行為との関係を明らかにする（表-1）。

管理規約の遵守意識では、「規約を一応守っている」が 5 割強と最も多く、次いで「規約を知っているが改造を行う」が約 4 割程度を占め、逆に、規約を「絶対に守る」や「知らない」は、ごく少数である。規約は住み手に周知されていること、それに対して規約の柔らかな遵守意識と逸脱意識とが、相半ばしていることが窺われる。

実際の住戸改変行為は、全体として 1 戸あたり 7.8 件に達している。そのうち機能面の改造（間仕切建具の変更新設、棚の設置など）が 3.7 件／戸で全体の 5 割弱、次いでしつらえ（床仕上げの変更、窓や押入の建具変更、壁や天井の仕上げの変更など）が 3 割弱を

占める。いささか装飾的なしつらえに比べ、生活の組み立てにダイレクトに関わる機能面の改造が多いことが特徴である。

規約の遵守意識との関係では、意識と改造の積極性の間には強い関係はみられない。即ち、「規約を知っているが改造を行う」グループは、9.6 件／戸の改造を行っており、とりわけ、機能面の改造が 4.9 件／戸と多い。一方、「規約を一応守っている」グループも、「改造したいが管理規約があるので出来ない」という態度とは裏腹に、全体で 7.3 件／戸の改造を行っている。意識面での抑制に対して、実体面では相当程度の改造を行っており、「規約は守らなくては、でも生活も守らなくては」という生活を実践する上で必要に迫られた改変要求の強さが、アンビバレントな意識を生み出していると思える。

H 団地は、RC 造という固い仕上げと規約にもかかわらず、相当改変を行っている。機能面では、間仕切や造り付けの棚に関する改変が多い。建具の撤去・アコーディオンカーテンの設置・棚の設置など、狭小性や収納スペース不足の改善に向かっている。しつらえ面では、木床に畳の設置、襖の張り替えや網戸の設置等である。機能・しつらえともに、大掛かりな改変は見られない。退去時に原状復旧することが比較的容易な改造を中心として、規約の遵守意識と改造に対する積極性との間の両義性に「折り合い」がつけられている。また、少数であるが、障子や襖の張り替えや畳替え、壁のペンキ塗りなど、住戸のメンテナンスに住み手が自律的に関わる状況も窺われる。

表-1 規約遵守意識と改変行為

規約 遵守意識 N:人数	改変行為	メンテ ナンス	機能面 改造	しつらえ 面改造	計
規約は絶対を守る N=2		4 (2.0)	6 (3.0)	4 (2.0)	14 (7.0)
規約は一応守る N=17		25 (1.5)	33 (1.9)	66 (3.9)	124 (7.3)
規約は知っている が改造を行う N=13		30 (2.3)	31 (2.4)	64 (4.9)	125 (9.6)
全く知らない N=1		5 (5.0)	5 (5.0)	8 (8.0)	18 (18.0)
不明 N=14		23 (1.6)	30 (2.1)	33 (2.4)	86 (6.1)
計 N=47		87 (1.9)	105 (2.2)	175 (3.7)	367 (7.8)

各欄内の実数は、改変箇所総数
() 内は 1 戸あたり改変行為数を示す

(2) 建具への働き掛けと住まい方

A タイプ住戸における居室間を仕切る二箇所の建具に対して、住み手は主体的に働きかけており、以下のような開閉方法が見られる。

イ) 撤去 : 建具をすべて撤去し居室間を連続させる。

ロ) 撤去+カーテン : 建具を撤去したあとに、アコーディオンカーテンなどを設置する。必要に応じて、居室間を全開から遮断まで連続的に調整することができる。

ハ) 開放 : 常時、建具を開け放した状態にしておく。開口部の半分の連続性が確保される。

ニ) 設置 : 建具を設置し、必要に応じて随時開放、閉鎖する。

ホ) 時間による変動

- ・ 撤去(夏季) + 設置(それ以外) : 季節に応じて建具の撤去と設置を行う

- ・ 開放(夏季) + 閉鎖(それ以外) : 建具を設置しておき、季節に応じて建具を開け放したり閉鎖する。

- ・ 開放(昼間・不在時) + 閉鎖(夜間・在室時) : 一日の特定の時間帯は開放し、それ以外は閉める。

ト) その他 : 建具を撤去した上で、家具などで仕切る。閉鎖状態に比べて多少の連続性がある。

建具への積極的な働き掛けによって、多様な開閉方法が存在し、各々個性的な住まい方が実現されている。特に、開閉を越えて、建具を撤去し、居室間を一体化する事例の多さが特徴である。逆に壁の代替として居室間の建具を常時閉鎖する事例は見られず、住み手が開放的な住まい方を希求することが窺われる。開閉方法は、家族構成や親子関係、生活観、建具の部位による違いが顕著である(表-2-1・2)。DK - 4.5 畳間は、夫婦+子供や夫婦のみでは、撤去が多く、両居室を一体化して活用している。逆に単身や単親+子供では、設置が多く、必要に応じて随時開閉を行っている。一方、4.5 畳 - 6 畳間は、単身では設置、夫婦のみでは季節によって撤去や開放することが多いが、夫婦+子供や単親+子供で

表-2-1 DK畳-4.5間建具開閉状況

	撤去	撤去+カーテン	夏季撤去	開放	夏季開放	設置	家具遮断
単身 N=6	0	0	0	1	0	5	0
単親+子供 N=3	0	1	0	0	0	2	0
夫婦のみ N=8	6	0	1	0	1	0	0
夫婦+子供 N=11	5	3	0	0	0	3	0
計 N=28	11	4	1	1	1	10	0

N: 戸数

表-2-2 4.5畳-6畳間建具開閉状況

	撤去	撤去+カーテン	夏季撤去	開放	夏季開放	設置	家具遮断
単身 N=6	0	0	1	1	0	4	0
単親+子供 N=3	1	0	1	0	0	1	0
夫婦のみ N=8	0	0	2	2	2	2	0
夫婦+子供 N=11	3	1	0	1	1	4	1
計 N=28	4	1	4	4	3	11	1

N: 戸数

は、季節の違いに対応することは少なく、それぞれの家族構成や関係の違いによって撤去から設置まで多様に分布している。

こうした建具の開閉は、多様な目的で行われる（表-3-1・2：以下の文中の〈数字〉は、表中の番号に対応）。撤去や開放は、・通風や採光の確保・領域や場所の実質的拡大や一体化・圧迫感（狭小感）の解消・居室間の視覚的連続性の確保や気配の伝達しやすさ・小さな子供の自由な行き来・冷暖房の効率化（一台で複数の居室をカバー）等を目的としている。一方、閉鎖は、・落ち着きの確保・視線、音、光などの遮断・冷暖房の効率化（負荷の低減）等を目的としている。

ここで、家族型に分けて、それぞれの世帯での各居室の使われ方と建具の開閉パターンとをみると（図-6）、家族状況や生活原理に応じてそれぞれの世帯での工夫がみられる。建具開閉の目的もそれぞれの世帯での状況を反映して多様である。

表-3-1 建具開閉に関する住み手のコメント（その1）

単身者

4.5畳-6畳
広さの確保【開放】 1.「少しでも広く感じれるように、いつも開けている。お客さんが来てもそのまま」(1-13)
全体【DK-4.5畳・4.5畳-6畳】
建具の収納難【設置・設置】 2.「建具を外しても、置いておく場所がないので外していない」(3-16)
落ち着き【設置・夏撤去】 3.「狭い所の方が居やすい」(1-16)

単親＋子供

DK-4.5畳
視線の遮断【撤去＋カーテン】 4.「台所が見えるのが嫌なので、寝る時は閉める」(1-4)
4.5畳-6畳
親子の親密化【撤去】 5.「親子が近くなって子供との関係は良く、隠し事はない。」(1-4)
脱プライバシー【撤去】 6.「個室で閉じこもるより何をしているのか、何を読んでいるのか分かって良い。子供も嫌だとは思っていない」(1-4)
全体【DK-4.5畳・4.5畳-6畳】
脱個室化【設置・夏撤去】 7.「建具で個室にってしまうより、外した方が良いと思う」(3-7)

夫婦のみ

DK-4.5畳
気にならない【撤去】 8.「仕事柄、朝に寝ているが、妻が食事をしていても気にならない」(17-12)
広さの確保【撤去】 9.「狭いことがとにかく気になっており、広々と使いたかったので外した」(13-9)
室内気候の調整【夏撤去】 10.「冬は暖房用に閉めている」(2-5)
4.5畳-6畳
脱プライバシー【開放】 11.「家族全員開放的で、プライバシーは無い。就寝時も開けっ放しで、家族もそれに慣れている」(17-12)
室内気候の調整【夏撤去】 12.「通風を確保するため、夏は取り外してカーテンにしている」(13-4)
13.「冬は寝る前に開けて、6畳間を暖める」(2-5)
全体【DK-4.5畳・4.5畳-6畳】
広さの確保【開放・撤去】 14.「その方が広く感じられるため、建具は撤去している」(10-10)
室内気候の調整【夏撤去・夏撤去】 15.「夏は風通しのため外しています。寝る時は狭いほうが良いです」(2-5)
DK
鬱陶しい【撤去】 16.「鬱陶しいので扉は外しました」(2-5)

表中の【 】内は、建具の状況、又はしつらえ
()内は、住戸番号を示す

①単身世帯（図－6－1）

単身世帯では、「一人暮らしなので広さは十分」や「狭い方が落ち着く〈3〉」など、住戸が狭小とは受け止められておらず、逆に、居室としての落ち着きや安定性が重視されている（）。加えて、「足が悪くてタンスなど移動できない」や「襖の置き場所がない〈2〉」といった撤去に関わる身体的負担が問題にされ、結果的に二箇所とも建具を設置している（3-16・9-3・14-4）。そのうえで、夏季の通風や冷暖房の効率化などに向けて、建具をきめ細かく開閉する方法がとられる。

表－3－2 建具開閉に関する住み手のコメント（その2）

夫婦＋子供

DK－4.5畳	全体【DK－4.5畳・4.5畳－6畳】
<p>広さの確保【撤去】</p> <p>17.「視覚的に広くするため、建具は外している」 (18-6)</p> <p>18.「入居してすぐに狭いからはずした」(3-14)</p> <p>視線の遮断【撤去＋カーテン】</p> <p>19.「お客さんが泊まった時に筒抜けは嫌だろうと思い、その際につけた。今は寝る時だけ閉めている。子供が台所に来ると丸見え」(3-3)</p> <p>プライバシーの確保【設置】</p> <p>20.「子供の在室時には閉めている」(18-12)</p>	<p>団らんの消失【設置・設置、DKに三畳を設置】</p> <p>30.「子供スペースが個室化し、部屋に引込むようになった。食後すぐに個室に行く」(14-18)</p> <p>兄弟の親密化【設置・設置、個室化せず】</p> <p>31.「子供は男と女だけど、おかまいなしにオープンな関係」(9-5)</p> <p>親子の親密化【設置・設置、個室化せず】</p> <p>32.「子供の個室にはあまり感心しない。子供にとって良い結果を招かず、親子のコミュニケーションが取り辛くなる。見えるのと見えないのの中間位が良いと思う」(9-5)</p> <p>脱個室化</p> <p>【設置・設置、個室化せず】</p> <p>33.「以前は部屋の独立性がたかい方が良いと思っていたが、今はそれ程でもない」(9-5)</p> <p>【撤去・撤去】</p> <p>34.「個室は不要。仕切った部屋には入った事がなく田舎もそうだったので部屋が抜けていた方が良い」(13-5)</p> <p>脱プライバシー【撤去・設置】</p> <p>35.「子供の様子が見えるのは良いが、悪さまで見えすぎてイライラする時もある」(18-6)</p> <p>36.「2室しかないため、子供が何をしているかすぐ分かる」(3-14)</p> <p>広さの確保【撤去・撤去】</p> <p>37.「子供が小さい時、家の中でも走り回れるよう外した」(13-5)</p> <p>室内気候の調整【撤去・撤去】</p> <p>38.「通風のために外した」(13-5)</p>
4.5畳－6畳	DK
<p>広さの確保【撤去＋カーテン】</p> <p>21.「他の家を参考にして建具を外したら、部屋が広く感じられたので、次に4.5畳－DK間の建具を外した」(2-18)</p> <p>プライバシーの確保【設置】</p> <p>22.「子供が寝ている時は閉めているが、少し開けて様子を見たりする」(18-6)</p> <p>23.「子供の在室時には閉めている」(14-18)</p> <p>生活時間帯の違いの解消【撤去＋カーテン】</p> <p>24.「仕事柄、朝寝しているため、就寝時のみ閉めている」(2-18)</p> <p>開放と落ち着きの両立【開放】</p> <p>25.「子供が勉強していても閉めないが、テレビは見ないようにしている」(3-14)</p> <p>脱プライバシー</p> <p>【開放】</p> <p>26.「子供部屋とはつながっていた方が、何をしているか分かって良い」(3-10)</p> <p>【撤去】</p> <p>27.「個室だと顔も見なくなってしまうが、子供が何をしているのかすぐ分かる」(10-15)</p> <p>親子の親密化【撤去】</p> <p>28.「子供はうるさがるかもしれないが、親子のコミュニケーションは良いと思う」(10-15)</p> <p>室内気候の調整【設置】</p> <p>29.「普段は設置しているが、夏クーラーをつける時は開放している」(9-5)</p>	<p>個室化【壁・カーテン設置】</p> <p>39.「上の子が中学に上がった時、それぞれが個室を持てるようDKに3畳をつくった」(14-18)</p> <p>視線の遮断【カーテンで仕切り3畳の茶の間を設置】</p> <p>40.「茶の間から台所が丸見えなため、アコーディオンカーテンを付けた。とても成功したと思っている」(3-3)</p>

表中の【 】内は、建具の状況、又はしつらえ
()内は、住戸番号を示す

Figure 10 shows three diagrams illustrating the 'F' (Futon) and 'F' (Futon) components in a room layout. Each diagram shows a room with a 'F' (Futon) component and a 'F' (Futon) component. The first diagram shows a room with a 'F' (Futon) component and a 'F' (Futon) component. The second diagram shows a room with a 'F' (Futon) component and a 'F' (Futon) component. The third diagram shows a room with a 'F' (Futon) component and a 'F' (Futon) component.

図-6-1 建具パターン (単身者)

住戸3-7
居住年数24
GF
(85)
F
(51)

ダンス

鏡台

食台

F

GF

住戸1-4
居住年数22
F
(46)
m₁ m₂
(転出)(17)

便
m₂

食 団
(F)

台

タンス

	
設置	
	
開放	夏開放
	
撤去	夏撤去
	
カーテン	扉撤去
	
畳設置	家具遮断

図-6-2 建具パターン (単親+子供)

②単親＋子供世帯（図－6－2）

単親＋子供の世帯でも、狭小性はさほど気にならず、寧ろ、親子分離就寝の場合は 4.5 畳が就寝に使われ「寝るときに台所が見えるのは嫌〈4〉」などの理由で、DK－4.5 畳間にはカーテンや建具が設置されている(1-4)。6 畳が子供や老母の個室となる場合には、「親子のオープンな関係〈5・6〉」を重視しつつ通風をかねて 4.5 畳－6 畳間の建具が（夏季のみを含む）撤去されている(3-7・1-4)。

③夫婦のみ世帯（図－6－3）

夫婦のみでは、4.5 畳和室を余地空間へ拡張する例が見られ（以前子供と同居していた場合に多い）、一体化のために建具が撤去されている〈9〉(13-9)。その場合は勿論のこと、「広々とした感じを出す〈8〉」ために、DK－4.5 畳間の建具は概ね（夏季のみを含めて）撤去・開放される。就寝の多くが 6 畳で行われ 4.5 畳が茶の間として専用的に使われるために、食事の持ち運びや、気配の伝達を優先して、(D)K と 4.5 畳が連続化される。茶の間で就寝する場合でも、DK へ部屋が拡張され 4.5 畳と一体化されるために、拡張部分が緩衝帯となること等が、開放化の促進要因となっている。

4.5 畳－6 畳間は季節によって変更されることが多く、夏季の撤去・開放と冬季の設置が典型である。夏季の通風の確保が主要な目的であるが〈12〉、広さ感の獲得や夫婦別寝の場合の相互の見守り(10-10)など、目的が複合的である。それによって、夏季は開放的な暮らし方に、冬季は落ち着いた場にといった季節感のある生活がなされている(2-5・14-5)。「(冬季)寝る前に、4.5 畳（茶の間）と 6 畳（寝室）間の建具を開けて、茶の間の暖気を寝室に送って、暖まったところで閉めて寝る〈13〉」という建具の巧みな利用も見られる(2-5)。

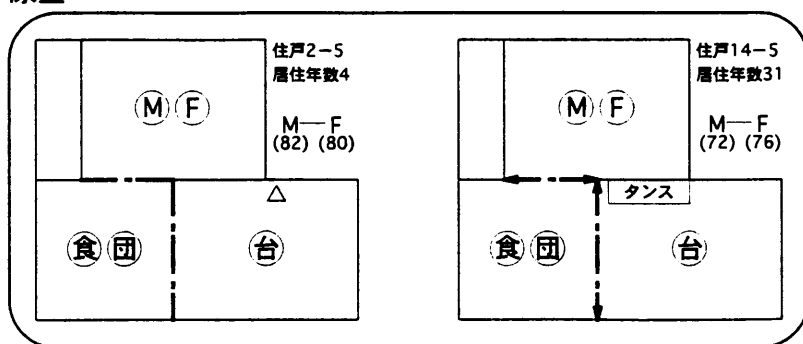
(D)K－4.5 畳（茶の間）－6 畳（寝室）の 3 室が開放的に接続する住まい方と(D)K－4.5 畳のみが開放的に接続し、4.5 畳－6 畳は建具を設置し、開閉を随時調節する住まい方が見られる。

④夫婦＋子供世帯（図－6－4）

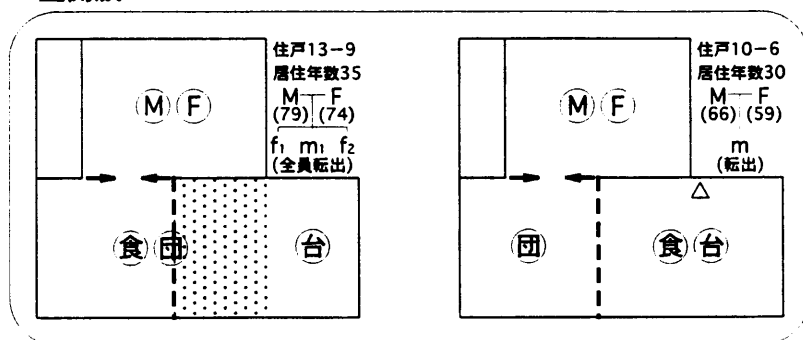
夫婦＋子供では、3 人～5 人家族が居住しているが、狭小性の克服が深刻な課題である〈17・22〉。それをモメントとしつつ、子供の年齢や子供部屋の設定方法、親子関係の考え方に応じた多様で肌理細やかな開閉パターンが見られる。

DK－4.5 畳間の建具がそのまま設置されているのは、4.5 畳が子供の部屋になる場合である(14-18・9-5・18-12)。茶の間として食事や団欒に使用される場合（両親の就寝を兼ねることもある）には、すべての世帯で撤去され開放的なしつらえになっている〈18〉。余地空間へ拡張されていない場合には、DK との間にカーテンを設置することで就寝の安定性

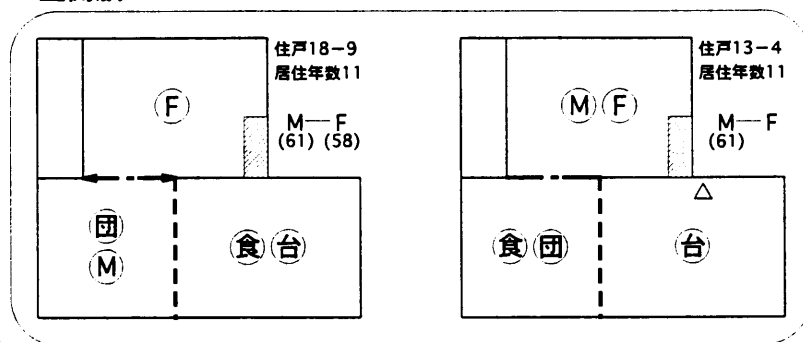
原型



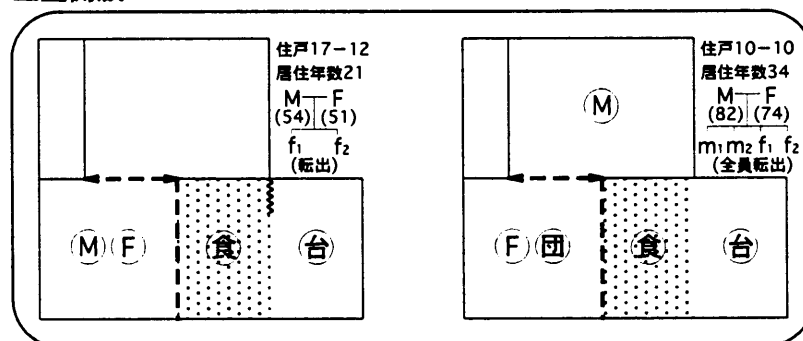
二室開放 A



二室開放 B



三室開放



凡例

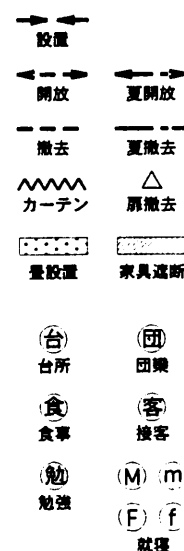


図-6-3 建具パターン (夫婦のみ)

が確保されている〈19・21〉(3-3・3-10・2-18)。

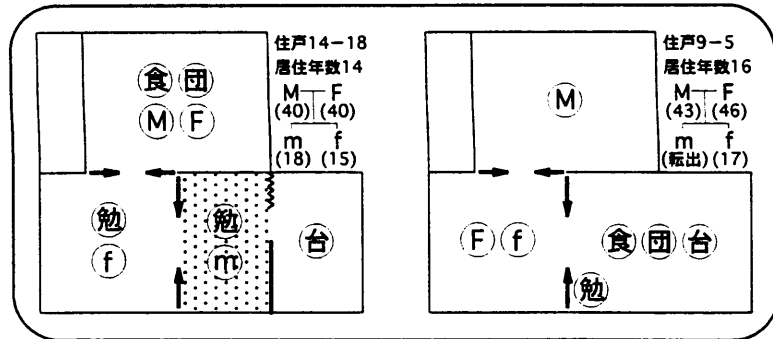
4.5 畳－6 畳間の建具は撤去から設置まで多様である。撤去されているのは、就寝の安定性が重視されず、寧ろ広さ感の獲得や「閉鎖的な個室は不要〈32〉」といった子供のスペースに対する考え方による(13-5)。開け放しの場合も同様に、「子供が何をしているかわかる〈23・24〉」といった視覚・気配などによる子供とのコミュニケーションが重視されている結果である(3-10)。夫婦・子供各々の完結性よりも開放的な親子関係をつくる意識が窺われる。建具が設置されているのは、常時閉鎖のためでなく、例えば、「子供が眠りやすいように〈21〉」「子供の在室時や就寝時は閉める(3-3・14-18)」「生活時間帯が異なる父親(タクシー運転手)の眠りを妨げないように(9-5)」など、就寝の安定化や勉強の邪魔にならないこと等への配慮から、「必要に応じて」臨機応変に開閉するためである。建具の設置は子供の年齢が高い場合に見られる。

二箇所の建具の開閉パターンを併せみると、14世帯のすべてが異なったパターンとなり、住み手が各々自らの論理で自律的にしつらえ、個性的な住まい方を実現している。第一義的なモメントは各世帯共通に狭小性の克服であるが、それに家族関係・生活観・心理的側面等の個別の事情を重ね合わせることで、開閉パターンは多義性と多様性のあるものになっている。建具がすべて撤去され、三室が開放的に連続するワンルームの構成が見られる(10-15)。オープンな空間全体を家族で共有することによって相互が関係を持つことと、それぞれの行為の場を分節的に確保することが両立する住みこなしは、勿論狭小性の克服が第一義の目的であるが、その結果「子供が何をしているかすぐわかる〈34〉」という親子関係に関する独特の価値を生成している。

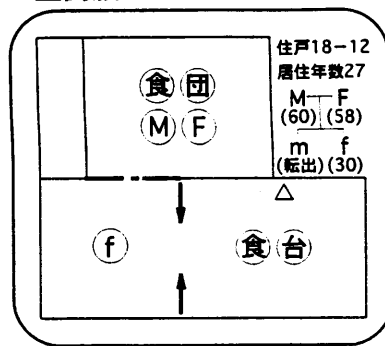
一方、カーテンや簡便な間仕切壁を新たに設置して、居室の構成を変更している例が見られる。その典型は、4.5 畳和室を DK の中央部(約3 畳分)まで拡張する際に、K との境界に間仕切を設ける例である(10-15)。また、6 畳の中央部にカーテンを設置して子供室を2室に分割し、それぞれ安定した場所を確保する例も見られる(3-3)。

また、玄関と DK や6 畳の間の建具にも多様な改変が見られる。台所との間のドアの改変は、玄関の暗さや狭さの解消、玄関先からの通風の確保などを目的に撤去している事例が多く見られる〈16〉。反面、家具(洗濯機)で閉鎖することで、他者の立ち入りにくい自由な家事空間を生み出している事例(1-16)も存在する。玄関と6 畳間の出入り口の改変では、家具による閉鎖が多く見られる(1-4・2-9・3-10・3-14・10-15)。家具量に対する壁面量の不足も影響しているが、その結果例えば、夫婦就寝スペースを子供が通過する様な動線も許容されている。

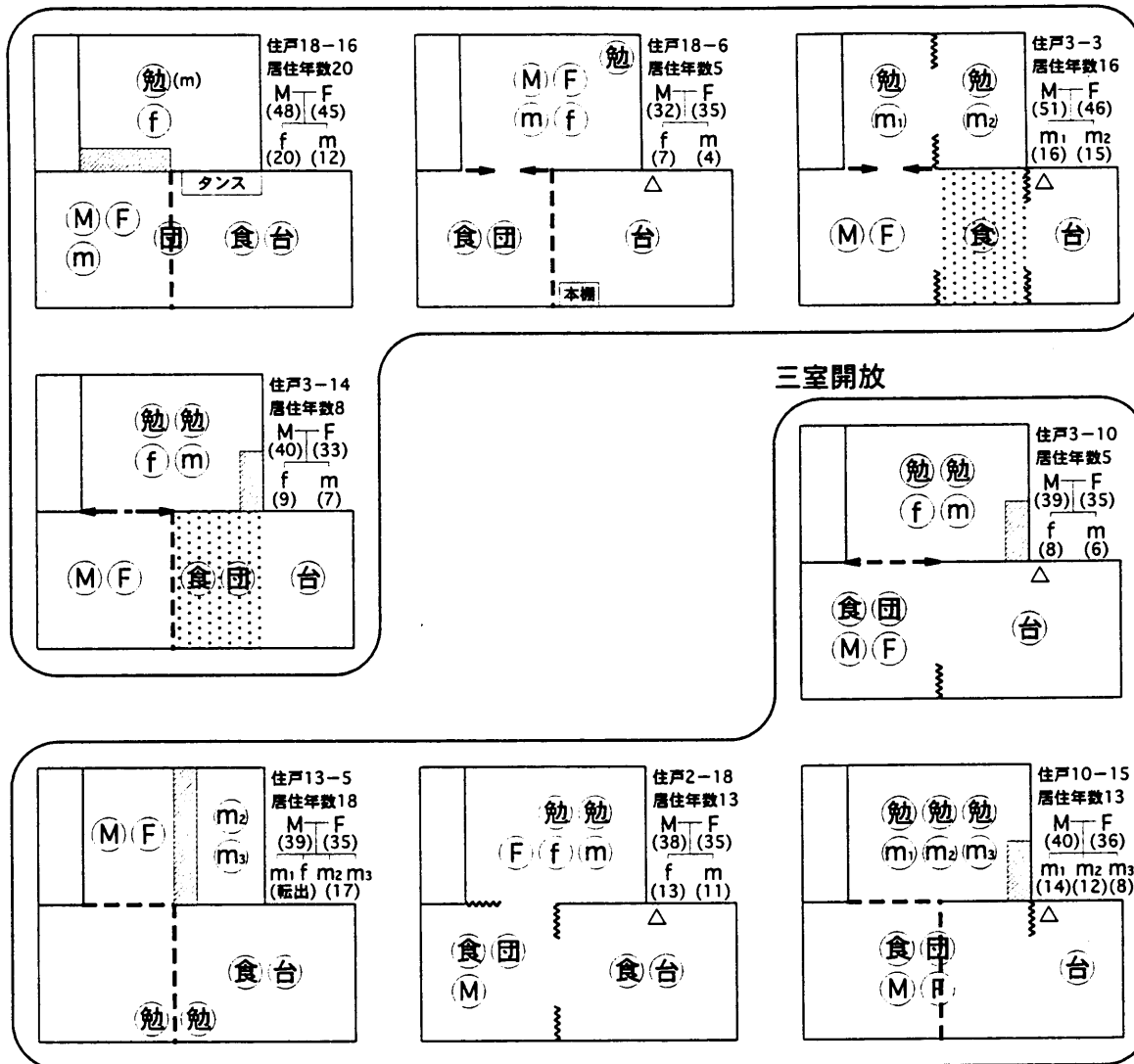
原型



二室開放 A



二室開放 B



三室開放

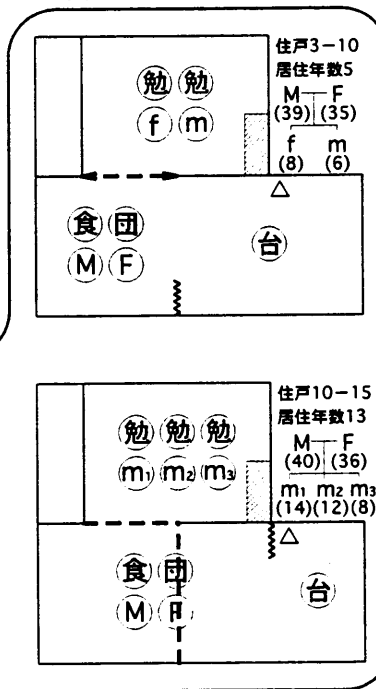
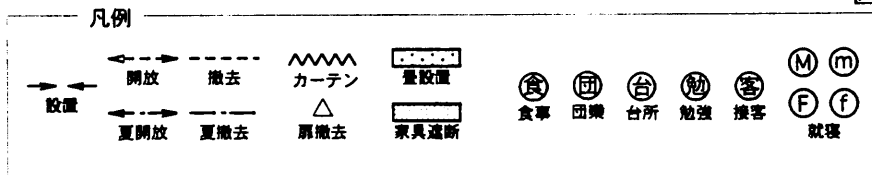


図-6-4 建具パターン (夫婦+子供)



建具に対する住み手の積極的な働き掛けは、他の住戸プランには見られない独自のものである。当初の計画が建具を多用して高いフレキシビリティを有していたことが、住み手の働き掛けを触発し、様々な箇所に波及・展開していったものと考えられる。

そうした働き掛けによって、住み手は、画一的に計画された住戸を空間構成上も生活の組立方においても個性的で多様なものへと再編成している。ここで、いくつかの典型事例を取り上げ、建具への働き掛けによる自律的な生活スタイルの組み立て方や生活原理を明らかにし、住み手独自の生活観からみた合理性を検証する。

A) オープン化：建具の可変性をフルに活用した、開放型のしつらえでは、居室が開放的に接続することで各居室の性格を弱め、親子関係のオープン化や、公私分離や居室の利用主体の専用化ではなく、公私が重層・融合し、居室が共用化するような住まい方が実現されている。

Sm 邸（図-7-1）では、「個室の確保よりも部屋が抜けていた方がよい」として二箇所の建具を撤去している。3室の「オープン化・ワンルーム化」された中に 17 才の二人の息子の勉強スペースが各々 4.5 畳と DK の一面を占め、6 畳・4.5 畳が一体的に茶の間として活用されている。それによって互いの領域が重層化し、気配が分かり合う関係がつけられ、また各々の居場所の広々感が確保されている。

一方、そうした開放性に対して、就寝のための工夫が見られる。6 畳の玄関側に置かれた子供就寝用の 2 段ベッド（最小限面積）と両親の団欒や就寝スペースの間を家具で遮断することで、それぞれの領域を安定化し「親子一室就寝」と「親子分離就寝」という本来対立する就寝形態を両立させている。また、玄関側から子供専用の出入り口を設けて就寝時の親子動線を分離している。

B) 部屋の分化・増殖：オープン化とは逆に、間仕切やアコーディオンカーテン（以下 AC）を新たに設置することで、部屋数を増やし個室化を進める。これも建具の可変性に触発された行為である。

親子 4 人家族（子供：15・16 才）の S 邸（図-7-2）は、6 畳を AC で二分し二人の子供の個室を確保している。併せて、DK の一面に畳 3 枚を置いて茶の間とし、4.5 畳（夫婦寝室）との間をブラインド、台所との間を家具と AC で仕切り、食寝分離・就寝分離が可能な「4 K」の室構成に狭小住宅を改変している。また、風呂場の入り口にもカーテンを設置し、脱衣スペースを確保している。各室は 3 畳～ 4.5 畳と狭小であるものの、AC 等を用いることで、必要に応じて閉鎖から開放まで連続的に変化させることが可能であり、居室の細分化と一体化、居場所の安定性・落ち着きと広さ感の確保、といったアンビバレントな要求を両立させたフレキシビリティのあるしつらえ・改造である。また、個室とい

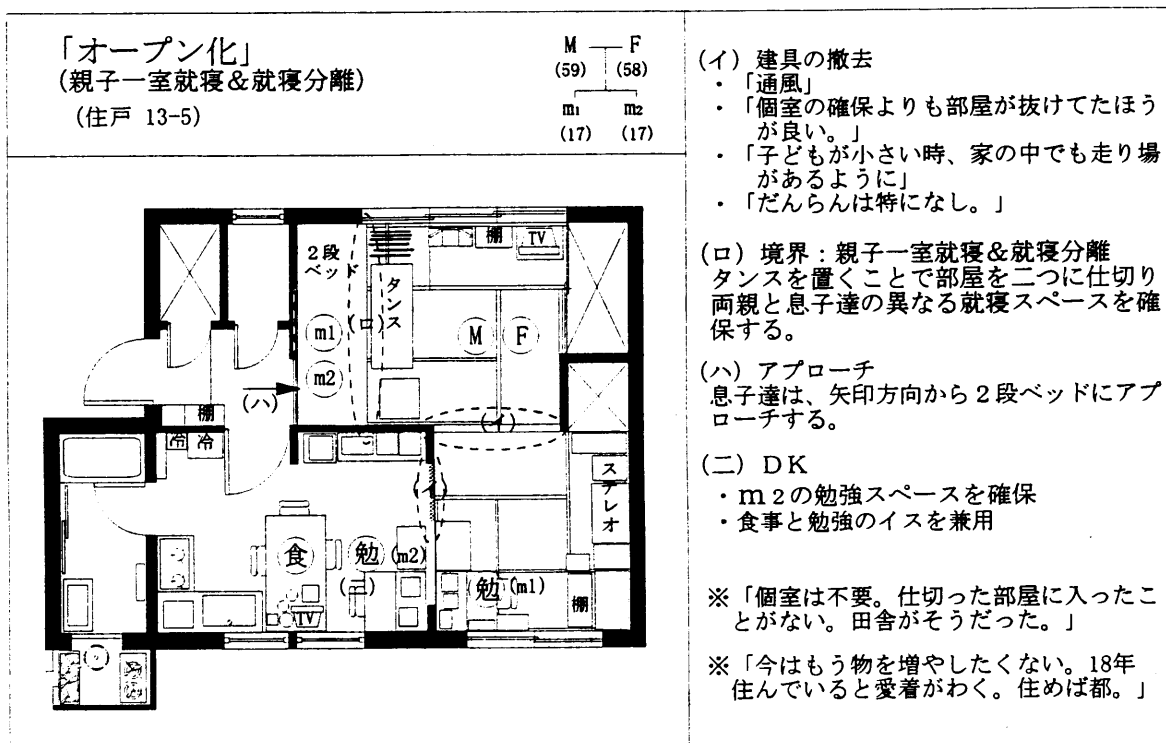


図 7-1 オープンの住まい方 (S 邸)

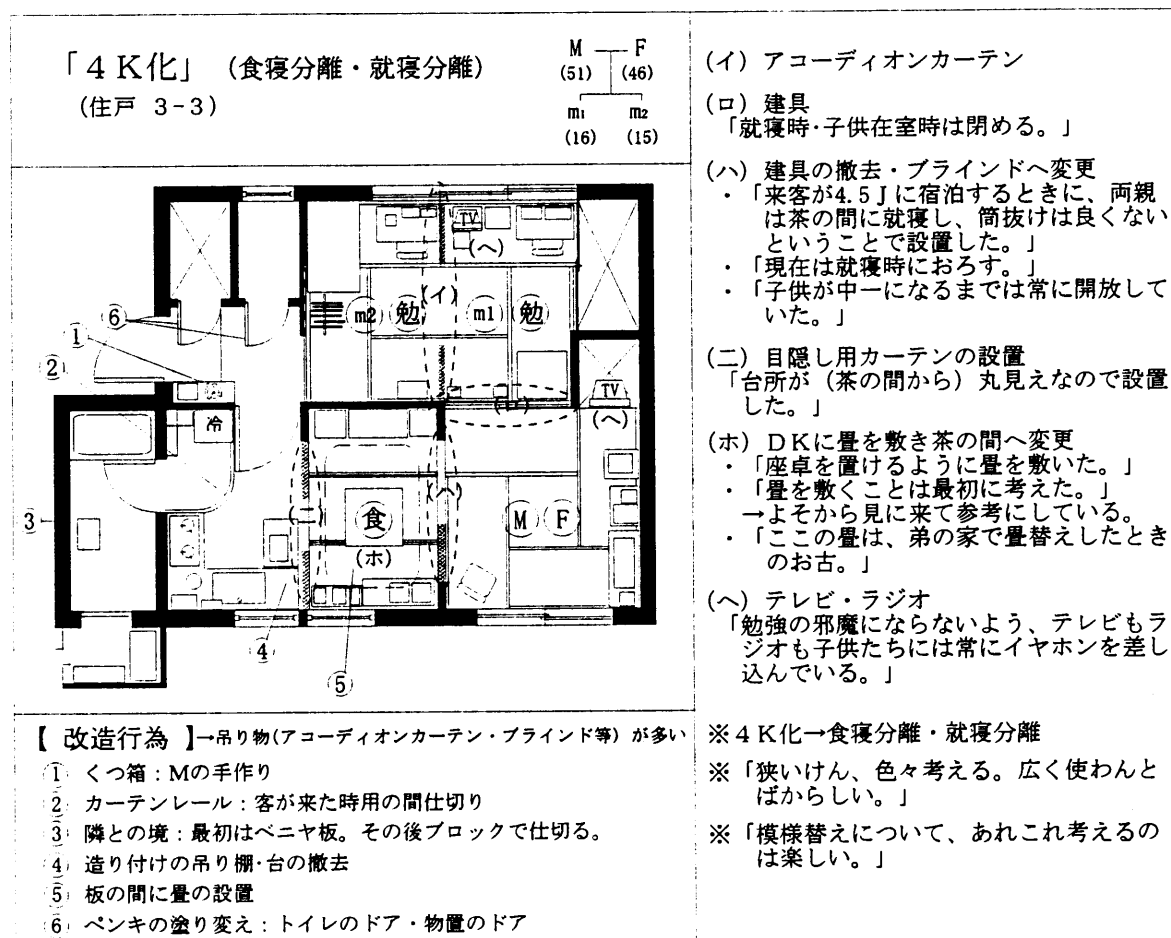


図 7-2 細分化した住まい方 (S 邸)

えども、他者との関係を固定的に遮断するのではなく、他者との関係性を保存したままで区画され、同時に柔軟に変化する場としてしつらえられている点は示唆に富む。TV 視聴に各々イヤホンを使うことで AC の遮音性の低さを補うなど、ハードの弱さを補完しアンビバレンスを成立させるために生活行為に工夫が見られる。

C) 新たな秩序軸の形成：建具とタンスを間仕切に活用して居室の配列を再編し、併せて動線が一本化されることで、室構成に明快なヒエラルキーが生み出されている。

女性の単身居住である F 邸（図-7-3）では、玄関 DK 間のドアを洗濯機や家具で遮断して、居室の配列を玄関－6 畳－4.5 畳－DK に再構成している。それに対応させて、外部との接点である 6 畳は客間としての整然としたしつらえ（座卓）兼就寝、4.5 畳を茶の間、配列上最も奥まった DK は家事・炊事専用スペースとして、趣味の漬け物の樽や洗濯機、多様な炊事道具などによる自由且つ雑然としたしつらえとしている。間仕切と部屋のしつらえによって居室の配列を再編し、「ハレーケ」という明快なヒエラルキーが形成されている。また、4.5 畳－6 畳間の建具は夏場撤去され、4.5 畳－DK 間は雑然とした DK の目隠し用に設置されたままである。

一方、17 才の娘と母親（58 才）の二人暮らしの N 邸（図-7-4）は、居住歴 4 年と最も短く、日中二人とも不在のため、さほど親密な近隣関係が形成されていない。また、来客もほとんどない。F 邸とは全く逆に、玄関－6 畳間がタンスで遮断され、玄関－DK－4.5 畳－6 畳の配列となる。また、建具もそのまま設置されている。DK は台所兼物置、4.5 畳が食事団欒、配列上は最も奥まった 6 畳が母娘二人の就寝に使われ、「テマエーオク」のヒエラルキーが形成されている。オクにいくほど居室が安定化することを活用して、就寝時の防犯性・安心感を高めている。

D) 閉じつつ開く：建具を撤去後に、家具で仕切り直すことで、居室間を閉じつつ、開くことが可能となっている。

夫婦のみの K 邸（図-7-5）は、夫が 6 畳を、妻が 4.5 畳＋DK の一画 3 畳を各々の日常生活の拠点として活用している。夫の部屋には、机・TV・本棚等が置かれ、書斎・日常の居場所・就寝に使われている。一方、妻の部屋にはタンス・鏡台・TV 等が置かれ、食事の他は日中、就寝時ともに各々思い思いに過ごす。両室間の建具を撤去し代わりに低い棚類で仕切ることで、それぞれ独立した生活拠点を確保し、相互の過ごし方をディスタープせずに、気配は伝わるという関係が実現されている。建具に代わる家具の巧みな活用方法である。

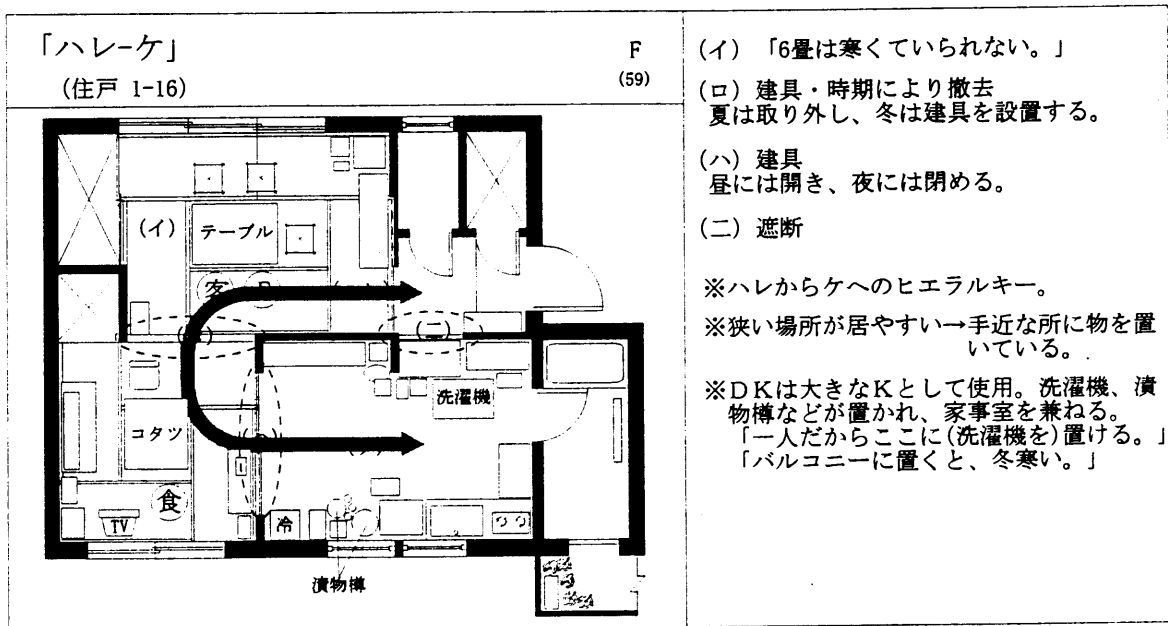


図 7-3 新たな秩序軸の形成 (F邸)

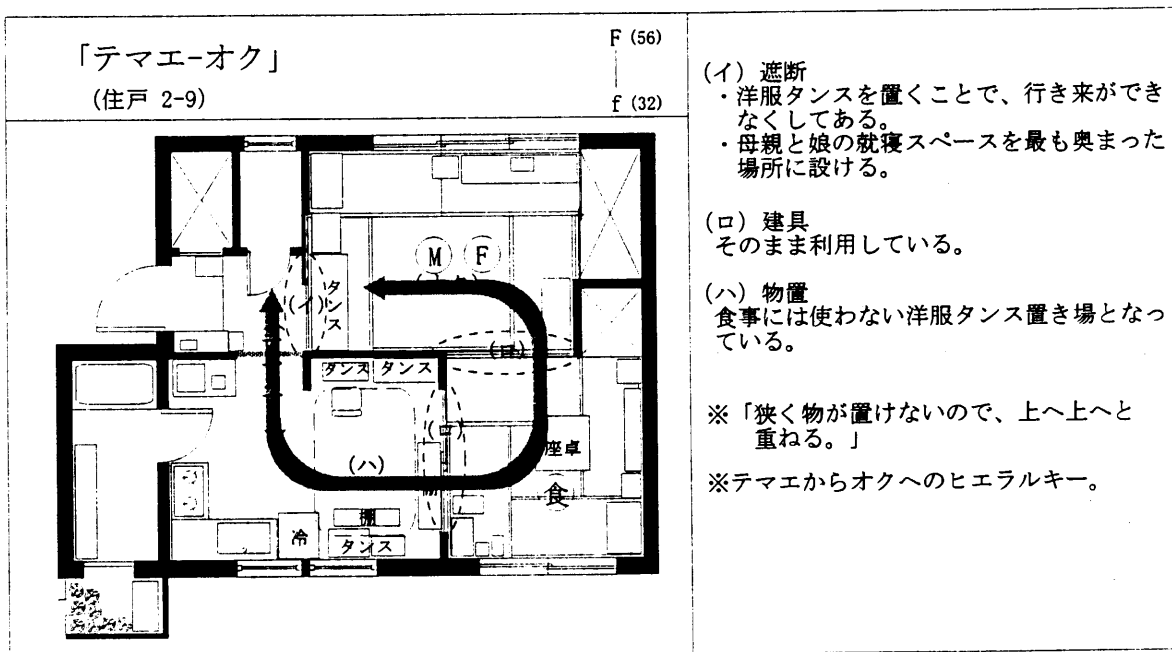


図 7-4 新たな秩序軸の形成 (N邸)

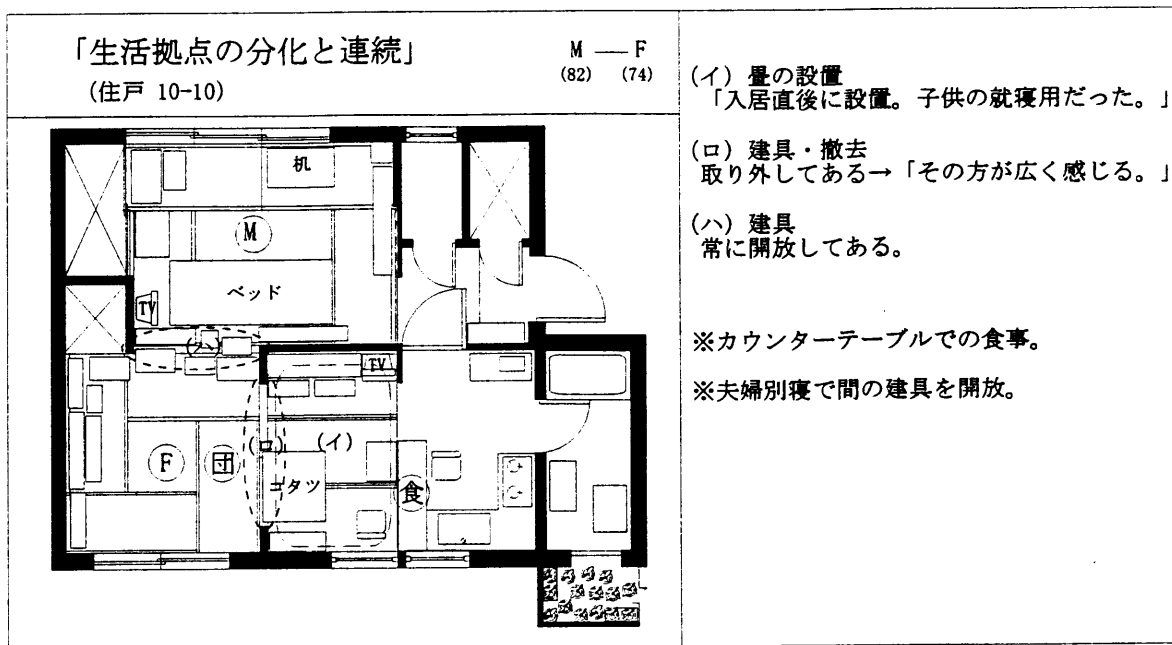


図7-5 閉じつつ開く(K邸)

間仕切は、部屋の構成方法ひいては生活の組み立て方に大きな影響を与える。建具による間仕切という計画的な可変性（Flexibility）に触発されて、住み手はその活用可能性を自らのものとして多様に解釈し、積極的に働きかけることで、自らの生活価値観に沿った生活スタイルを実現している。それは、計画が想定した住まい方を越えて、住み手の自律的・合理的な生活の組立を実現している。住み手の働き掛けの特性を整理すると、以下のようになる。

1. 間仕切の可能性のフル活用と拡張：常時閉鎖を除き、想定される建具の開閉パターンの全てが実践され、建具のフレキシビリティがフルに生かされている。と同時に、撤去＋カーテンは、開口幅の全開から全閉まで可能な点で計画を越えたしつらえであり、住み手独自の工夫によって間仕切の可能性が拡張されている。
2. 状況に応じた肌理の細かい調整：単身世帯を除けば、建具は基本的には開放であり、必要に応じて、随時、多様な開閉方法がとられる。頻度と開閉方法において住み手の肌理の細やかさと機動性が窺われる。即ち、開くか閉じるかの二者択一的（デジタル的）かつ固定的ではなく、その間を連続的（アナログ的）に、柔軟に変化させる。
3. 多義性のある働き掛け：住み手の建具への働き掛けは、空間的にあるいは感覚的に狭小性を克服することに留まらず、通風や親子のコミュニケーションを兼ねるなど多義性を有する。居住環境・家族関係・移動負担・心理的側面・生活行為相互の関係など多様な目的が重層化されている。
4. ハード、ソフトを総動員して効果を高める：「(個室の閉鎖化を抑制するために居室間を開放しているので)、子供が勉強中はテレビを見ない、お互いイヤホンで音楽やTVを楽

しむ」など、住み手は単に物的環境に働きかけるだけでなく、その効果を高めるために、生活行為にも工夫をする。ハードをソフトによって補完したり、相乗化する動きが見られる。

5.住み手の論理による生活合理性：子供室への動線が親のスペースを通過したり、6 畳からトイレに行くのに、大回りをする等、建具の開閉パターンが計画学的に見れば、「混乱した状態」に陥っている例もある。しかしながら、それぞれの住み手の生活の組立方や生活観、あるいはソフトによる支援を考慮するならば、それらは極めて合理的である。住み手は、自らの生活観を反映した生活合理性を有する。

（3）余地空間のしつらえ方

DK の一部に存在する「余地空間」に対する積極的な働き掛けがみられる（図-6）。この空間は計画的に設けられた場所ではない。当初（オリジナル）の住戸は、DK 中央部にカウンターと吊り戸棚が設置され、それを活用した食事の場が計画されていた。ところが、カウンターがあることでテーブルが置けない、あるいは上部の吊り戸棚が低くて頭を打つ、油で真っ黒に汚れてしまう等が住み手の間で問題になり、県がその撤去を許可した結果、偶発的に余地空間が生まれ、住み手の働き掛けが本格化する。そうした働き掛けの背景には、「食事はイスでは落ち着かない。やはり座ってゆっくりとしたい」といった、イス座での食事に対する抵抗感や住戸の狭小性の克服に向けての切実感がある。その使われ方は以下の通り多様であり、住み手の生活観を反映する場として巧みな使われ方が見られる。

①巨大な台所（7例）：特に住戸面積にゆとりのある単身世帯や単親＋子供世帯を中心に、イス座に対する抵抗感から、あるいは台所の機能を高めるために、食器棚や炊事道具を十分に収納する場としてしつらえられ、家事専用の（食事をしない）「巨大な台所」として活用されている。単身世帯で、洗濯機・漬け物樽までが置かれ、炊事・家事・趣味空間として活用されている事例もある（図-7-3）。

② DK 本来の利用（9例）：テーブル・イスを配置して本来の DK として利用（9例）。夫婦＋子供世帯や夫婦のみ世帯に見られ、DK で食事することで食寝分離を実現し、就寝の安定化に寄与している。また、夫婦のみ世帯でも食事運搬の手間を省くために、特に高齢者世帯で DK が活用されている。3食とも DK と、朝食のみ DK で行われ夕食は和室でなされる場合とがある。「DK では床座で食事するものではない（2-18）」という意識からテーブルをしつらえている例もある反面、一部の高齢者世帯では、座卓で床座の食事が行われる例も見られる。（図-8-1）

③茶の間の拡張（6例）：余地空間に畳を3枚置き、隣接する4.5畳との間の建具を撤去することで一体化し、7.5畳の和室（茶の間）に拡張する最も大幅な改変である。DKと4.5畳が同じ間口幅で、且つ一間の建具で仕切られるという連続性の高さが巧みに活用されている。和室を拡張することで、居住性の向上と床座での食事や就寝スペース確保の容易さなど、複合的に有効性を発揮する。そのために、特に、家族人数が多い夫婦＋子供世帯やかつて夫婦＋子供（現在は転出）での生活をしていた夫婦のみ世帯に多くみられる。拡張部分で床座による食事団欒を行い、4.5畳を主に就寝スペースに分節するといったDKに準ずる使い方の例もある。3畳に縮小された台所との間は食器棚やカーテン・簡易な壁によって仕切られることが多い（図-7-2）。

④異種の混入（9例）：巨大な台所、あるいはDKとして使われながらも、その一角にDKとは全く無関係な洋服ダンスや勉強机がスポット的に置かれる。台所と収納を重ね合わせ、両立させることは、住み手独自の発想による（住み手ならではの）しつらえといえる。洋服ダンスの場合は和室からの溢れ出しを吸収する場となり、和室を来客を想定して美しくしつらえることも可能になっている（図-8-2）。子供の机の場合は、親子が場を共用することで、会話やコミュニケーションをとりながら家事、勉強が行われ、コミュニケーションの潤滑化に寄与している（2例）。勉強用のイスと食事のイスを兼用する例もある。（図-8-3）

⑤完結活用（1例）：子供の個室として就寝・勉強などに活用される完結した場を確保し、4.5畳の子供部屋と併せて男女別の子供部屋が実現されている（図-8-4：14-18）。3畳という子供部屋としても手頃な広さが巧みに活用されている。茶の間の拡張と同様に大幅な改変である。Kとの間に簡易な壁とカーテンによる仕切を設け、独立性が高められている。

DKの一部に位置するといえども、Kとの分節化が可能で、開放性があり、居室に比して3畳大という手狭さ等から、機能の明示性が弱い曖昧な「余地空間」に対して、住み手は生活スタイルに応じた独自の活用可能性を見出している。与えられた空間をそのまま活用するのではなく、逆に曖昧な空間として放置するのでもなく、個々の状況に応じてその活用可能性を最大限に生かすべく、多様に解釈し、積極的な働き掛けによって新たな場を獲得している。

余地空間の活用タイプには、隣接する（D）Kや4.5畳の使われ方との関係から、「巨大な台所」や「茶の間の拡張」など、隣接する空間の使い方が連続・拡張する「一体型」、「DK利用」のように、食事スペースをKや茶の間と関連づけながら独立させる「分節型」、「異種混入」のDKとは異質な機能を受容する「異質重層型」、隣接する空間とは直接的

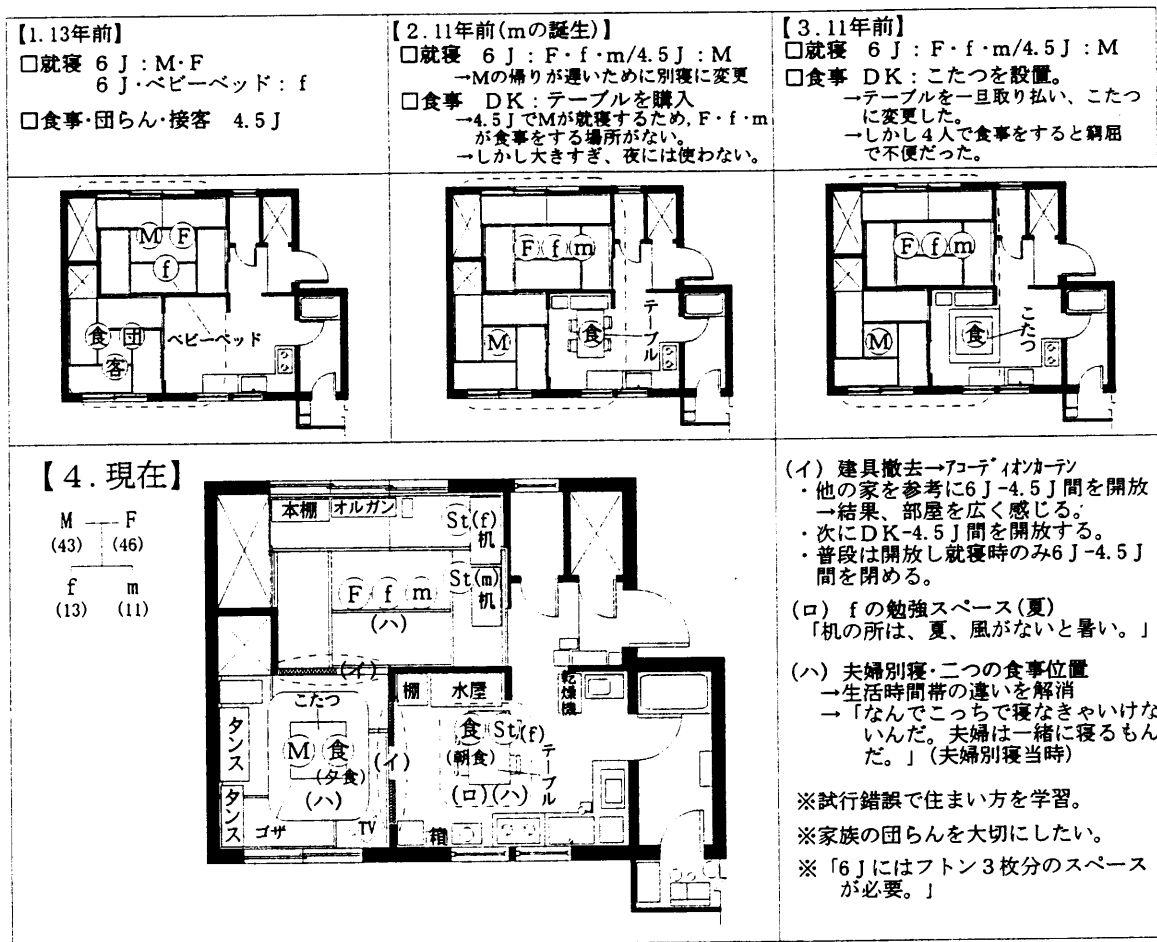


図8-1 DKとして活用(イス座)

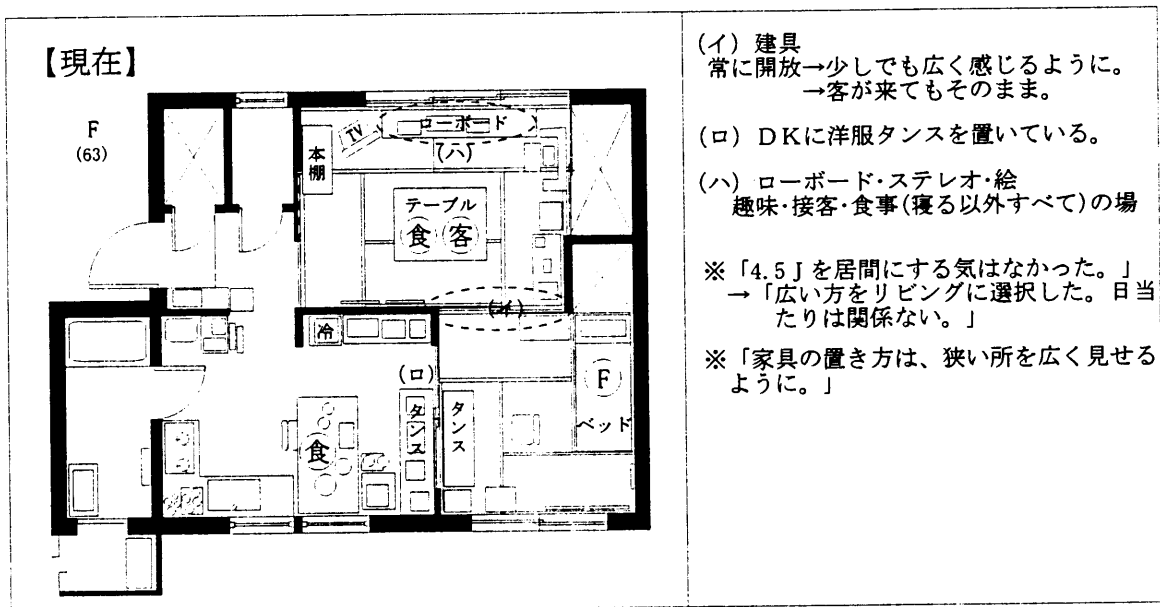


図8-2 DKに物置の混入

な関連を持たない「完結型」が見られる。「一体型」や「分節型」は、連続する居室の使われ方を補完・拡充し、「異質重層型」や「完結型」も他の居室が担っていた役割を分担・分化している。いずれも空間の狭小性を補完したり、ゆとりを生み出すことに寄与している。

また、余地空間に対する自律的な働き掛けは、機能分化を前提に曖昧さを排除し、機能合理性を目指す計画とは全く異質である。住み手の論理で捉えるならば「生活合理性」の極めて高い取り組みである。台所を卦の空間と捉えるならば、「異質重層型」は、寧ろ洋服ダンスをおき、物置き化することで卦への順応や同調を意味する。DKに勉強机を置くことも、親子のコミュニケーション・各々の作業・狭小性の克服等、多義的に実現している。生活の連続性や多義性などをそのまま空間に写し込もうとする意識が窺われる。また、子供室としての完結的な活用は、個室として成立する最低限の広さ、即ちミニマムスペースのマキシマムユースである。

狭小性の克服に向けて、建具への働き掛けが、どちらかといえば感覚的に広さ感を獲得する動きだとすれば、余地空間への働き掛けは、実質的な広さの獲得といえる。

【1. 16年前】

□就寝 4.5 J・ダブルベッド：M・F・m
4.5 J・ベビーベッド：f

【2. 10数年前】

□就寝 6 J：M・F
4.5 J・2段ベッド：m・f

※mの机：4.5 J内で気分により移動(1～2)。それに応じてベッドの向きも変わる。

【3. 10～1年前(mが転出するまで)】

□就寝 6 J：M
4.5 J・2段ベッド：F・m・f

→Fは、Mが遅く帰宅すると目を覚ましてしまうため、4.5 Jの2段ベッドに移った。

【4. 現在】

M (43)
F (46)
m (転出) (17)
f

(イ) 食事
Fとfと一緒に6 Jでとる。MがD Kで寝ている時は、DKでとる。

(ロ) 就寝
Fとfは4.5 Jの2段ベッドで就寝。
Mは6 Jで就寝。

(ハ) 勉強
fの机は就学してからずっとDK内。
→「4.5 Jが狭くなるし、出入りが大変。」
「顔を見られる。何かしながら話ができる。」

※「子供の個室はあまり感心しない。」
→「子供にとってあまり良い結果を招かない。」
「子供と親のコミュニケーションがとれない。」
「見えるのと見えないの中間位が良い。」

図 8-3 DKに子供の勉強スペースの混入

【1. 14年前】	【2. 12年前】	【3. 5年前(m・中学入学から)】
<p>□就寝 4.5J : M・F 6J : m・f</p> <p>□食事 4.5J : みんなで食事</p>	<p>□就寝 4.5J : M・F/6J : m・f</p> <p>□家具 DK : テーブル・ソファを購入。 →しかし、ソファは邪魔になって捨てた。 6J : 2段ベッドを購入。 →しかし邪魔になって捨てた。</p> <p>□食事 DKへ移動</p>	<p>□就寝 4.5J : M・F/6J : f・m</p> <p>□家具 6J : 机を二つ設置。</p> <p>□勉強 6J : 同じ部屋で勉強する。</p>
<p>【4. 現在(m・中学入学から)】</p>		
	<p>(イ) DKの個室化 ・「男の子と女の子だから部屋が二つあるので、ダイニングに畳を3畳敷いた(他所を参考に)。」 ・「(DK-台所間は)オーディオインターテンと簡易間仕切りで、一応独立した個室になっている。」</p> <p>(ロ) 建具 →入室時は閉める。</p> <p>※TVは3台各部屋にあり各自で見る。 ※「夕食はバラバラ。一家揃っての団らんは、日曜日だけ。」 ※子供スペースが個室化して、部屋に引き込むようになった。食事後はすぐに自室に行く。 ※狭い部屋を住みやすくする秘訣 →まず物を置かない。 ※「早く建替えを。今が一番困っているから。」</p>	

図 8-4 DKの一部個室化

Ⅱ－２－４ 共用空間の自主的維持管理

集合住宅の日常的な維持管理は、例えば清掃活動などでは、居住者全員での平等な関わりを基本とし、身体的・定期的な作業負担を伴う点に特徴がある。そうした点がネガティブに捉えられ、最近では居住者が自主的・主体的に行うよりも、寧ろ所有主体（公営住宅の場合には自治体）に依存し、使用者と維持管理者とを分離しようとする意識が強くなってきている。さもないければ、「全員参加」「作業負担」「定期性」が求められることから、全体によるコントロールを求めて、団地の自治会活動の一環に位置づけられることが最も一般的であり、制度化された固定的な仕組みによって強制的に運営されることもある。加えて、近年では、こうした維持管理に対する住み手、供給者双方の負担感の高まりを背景に、維持管理を簡略化するようなメンテナンスフリーの計画が重視されるような風潮も広がりつつある。

しかしながら、集合住宅の維持・管理を単にモノの価値を保全する行為ではなく、「一定居住空間における顕在化した、及び潜在化しているハウジング資源全体を生かし」¹⁾ 一つ、集住環境を創造的に進化させることと捉えるならば、その担い手となる居住者が集住環境との間にダイナミックで有機的な相互浸透関係を持続的に生起することが求められる。ここでは、モノの維持管理や集住生活の運営のために全体を規定・拘束する規約が存在せずに、小規模のグループ毎に住み手が自律的に共用空間に働きかけることで環境を維持、発展させている「自律分散型テナントデモクラシー」のシステムによる維持管理方法に着目し、その特性を明らかにする。

その際に、住棟間のオープンスペースを自ら利用可能な場所として菜園や駐車場などに改変し活用している状況、即ち維持管理の創造的・有機的手法としての共用空間の「領有」に着目し、そこに見られる住み手の自律性の生成状況と有効性について明らかにする。

（１）維持管理システムの経緯

昭和 28 年～ 36 年にかけて建設された H 団地は、当初は、周辺地域の町内会に含まれていたが、団地規模が拡大するにつれて、単独の自治会が確立される。本地域の自治会は小学校区を 11 町内に分割して構成されているが、1～16 棟で一つの町内会（自治会）を形成し、17～18 棟は周辺地域の町内会に属している。一つの団地ながら、異なった二つの町内会を構成している。団地自治会は、小学校区内の一町内会という意味合いが強く、役員構成や活動内容も校区の町内会活動への参加を中心に据えており（表-4）、団地全体のコミュニティ活動や維持管理などを主体的に運営することには、さほど積極的ではない。また、所有者としての県も当団地の維持管理に直接介入することではなく、寧ろ、階段室や

住棟を団地自治の単位として、独自の維持・管理に関する取り決めや日常的、定期的な管理活動が実施されている。各々独立した小規模な単位で自律的に維持・管理が行われている「自律分散型テナントデモクラシー」が特徴がある。このような仕組みは、9年間にも及ぶ長期的な建設年数にもよろうが、当初の団地独自の自治会をもたない時期の隣保班（隣組）の構成方法（隣接する二階段分の住戸で一隣保班を構成）や管理形態を今なお継承していると思われる。

当時は、各棟に居住していた県庁職員が管理人として委託され、住棟毎の管理を行うシステムが採られていた。管理方法は、役割分担による組織だったものでも、管理規約等のルールに基づく制度的なものでもなく、管理人の役割も世話役的なものであった。また、本来の管理主体である県がトップダウン的に管理方法を指示することも行われなかった。階段室を基本単位とした独自性のある維持管理スタイルは、日常生活を積み重ね、自発的な維持管理活動を継続する中から、近隣関係を基盤として、慣習的に、あるいは暗黙の取り決めとして自然に形成されてきたものといえる。

その後、県職員による管理人制度も職員の転居などで徐々に消滅し、人数も各棟に一人から団地全体で2～3名へと減少すると、管理人の役割は住民の利益を代弁して、管理主体（自治体）との橋渡しをすることへ変化している。こうした時間経過の中で、階段室や住棟を単位とした維持管理には、一層の自律性が求められるようになり、居住者の入れ替わりとともに、維持管理の方法もその時々状況に応じて変化しつつ、今日に至っている。

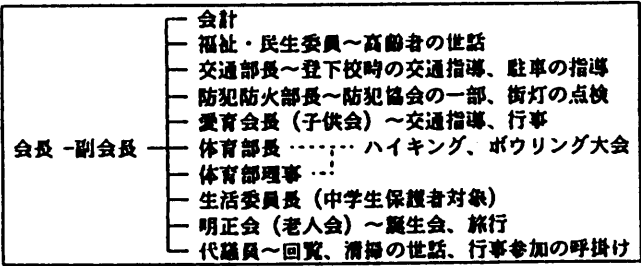


表-4 出水小学校区10町内自治会組織

(2) 階段室・住棟周りの清掃

階段室や住棟周りの清掃方法は、実施単位である階段室毎に異なっている。基本的に誰も掃除をしない放置状態はない。大きく分類すると、住み手が自発的に行っているものと、当番制（以前はこの方法が一般的であった）によるものとが見られる。数の上では前者が大半を占めており、具体的には、以下のような方法が見られる（表-5：以下の文中の〈番号〉は表中の意見番号に対応する）。

イ) 特定型：仕事を持たずに日中在宅している比較的中高齢の女性など、特定の住み手が階

段室全体や住棟周りの清掃を自発的・習慣的に行っている。「毎朝掃除〈7〉」や「毎日仕事のように〈11〉」「1日おき〈8〉」など、定期性と頻度の高さに特徴があり、常に美しい状態に保たれている。その契機も他者のための奉仕活動といった気負いはなく、「きれいな方が好き」や「健康によいから〈8〉」「どうせ暇だけん〈7〉」等、個人的な理由で始められる。それが結果的に他の居住者が「自分は普段は殆どしない〈1〉」や「ちょっと甘えている〈6〉」などと指摘するように、「働いている人や忙しい人（主に若い世帯）の負担軽減〈10〉」につながり、自己実現と他者の利便との両面に役立っている。その際、例えば、特定の高齢者が掃き掃除を、若い人が水流しを担当〈3・4〉や、ある住み手は階段を別の住み手は道の清掃を担当など〈5〉、清掃の方法や範囲を補完的に分担することで、負担を軽減する例も見られる。また、当事者にとって、清掃が義務的なものではなく、楽しみとして捉えられている点にも特徴がある。こうした行為はその階段室の居住者には

表－5 日常的清掃に関する住み手の意見

○特定型	○不特定型
【取り組み】 1：年輩の人が多く、良く掃除をしているので、自分は普段は殆どしない(8-1) 2：4-1 が一人で草取り、水打ちをしている(4-6) 【相互補完】 3：階段には、下のお姉ちゃんと自分で水を流す。一番上まで、ホース上げてジャブジャブやるのは若い人しかできない。(6-5) 4：階段の掃除は大抵私がする、流すのは(6-5)の人。(6-2) 5：階段は N さん、外回りは M さんが掃除する(17-8) 【契機】 6：N さんが「私がお家におるけんするよー」と言うから、ちょっと甘えている(3-3)。 7：階段を毎朝掃除。「どうせ暇だけーん」(9-3) 8：6年間1日おきに掃除をしている。3階から1階まで水を流して。この階段の人は誰もしない。きれいな方が好き、健康にもいい(3-16)。 【謝意】 9：M は、ゴミ出日に必ずゴミ置き場を掃除する。会ったらお礼を言う。感心する。(1-16) 10：S さんは住棟周りの掃除を良くする。妻が仕事の時は、「しとってやる」「お願いします」と甘えていた。できることで返そうと思う。近所の年寄りを気にかけている。(9-5) 11：下のおばあさんが、毎日「仕事みたいに」掃除をする。「ありがたいですよ」、お陰で月一回の草取りがずいぶん楽になった。(10-15) 12：いつも掃除で世話になっているので、知らんふりして時々菓子などもっていく。(17-8)	【取り組み】 13：階段掃除は汚いと思ったら自分でしている。いつも同じ人がしているとは思わない(1-4) 14：階段は自分達で汚いと思ったら掃除する。常にきれいな状態に保たれている。(18-12) 【謝意】 15：階段室の清掃を他の人がしたら礼を言う。(3-7)
	○分担型
	【取り組み】 16：普段から掃除をする人は居ない。それぞれ玄関周りしかしない。(1-13) 17：それぞれが自分の周りを汚れてるなと思ったら掃除する。(2-9) 18：当番制は、みんなが自分の周りをするようになって消滅した。でも、当番制の時がきれいだったように思う。(14-17)
	○当番型
	19：階段掃除は月～土交代で、道まで掃除する。私は木曜日担当(4-10) 20：「いつも同じ人が掃除するのは申し訳ないから当番制にしよう」と月1回の掃除の時に決まった(4-21)。 21：下の住戸から月～土と当番が決まっているが、忙しいときはしなくて良い。(4-4) 22：一週間毎に当番で掃除する。一週間交代ぐらいなら気にならない。汚れているなというときにチョコチョコとやってしまう。(9-5) 23：週に一回、公園、棟周りのゴミ拾いが回ってくる。当番なので仕方なくする。(16-8)

比較的良く認知されており、掃除をする人に対する謝意が示され〈9～12〉、それが行為を一層促進するといった循環が見てとれる。加えて、例えば、「そういう行為に対しては、自分ができると返そうと思う。近所の年寄りを気にかけている〈10〉」というように、居住者間に新たな関係を生み出す、あるいは関係の深化を図る契機にもなっている。

ロ) 不特定型：「階段が汚れているなど思ったときに掃除する〈13〉」というように、清掃の主体・頻度ともに不定で、汚れに気がついた人が随時、掃除を行う。「誰かがやる」という責任の曖昧さが見られるものの、特定型とは異なり汚れた時にのみ行われる点で効率的である。また「いつもきれいな状態に保たれている〈14〉」ことから、身近な環境に対する住み手の関心も高いと思われる。清掃の範囲は、特定型と同様に階段室全体等、他者の領域にまで広がっている。また、「誰かがやっていたらお礼を言う〈15〉」という他者との関係も見られる。

ハ) 分担型：「それぞれが自分の周りを掃除する〈16・17〉」を典型として、各住み手が自住房屋周りだけを必要に応じて随時、清掃を行う。当番制から移行した例が多く〈18〉、居住者全員が等しく関わるといった平等性や、自らの場所には自ら責任を負うという明快さ、各自が最低限の清掃範囲を受け持つといった合理性が特徴である。住み手に最低限の集住マナーや自律性が求められる。反面、「各自」「自住房屋周り」という点で清掃主体と清掃範囲が一对一に対応し、他者の領域に立ち入らない、他者と関係を持たない完結した方法であり、近隣関係に作用しにくい。

ホ) 当番型：階段室の各世帯が当番制で清掃を行う。一つの階段室を共用する6世帯が各々月～土までの一日を担当して〈19〉、あるいは一週間ずつ担当して清掃を行う〈22〉。「いつも同じ人が掃除するのは申し訳ないから当番制にしよう〈20〉」というように、制度化することによって、定期性を確保しつつ、清掃の負担を均等化している。頻度が高く美しい状態に保たれていることから、住み手の負担感はさほど高くない〈21・22〉。反面、制度による強制力を負担に感じている住み手も見られる〈23〉。以前は多くの階段室で当番制が採用されていたが、「当番制にしくなくてもみんなきれいにする」ということで、当番制は徐々に減少し、自律的な方法に移行している。

階段室単位での階段室と外周りの清掃方法では(表一 6)、当番制は、階段室で[6件/31件]、住棟周りで[4件/22件]と各々2割弱に留まり、大多数が住み手の自発性に委ねられている。その中でも、階段室清掃では、分担型が11件、不特定型が6件を占めるのに対し、住棟周りは、特定型が17件を占めている。全員参加を原則にした月に一回の定期的な外周りの清掃が行われることも影響していると考えられるが、特定の担い手によって日常的な維持管理がなされる住棟周りに対し、階段室の清掃では居住者全員がより平等

表-6 階暖室単位での清掃・管理方式

棟	階 段 室	日常的メンテナンス		全体清掃		共益費	慶弔
		階段室清掃 (型・主体)	住棟まわり 清掃 (型・主体)	区域 分担	欠席時 罰金		
1	A	自発・不特定	自発・不特定	全体	¥500	—	病氣見舞い
	B	—	—			—	—
	C	自発・分担	自発・特定			当	葬式・通夜
2	A	自発・特定	—	階段室 単位	—	当	—
	B	自発・分担	自発・特定			当	何もなし
	C	自発・分担	—			当	—
3	A	当番	当番	階段室 単位	¥500	—	—
	B	自発・分担	自発・特定			当	—
	C	自発・特定	自発・特定			—	焼香のみ
4	A	当番・月1	自発・特定	階段室 単位	¥500	当	香典(過去)
	B	当番	当番			—	—
	C	—	—			—	—
	D	当番	自発・特定			割	香典
5	A	自発・不特定	自発・特定	階段室 単位	—	—	—
	B	自発・特定	自発・特定			—	通夜・葬式
	C	—	—			割	葬式手伝い
	D	—	—			—	—
6	A	自発・特定	自発・特定	階段室 単位	¥500	—	—
	B	自発・分担	自発・特定			—	—
7	A	自発・分担	—	—	—	—	—
	B	—	—			—	—
8	ｽﾏｰ 型	自発・特定	自発・特定	全体	—	—	見舞金なし
9	A	当番	自発・特定	階段室 単位	¥500	—	香典
	B	—	—			—	—
	C	自発・分担	当番			—	葬式参列
10	A	自発・特定 +分担	—	階段室 単位	¥500	—	葬式参列
	B	自発・特定	—			—	お参りのみ
	C	—	自発・特定			—	お参りのみ
11	ｽﾏｰ 型	自発・分担	—	全体	¥1000	—	香典
12	ｽﾏｰ 型	自発・分担 +年1水流し	自発・不明	全体	—	—	—
13	A	—	自発・特定	—	—	割	—
	B	自発・不特定	—			—	お参りのみ
	C	—	—			—	—
14	A	自発・分担	自発・特定	階段室 単位	—	割	見舞金なし
	B	—	—			—	—
	C	自発・分担	—			割	香典
16	ｽﾏｰ 型	当番(階毎) +年1水流し	当番	全体	¥500	町費 とも	病氣見舞い 香典 お祝い
17	A	—	—	全体	¥500	—	階段室単位 で香典
	B	自発・特定	自発・特定			—	—
	C	—	—			—	—
18	A	自発・不特定	—	全体	¥500	棟で 頭割	—
	B	自発・不特定	自発・特定			—	お参りのみ
	C	自発・不特定	—			—	—

【凡例】

□日常的メンテナンス

自発・不特定：不特定の居住者が清掃
自発・特定：特定個人による清掃
自発・分担：居住者が、各々の自住戸を清掃
当番：階段室全体で当番を決めて清掃
月1：月1回の清掃時に、全員で清掃
水流し：定期的な清掃時に、全員で水を流し清掃

□全体清掃

〔区域分担〕

全体：区域を分けずに全員で清掃
階段室単位：階段室単位で、清掃区域を分担

□共益費（階段室の電気・水道代）

当：当番制。階段室の月毎の当番が、金額の多少に関わらず支払う
割：頭割り。階段室（棟）の当番が立て替え、後に頭割りにし徴収

—：不明

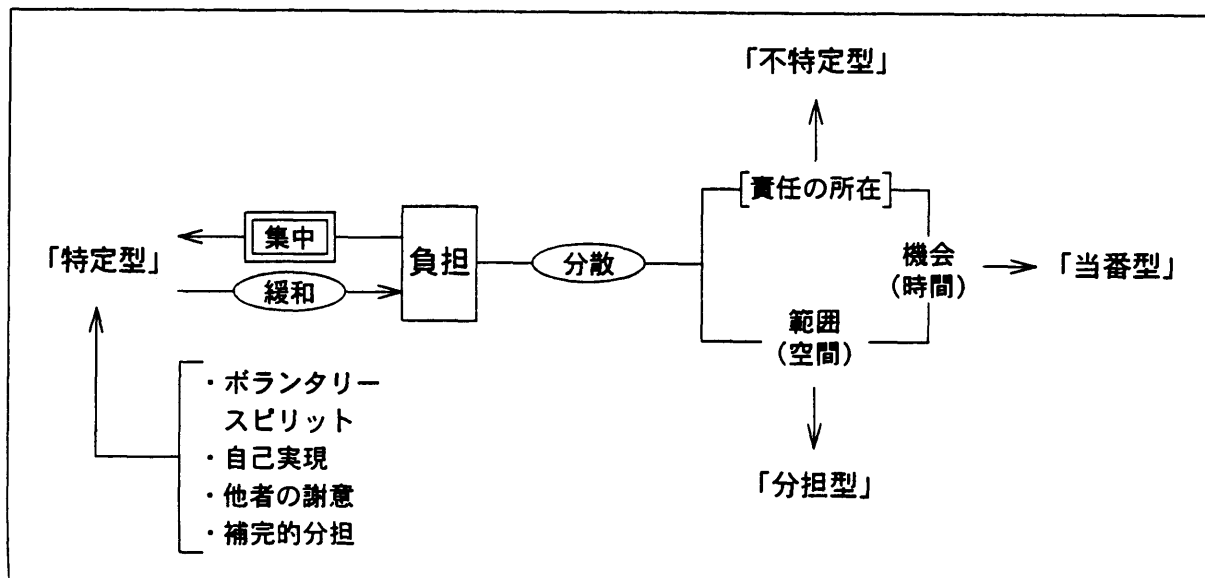


図-9 清掃タイプと負担の関係

に維持管理に関わっている状況が窺われる。

自律分散型の特性の一つは、維持管理方式において世代構成や近隣関係の違い、あるいは特定型の有無や負担感に対する考え方など、階段室という小規模な近隣単位での個別の状況を反映しうること、またその結果多様なオルタナティブがみられることである。二つ目には、いずれの方式をとるにせよ、維持管理に向けて一人一人の住み手に無理を強いることのない合理的な仕組みが生み出されていることである（図－ 9：ダイアグラム）。即ち、特定型がボランティアを有する住み手に清掃の領域（範囲）・時間（機会）・責任の負担が集中し他者の負担が低減されるのに対して、分担型は代わりに清掃範囲を自住戸周りにすることで領域を分散、当番型は清掃機会を均等化することで時間を分散、不特定型は他の方法に比して責任が分散される。いま一つの特性は、状況の変化を機敏に感じ取り、小規模グループで話し合い、維持管理方式が迅速に変化・対応する機動性である。

各々が、住み手本位を旨として自律的に形成された柔軟な管理形態となっている。

（3）全体清掃

日常的な維持管理に加えて、全員参加を原則とした外部清掃や草取りが行われている。本団地の清掃活動の中で最も規模が大きく、階段室清掃とは異なり、参加への強制力のある活動である。但し、団地全体で一斉方式を採りながらも、清掃の区域割り、不参加の場合の罰金徴収の有無や金額、あるいはその使途、清掃方式（機械利用・草取り・掃き掃除・ゴミ拾い等）、実施日の設定などの実際の運営は、階段室単位（スターハウス棟・17・18棟は住棟単位）に委ねられる「個別方式」がとられている（表－ 6：前出）。

そこには、小規模性のアドバンテージが窺われる（表－ 7）。清掃区域は自住棟周りや自階段室周りなど、身近な区域に細分化され、「自分（達）の場所」という意識が及ぶ範囲である。また、普段から顔見知りで付き合いの多い階段室の6世帯の小グループが当該区域を担当する。領域的・人的な小規模個別化は、「毎日通るところだから、みなさんに迷惑かけないように〈1〉」というように、使用場所と維持管理区域とが一致することで維持管理に関わる責任感を触発する。そのことが、清掃面積の違いから広い範囲を担当していても「他の棟から苦情を言われないうにきれいにする〈9〉」として不公平感に結びつかない。また「出ないと他の人が大変だから〈2〉」や「ここは年寄りが多いので、（それを補うために）夫婦で参加する〈3〉」など、参加者（＝近隣）の顔がわかるが故にその負担に配慮する意識を高めている。即ち、罰金のためや義務感ではない主体的な参加を促進している。逆に高齢者の身体的な負担感や日曜早朝にゆっくりできないことなどを理由に、一部消極的な意識も窺われる。階段室での付き合いが希薄な場合が多い〈4・5・6・7〉。

階段室や住棟によって清掃面積や清掃方法、不参加のペナルティが異なる〈8・9〉。清掃日や頻度も住棟の判断に委ねられている〈11〉。不参加のペナルティは、基本的には罰金制であるが、階段室や住棟毎に金額が異なり、また当日不参加の場合でも事前の清掃で構わないといった柔らかなルールを設けているところもあり、各々の階段室の事情（世代構成・就業状況など）に応じた弾力性に特徴がある。また、罰金は階段室単位で使われ、例えば、共益費に回す、清掃用具の購入など、直接自分達の使うものに還元される。

全体清掃は単に環境美化だけでなく、近隣関係を高める機会として捉えられている。「新しく入居してきた人を近隣に紹介〈16〉」・「（普段勤めに出ている人が）作業をしながらの立ち話で団地での出来事などの情報を得る〈15〉」・「普段会わない人とお喋りができる〈12〉」等のコミュニケーションの機会や「棟での決め事や連絡事項を話し合う〈17〉」等の寄合の場として多義的な役割を担う機会として捉えられている。そのことは、参加意欲の高揚にも寄与している。

表－7 全体清掃に関する住み手の意見

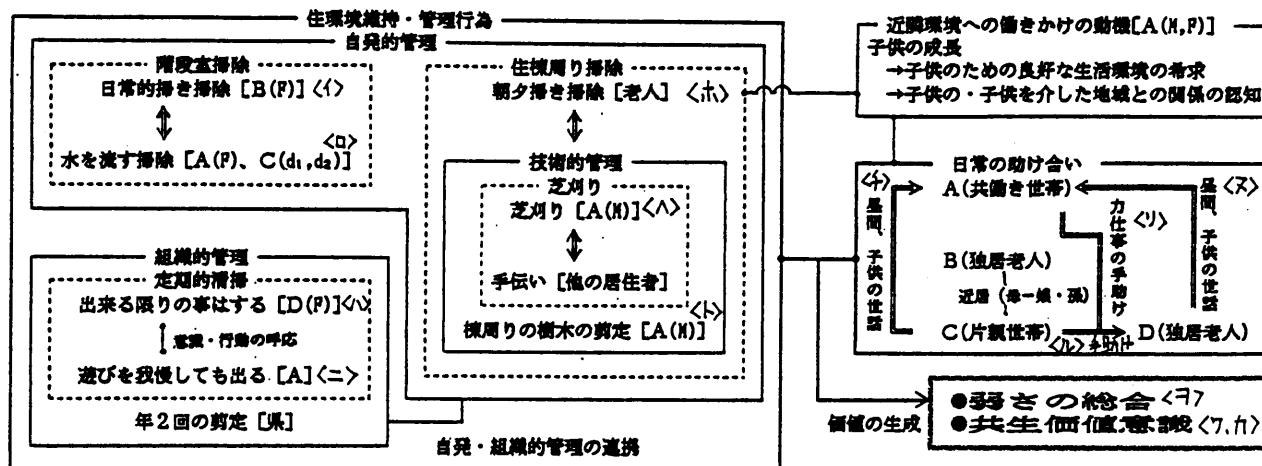
【主体的参加】	
1：	余程のことがない限り参加。毎日通るところだから皆さんに迷惑かけないように。、罰金のためにやるわけではない。←この棟はすごく良い。中でもこの階段が一番まとまっていた(1-4)
2：	月一回の掃除は必ず出る、出ないと他の人が大変だから。(14-17)
3：	夫と必ず二人で参加。下水管の掃除など男手が必要で年寄りも多いので早く済ませるために。(17-12)
【消極的参加】	
4：	月1回の掃除は余りでたくないがでている。←周りの人とは余り付き合いがない(1-13)
5：	大掃除は決められているので仕方なく、日曜の早朝に起きるのはつらい。 ←階段周りの住戸とは挨拶程度、仕事にでるから余り付き合いはない。(2-18)
6：	以前は決まりがしっかりしていて、月一回みんな出て草取りをしていた。今はでない人もいる。(9-3)
7：	参加者が少ない。お年寄りは罰金払って欠席、若い人も同様。(17-8)
【独自の取り組み】	
8：	ここの棟は、草取りが不要で掃き掃除だけ。年に一回階段に水流し清掃。(8-1)
9：	12 棟は掃除の範囲が広いが、他の棟から苦情を言われないうにきれいにしている。日常的に草取りをしているが、それをしなかったら草ぼうぼうだろう。(12-10)
10：	17 棟は階段単位ではなく、全体で草取りをする。菜園ができて負担が減った。(17-12)
11：	春から10月までは月一回（第2か3日曜日）、冬の間は草が生えないので2～3ヶ月に一回。具体的な日程は決めていない、階段下で話していて、「そろそろせないかね」という話になって、当番に言いに行く。月当番が階段下にお知らせを貼り出す。殆どの人が掃除に参加する。(18-6)
【派生的効果】	
〈コミュニケーションの機会〉	
12：	普段会えない人とも話ができるから必ず出ている。16 年間で父の葬式で一回だけでなかった。(9-5)
13：	共同生活では参加しなくてはならない。隣近所の人情が大切。久しぶりにあって話をする。(3-7)
14：	「罰金を出されるよりも、掃除にでもらう方がみんな好き」掃除しながら世間話をする。(4-21)
15：	作業しながらみんなが話しているのを聞く。コミュニケーションの場になっている(1-16)
〈新規入居者の紹介〉	
16：	新しく入居した人は掃除の時に、向こうの階段の人に紹介する。(1-4)
〈棟の寄合〉	
17：	掃除の時に棟全体の話をする。(8-1)

(4) 自律分散型維持管理システムの特性－典型事例から

階段室を単位とした小規模の居住グループ（大半は6世帯、スターハウスのみ12世帯で構成される）による自律的な維持管理システムが本団地の特徴である。それは、単に維持管理に柔軟性や合理性を発揮するだけでなく、近隣関係を含めたハード・ソフトの集住環境全体を文脈化し、独自の集住価値を発現している。ここでは、その典型事例を取り上げて、構造について明らかにする。

1) 弱さの重ね合わせ・共生価値（図－10：文中の〈カナ〉は表の記号に対応する）

この階段室は、夫婦(AM・AF)＋子供・単親(CF)＋子供(Cf)（他に1世帯）・高齢単身世帯(BF・DF・他に1世帯)の6世帯で構成されている。高齢者(女性)が多く、「階段室では主人(AM)が唯一の男で貴重な存在」といった特徴がある。階段室の清掃は、自宅に居る高齢者(BF)が日常的に行い〈イ〉、3回までホースを挙げての水流しは、身体的な負担が大きいので若いAFとCfが行う〈ロ〉。住棟周りも、「きとくな高齢者(DF)」が朝夕掃き掃除をしている〈ホ〉。階段室と外回りが二人の高齢者で分担されている。また、草が伸びればAMが機械を使って一人で草刈りをし、月一回の全体清掃の際に全員で(Aの子供も含めて)片づける〈ハ〉。植木の剪定も年2回AMが行う〈ト〉。それぞれが「個性・身の丈にあった」活動を「出し合い」「補完し合う」ことで、潤滑で密度の高い清掃



典型階段室における価値生成に関する意見	
イ) 階段室の掃除は大概私。流すのはAさん。皆思い思い [BF]	チ) Aさんの子供が小さい頃は遊びに来たり、ご飯を食べさせたりしていた [Cd1]
ロ) 1番上までホース上げて水流すのは若い人しかできない。他の人は年寄りなので [AF]	リ) Dさんはリウマチで力仕事ができないので、手伝ってあげる [AF]
ハ) ここでは、座れない人でも拭くだけでも、と出てくる。自分も掃除の時は、土日必ず空ける [AF]	ヌ) 昼間親がいないので、お世話になっていると思う [AF]
ニ) 階段顔を合わせない人と会うためにも（参加する） [AF]	ル) Dさんの荷物を上げてやったりする [Cd1]
ホ) 奇特な老人が朝夕掃いてくれて、団地の環境が保たれている [AF]	ヲ) お互い弱い所を持っていて、お世話になっていると思えば会話も優しくなる [AF]
ヘ) 芝刈るのは機械だから一人でもできるが、片付けはみんな手伝ってくれる [AM]	ワ) 本当に優しい人が多い。これからは年寄り暮らしと暮らさないと [AF]
	カ) 地域の人は大切にしないと [AF]

凡例	
[]	: 行為・発言の主体
A, B	: 居住者
M, F, s, d	: 夫、妻、息子、娘
—	: 補助
—	: 相互補完
—	: 相互関係
—	: 時間経過
<イ,ロ>	: 左表の意見に対応

図－10 典型階段室1の管理における価値生成の構造

活動が実践されている。また、全体清掃の際には、「(体が悪くて) 座れないお年寄り (DF) も、掃くだけでもと出てくる 〈ハ〉」状況に刺激され、A 家族は、「(ボーイスカウト活動で忙しいにも関わらず) 土日を必ず空けて参加 (AM) 〈ニ〉」するという、積極的意識の呼応関係が見られる。

そのような関係は近所づきあいにも及び、A や CF はリュウマチで力仕事のできない DF に代わって荷物の運搬や日常的な気遣いを行う 〈リ〉〈ル〉。一方、共働きの A に対して、DF は昼間子供達に食事を出したり 〈チ〉、鍵を忘れたときには自宅で預かるなど、子供の世話をよくしてあげる 〈ヌ〉。また、棟別対抗のボーリング大会 (自治会主催) の際には、ボーリングができない高齢者でも応援に来てくれるので、みんな積極的に参加する。

そこでは、近所付き合いと維持管理が連続的なものと捉えられ、お互いに連関・触発し合う関係がみられる。そうしたお互いの弱さを認知し、補完し合う関係 (「弱さの重ね合わせ」) が浸透する過程で 〈7〉、集住環境づくりにおける住み手各々の存在意義・価値が高まる。「うちの階段は、何でもどうしましょうかと話し合う (AM)」や「本当に優しい人が多い 〈7〉。地域の人大切にしないと (AF) 〈カ〉」には、サービスする・されるといった一方的な関係ではなく、両方向性による「共生の価値」が生成していることが示唆されている。

ロ) ヒト・モノ・コトへの能動的な働き掛け (図-11)

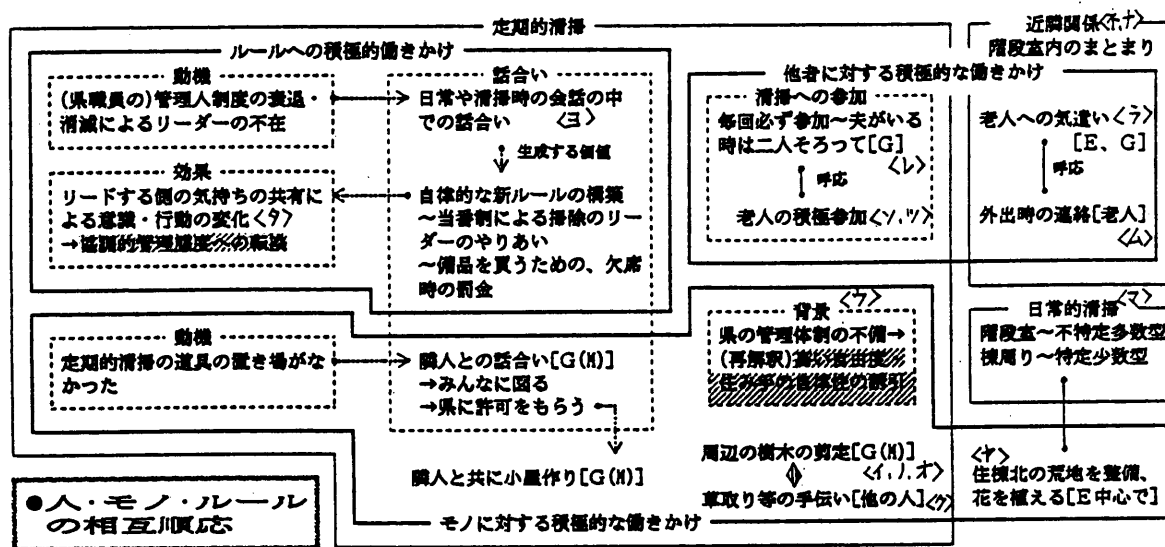
各棟に居住する県庁職員が管理人を委託され、維持管理にイニシアティブを発揮する仕組みは、県職員の入退去を繰り返すうちに、徐々に不安定になっていった。それに代わる仕組みが、ここでは住棟を単位として、寄合や清掃時の会話から自律的に生み出されている 〈3〉。掃除のリーダー (実施日の通知・道具の準備・ゴミの分別など) を月毎の当番制で全世帯に回すこと、掃除用具購入のために全体清掃の欠席者から罰金を徴収すること等の新たな仕組みが創られる。そうしたコト (仕組み) への自律的な働き掛けによって、各居住者がリーダーを経験し、「当番の気持ちが分かる」ようになる 〈ク〉。また、清掃や環境づくりに対する意識・行動も協調的なものに変化し 〈レ〉〈リ〉、年寄りが当番の時には手伝うなど、現在もその意識が継続している 〈マ〉。

仕組みづくりと並行して、モノ (環境) への働き掛けも積極的に行われている。罰金を活用して清掃用具の収納倉庫を手作りした、団地の顔にあたる場所で他者が手入れしない植木を定期的に剪定する 〈ウ〉と他の住み手が草取りを手伝う 〈ク〉、子供の遊びに危険な場所の整地、住棟北側の荒れ地を整備し花を植えた 〈ヤ〉等である。環境改善に向けての個々の発想による取り組みが集積し、環境全体の質を高め、それが更なる個の自律的な取り組みを促すといった、個と全体との間のフィードバックの関係が窺われる。そうした取

り組みが可能な背景には、協調的な住み手の意識に加えて、「今のように至れり尽くせりではなかった〈ウ〉」という計画の不備や弱さが「自分達でやらないといけないという強い意識〈イ〉〈ハ〉」を生起していることがあげられる。

ヒトへの働き掛けも高齢者などの弱者への気遣いが基本となっている。全体清掃の際の高齢者の負担を軽減するために必ず夫婦で参加する〈レ〉、あるいは一人暮らしの高齢者への見守りや支援が行われている〈ナ〉〈ウ〉。それに呼応するように、高齢者も必ず清掃活動に参加し〈ツ〉、また外泊時には連絡する〈ム〉という関係が生まれている。それは「団地なのに孤立感がない〈ホ〉」といった全体のまとまりをも生み出している。

ヒト・モノ・コトへの自律的な働き掛けは、不備や弱さへの気付きと補いをモメントとしている。ネガティブな状況を受けずにそれを積極的に受け止め、出来る人が出来るところから改善していくといったネガティブケイパビリティ（Negative Capability：負の包摂性）を住み手は有している。そうした局所的、部分的な取り組みは、全体に対して開かれた状況の中で行われること、あるいは開かれた状況を創りだすことで促進される。



典型階段室における価値生成に関する意見	
ヨ) ルールについて、寄り合い、話し合い [EF]	ト) 年2回果が剪定。自分もそれに合わせてやる [AM]
タ) 自分が当番をしてみて、その人の気持ち分かる→管理状態がかなり変わる [EF]	ウ) 今の団地のように至れり尽くせりではなかった。大分、人の手が入っている [GM]
レ) 定期的掃除は毎回必ず参加。夫がいる時は、必ず二人で参加→時間が早く、きれいになるお年寄りも多い [GM]	イ) 自分達でやらないといけない、という意識を強く持っている [GM]
ソ) ほとんどの人が病気でない限り出る [EF]	ノ) 奉仕の気持ちがないと、共同生活は出来ない [GM]
ツ) この階段は年寄りも出る [EF]	オ) 3年ぐらい前まで木の剪定をしていた→団地の顔、余り人がやらない場所 [GM]
ネ) 団地なのに孤立感がない [EF]	ク) 自分が剪定をしていると、他の人が草取りを手伝ってくれた [GM]
ナ) 現在ものの預かり合い。料金の立て替え、葬式の手伝い [GM]	ヤ) Eさんを中心に、近年住棟北側に花が植えられ、整備された [GM]
ラ) 「ちょっと具合の悪い時は、すぐに言いなさい」と、特に一人暮らしの老人には言っている [EF]	マ) 階段掃除はEさん、道は隣の階段の人がよくする。「働いているのだから休みはゆっくりしなさい」と言ってくれる→知らないふりをして時々菓子を持って行ったりする [EF]
ム) 下の老人は、2、3日外出する時に必ず連絡してから出かける [GM]	

凡例	
[]	行為・発言の主体
A, B	居住者
N, P, S, d	夫、妻、息子、娘
—	補助
—	相互補完
—	相互関係
—	時間経過
<イ,ロ>	左表の意見に対応

図-11 典型階段室2の管理における価値生成の構造

(5) 自律分散型テナントデモクラシーの意義

公営住宅の管理主体としての自治体が規約を制定し、それに従って維持管理が行われるトップダウン方式に対して、住み手に維持管理に関する裁量権が委ねられ、自律的に運営する「テナントデモクラシー」が重視されている。加えて、団地自治会が維持管理の内容や範囲の全体に対する統括的・集中的な責任を負うのではなく、階段室という近隣の最小単位を中心にした小規模自律型の維持管理活動が行われていることが、本団地の特徴である。それは、「自律分散型テナントデモクラシー」と呼ぶことができ、小規模性を活かして以下のような特性と有効性を有する。

- ①独自の維持管理方法：家族構成、世代構成、近隣関係、生活スタイルなど、小規模グループの個別の事情を考慮して、それに最も相応しい独自の維持管理方式がとられている。その結果、全体では多様な維持管理方式が見られる。
- ②方法決定への直接参加：維持管理方法を取り決める際に、ここでは階段室単位で良く話し合いが行われる。小規模であるが故の、話し合いの機会の設けやすさ、合意形成の容易さ、決定への全員の直接参加などが優位性であろう。
- ③柔軟性：階段室を単位とすることで、構成員個々の状況を比較的認知しやすい。そのため、例えば、活動への不参加でもその理由が理解しやすいことで許容されたり、また変化を感知しやすく機敏な対応ができる等の優位性が見られ、維持管理方法に柔軟性がある。
- ④維持管理の主体と受益者の一致：自らの日常生活領域を自ら維持管理することで、維持管理の主体と受益者が一致し、「自分の場所を自分達で管理」という明快さがある。
- ⑤日常生活と近隣関係と維持管理がダイレクトにリンク：特に、近隣関係を基盤にした維持管理方式がとられることで、両者間に相乗作用や補完作用が生成する。それは、維持管理の負担感の低減や自主的・主体的な活動を触発する。但し、近隣関係が希薄な場合には、維持管理活動が不活発になりやすい。
- ⑥開かれた活動：維持管理が他者の目に留まりやすい開かれた活動になり、また誰が何をしているか認知しやすいという意味で実名的なものになる。それが新たな近隣関係を触発しうる。

即ち、全体性に傾斜した維持管理が一律性・断片性に陥りやすいのに対して、自律分散型では、個別性・多義性がもたらされる。

(注1：高橋鷹志 人間－環境系の設計方法 建築雑誌、Vol.104, No.1288、日本建築学会、1989.8)

Ⅱ－２－５ 共用空間の領有の特性と意義

(１) 菜園づくりの経緯と実態

昭和３０年代を中心に建設されたＨ団地は、住宅不足への緊急対応として位置づけられていたために住戸・住棟計画に主眼がおかれ、外構は設計の手間や財政的な制約から「無計画」の状態であった。竣工当時、樹木・芝生等の植栽は殆どなされず、僅かに縁石によって通路部分が確保されていたに過ぎない。住棟間のオープンスペースは単なる空き地として残されており、「砂利や雑草で見苦しい(13-9)」状態であった。菜園づくりは、そうした環境の改善に加え、趣味と実益の場としての活用可能性を住み手自らが見出し、自然発生的に始まっている。各棟で南側空地を菜園の場として、基本的には住戸の間口を個人の区画範囲にして開墾されている。但し、当時は全体を管轄する自治会もなく、管理人を中心とした棟単位の組織が主であったために、出来た経緯も分割方法も棟毎に違い（例えば、１棟：話し合い、６棟：均等区画、１３棟：自由に、１６棟・１７棟：みんな勝手に、）、また建設年度も異なるために菜園は棟毎に独自に展開していく。その後、入退居が繰り返される中で、利用権の移動や境界の変更、駐車場への転用などが重なり、現在の状況に至っている（図－１２）。

菜園は、現在 ７割弱の住み手に利用され、広く普及している（表－８）。また、世代・居住歴・居住階数の違いを越えて多様な住み手に利用されている（表－９）。菜園づくりが住み手に汎く開かれ、利用機会が均等化されていること、それ故に、団地内の共同行為として位置づけられることを示している。

表－８ 外部空間の利用状況

	家庭菜園	駐車場
使っている	４３	３３
使っていない	２１	３０
合計	６４	６４

表－９ 家庭菜園の属性別利用率

世代別		居住歴別		居住階数別	
30才～	2：3 (40%)	10年未満	9：6 (80%)	1階	11：5 (69%)
40才～	12：5 (71%)	10年～	14：6 (70%)	2階	17：7 (71%)
50才～	6：5 (55%)	20年～	14：7 (67%)	3階	14：9 (61%)
60才～	14：4 (78%)	30年以上	6：2 (75%)	4階	1：0 (100%)
70才～	4：3 (57%)	利用している：利用していない（利用率）			
80才～	5：1 (83%)				

菜園の具体的な利用方法や内容は（表－１０：文中の〈番号〉は表の番号に対応）、特定の規約もなく個々の住み手の自由裁量に委ねられている。住み手は他者との関係を取りつつ、自由に菜園を活用している。そのために区画の形状や広さの違い、植えられている野菜・花・植木等の種類〈１～７〉、あるいはしつらえ方の多様さは、住み手の緑づくりの能力や興味・関心の違いを端的に反映し、個性を発現する場になっている。

住み手は、そうした菜園づくりに楽しみや生き甲斐を見出し、自己実現の場になっている。植物を育てることや緑環境を眺めることの楽しみ〈８〉〈９〉、菜園に対する興味の深

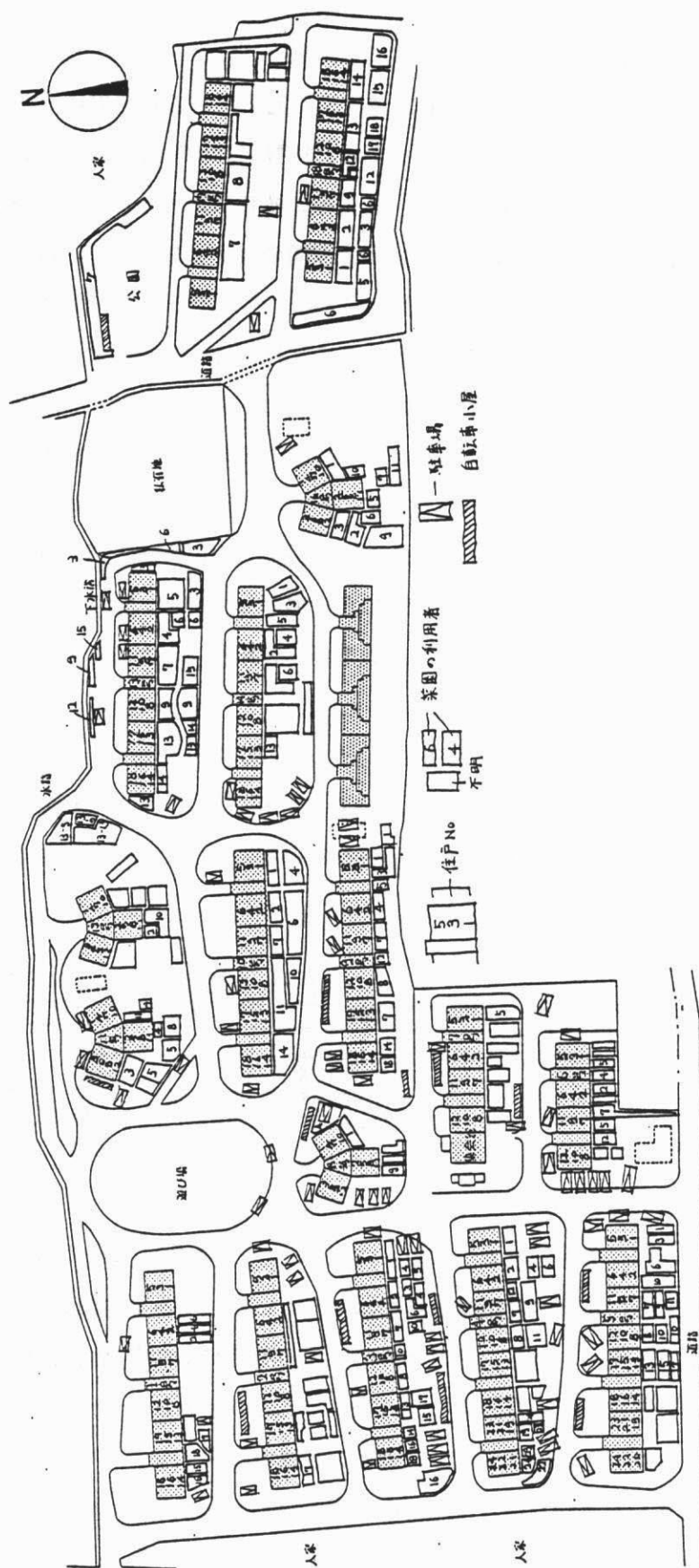


図-12 外部空間の使われ方とその利用者の分布

化〈10〉、健康づくり〈11〉など、多面的に評価されている。併せて、菜園づくりはヒトとヒトをつなぐ多様な機会を提供している。人が出会う場であり〈12〉〈13〉、お裾分けを誘発し〈15～18〉、相互扶助〈19・20〉や高齢者への気配り〈21〉などが発揮されるなど、菜園づくりが人間関係を活性化している。

一方、自由裁量の一環として、菜園に加えて、あるいは菜園を転用して駐車場とする共用空間の利用も見られる。住戸数に対する車の割合を設定して予め固定的に計画する方法に比べて、実際に必要な駐車台数を確保できる合理的な方法である。また、菜園と駐車場を個人の意向に応じて選択的に互換しうること、より多くの住み手が共用空間を領有することを可能としている。

表－10 菜園づくりの効果（住み手の典型意見）

【多様性・個性】	【人と人の関係化】
1：生け垣で囲い盆栽や植木(14-18) 2：トマト、キュウリは買わなくてすむくらいとれる。(17-7) 3：木を植えている－沈丁花、椿、南天、バラ、紫陽花、ブドウ(4-4) 5：花が好きで色々植えている。 6：菜園は「古居式有機農業」の実験場、雨水をためている(4-21) 7：野草園を作ってみたい(6-5)	〈会話のきっかけ〉 12：散歩がてら畑をしている人と話したり、挨拶程度の世間話からお茶を飲む関係にまで深い付き合いになった人もいる。(18-16) 13：畑を作っている人同士でよく話す。 〈情報交換〉 14：朝は 4,5 人一緒になって畑作り、経験者がみんなに教える。(18-9) 〈お裾分け〉 15：棟の人には花でも野菜でも自由に持っていいと言う(12-10) 16：野菜がとれたら一生懸命よそに上げる(17-7) 17：苗の交換をする(9-14) 18：土地代払っているわけではないから、自分ばかりでも嫌、人に上げる方が好き(13-4) 〈相互扶助〉 19：水やりの時には周辺の畑にも掛ける。逆に人から掛けてもらうことも多い。(9-14) 20：病弱な年寄りで手入れが届かないところを他の人が草取りをしてあげている。(8-1) 〈高齢者への気配り〉 21：畑にいつも来るお年寄りがいないと「病気になるか」と心配する。(10-6)
【楽しみ・生き甲斐】	
〈つくる楽しみ〉 8：芽が出て成長して実が生するというつくる楽しみがある(1-4) 〈見る楽しみ〉 9：家から菜園を眺める。草を取った後は気持ちがいい。(18-16) 〈興味の深化〉 10：余り好きではなかったが、色々つくって花が咲くようになったら楽しみになった。本を買って上手な作り方を学ぶ。(1-16) 〈健康づくり〉 11：さっぱりして気持ちがいい。そういう場所があるから汗を流せる。(1-16)	

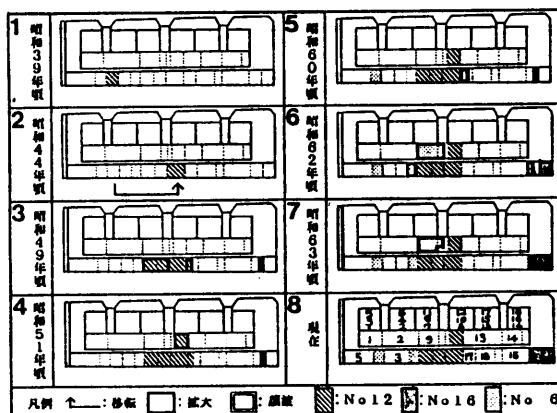
（2）菜園づくりにおける自律性の特性

利用方法が住み手の自由裁量に委ねられているにせよ、住み手は私的な利用可能性を過剰に活用して「我が儘放題、勝手放題」する訳ではない。菜園づくりには、住み手の多様な自律的側面が窺われる（表－11：文中の〈番号〉は表中の番号に対応）。

一つには、区画が特定の住み手に固定的に占有されるのではなく、必要に応じて他者に委譲されるフレキシブルな利用権であること（図－13）。実際の菜園獲得の方法は、入居

表－11 菜園づくりにおける自律性（住み手の典型意見）

【フレキシブルな利用権】	【共有意識】
<p>〈区画の自由な委譲〉</p> <p>1：後から入居した人には前の人の畑が使えることを教えてやる(13-9)</p> <p>2：入居時はみんな作っていて場所がなかった。下の人が退居する際に「作りませんか」と言われてそこを引き継いで始めた(18-9)</p> <p>3：畑をしたい人がいれば分けてやる(10-6)</p> <p>4：子供の球根観察のためにちょっと貸した。やっぱり果の土地だからね(17-7)</p> <p>5：昔はしていたが、勤め始めてできなくなった。下におばあさんが越してきたときに「下さい」といわれたのであげた(10-15)</p> <p>6：畑をしないからと譲り、またしたくなったと返してもらった(6-7)</p> <p>〈つくらない自由〉</p> <p>7：みんな畑を作ろうというのも強制できない。角が立つだろう。(6-5)</p> <p>8：一応自分の場所があるが、手入れが要るので「いらない」。(2-9)</p>	<p>〈景観の共有〉</p> <p>16：上手な人がいて珍しい花を作ったり、野菜をうまく作っているのを眺められる。「共有という感じ」本当に良いところ。好き。(1-16)</p> <p>17：今でも野菜は作らず、花を作っている。花はきれいだしみんなが眺められるから(10-6)</p> <p>〈他者の利用〉</p> <p>18：前を芝で埋めようと思う。子供達が遊べるし、美しくしていれば誰でもほっとする。(4-1)</p>
【広さの抑制】	【美観形成・維持】
<p>9：自分の家の軒先が自分の場所という感じ。余り、侵略もしなかった(13-9)</p> <p>10：畑を下さいという人はいなかった。だからといって畑を広くとりもしなかった。(13-9)</p> <p>11：欲張っていると思われるので、他の人を誘ってみるが誰もしない(12-10)</p>	<p>〈環境改善〉</p> <p>18：入居当時草茫々であんまり汚かったので、草を取ってひまわりを植えた。(18-6)</p> <p>〈美観創造〉</p> <p>19：きれいにしないと、みんなのモノだし、一軒家ならいいが、団地だし(13-4)</p> <p>20：菜園は、みんな自分のところを日頃からきれいにしている(18-16)</p> <p>21：引っ越した後の畑があいて草が生えるので、花を植えた。(12-10)</p>
【他者への配慮】	【トラブルと対処】
<p>〈菜園整備の手助け〉</p> <p>12：畑を始める際に、近所の人困いをして、土を持ってきてくれた。(4-1)</p> <p>〈次期利用者への配慮〉</p> <p>13：Nさんは退居する際に、(次の人が使いやすいように)植木を抜いて平地にしていって。(14-17)</p> <p>14：いつでも人に譲れるように木は植えていない。(10-6)</p> <p>〈隣地の日照確保〉</p> <p>15：ユズの木が大きくなって、よその畑に影を落とし始めたので切ってしまった(13-4)</p>	<p>22：後から来た人に畑を独り占めしているといわれた(12-10)</p> <p>23：s 45年頃、畑の広さでもめた、階段6軒で話し合っ分けて直した。その後20年そのままの状態(1-4)</p>
【評価】	【評価】
	<p>24：Tさんの畑は、「お菓子のごと」きれいにしている。(1-16)</p> <p>25：通りがかりの知らない人でも「花きれいですね」と声かけてくる(18-9)</p> <p>26：〇〇さんは畑作りがうまい</p> <p>27：草茫々のところは嫌な感じ、草を抜き花を植えてきれいにしていると「いいな」(13-9)</p> <p>〈競争〉</p> <p>・今はみんな競争で作っている(13-9)</p> <p>〈誇り〉</p> <p>・13棟は特にきれいだと思う。(13-9)</p>



No. 12 (S.39入居)	獲得	移転	拡大	譲渡	現在
	空地	他の前住者	他の前住者	-	
No. 16 (S.46入居)	獲得	拡大	譲渡	現在	変化 (前住者)
	空地	他の前住者			
No. 6 (S.60入居)	獲得	拡大	譲渡	拡大	現在
	前住者	他の前住者	-	開拓	

図－13 菜園利用権の変遷

時に前住者が利用していた菜園を受け継ぐこと〈1〉、あるいは、退居者から事前に菜園を引き継ぐこと〈2〉が一般的である。しかしながら、「畑をするという人がいれば分けてやる〈3〉」というように、菜園利用者は、決して菜園を頑なに独占するのではなく、いつでも他者への配分の用意がある〈4～6〉。と同時に、菜園づくりは強制されるものではなく、その意志のない人には「つくらない自由」が担保されている〈7・8〉。不要になった菜園は、別の需要者や熱心な人に譲られる仕組みが成立している。

二つ目には、同様に広さに関しても、自分の領域を際限なく拡大するのではなく、自己規制が働くことである。初期の開拓期に、棟によっては空き地を各自が自由に畑に開墾していくが、その場合でも例えば、住戸の間口を境界線にするといった暗黙の了解が見られた〈9〉。また、展開期においても、不要になった菜園を独占的に獲得するのではなく、他者のために残しておく配慮が見られる〈10・11〉。

三つ目には、他者への積極的な配慮である。菜園を始める住み手への菜園整備の手助け〈12〉、潤滑な菜園づくりのために、次期利用者に配慮した「木を植えない」等の下準備〈13・14〉や「(よその畑に)影を落とさないように剪定〈15〉」する環境の保全、など、独善的な菜園づくりに陥らない意識が窺われる。

四つ目には、他者との共有意識である。フレキシブルな利用権に見られる空間の共有意識に加えて、菜園が形成する景観や環境を個人で楽しむだけでなく、他者の目を楽しませたり〈16・17〉、あるいは、他者も使える場として開放する〈18〉等、意識的・無意識的に開かれた菜園づくりが行われている。また、産物や材料(苗・種子・肥料)のお裾分けが非常に活発に行われている。近隣関係の潤滑化という側面もあるものの、「土地代も払っていないのに」産物を独占することに対するためらいや収穫という成果・達成感を他者と共有することで、菜園づくりを自己完結させない意識が窺われる。

それとも関連するが五つ目には、環境を美しく整えるという意識である。菜園づくりはその契機から、荒れた空地の環境改善が一つの目的であった〈18〉。今日でも、各自が自分のところを美しくし整えておくことに意欲的である〈20・21〉。「きれいにしないと、みんなのモノだし、一軒家ならいいが、団地だし〈19〉」に指摘されているように、菜園は、自己の楽しみ・生き甲斐が発現する個的な場であるものの、好き勝手にできる場所ではないという自己規制が働いている。同時に、個々の菜園の景観が全体を左右するといった個と全体の不可分の関係が意識されている。

六つ目には、トラブルへの対処力を有することである。こうした菜園づくりにトラブルもなくはない〈22〉。しかしながら、例えば、菜園の区画でトラブルが生じたときに、階段室グループで話し合い、土地を配分し直すことで解決するといった自助力がある〈23〉。

(3) 自律性生成の条件

以上のように、他者との「協調」・「共有 (Share : 分かち合い)」が住み手個々の自律的な菜園づくりのための規範の中核となっている。では、そうした自律性を生成する条件は、いかなるものであろうか。

その基本は、「領有」概念であろう。即ち、住み手が自律的側面を語るときに発する「自分の土地ではないから」「みんなの場所だから」「土地代を払っていないから」などにみられるように、菜園空間を「共用」・「非所有」の場として捉えつつ、その土地の利用可能性を「自らのもの」として定着 (Fixture) し、長期的に活用することが、自律性を促進している。共用空間における菜園という場は、共と私の間領域としての Semi-common や Semi-private など、領域の段階構成では捉えられない、共性と私性が重層化した両義性のある場と言えよう。一般的な共用空間が「自分達の場所≠自分の場所」(自分達の場所であって自分の場所ではない) という捉えられ方なのに対して、領有は、「自分達の場所＝自分の場所」(自分達の場所でありながら自分の場所でもある) という対立概念が両立 (Ambivalence) する場を創出する。それによって他者に対する協調的配慮と伸びやかな個の振舞いが触発されている。また所有しないことが、自律性を一層促進している。

加えて、場の「開放性」である。規範の中核である「協調」「共有」は、何れも他者との関係性から生起するものである。自律性が自ら立てた規範に従って自らを律することであるならば、住み手に所与の内発的・自己完結的な規範 (これは往々にして勝手な状態をもたらしやすい) よりも、寧ろ住み手が主体的に行動しながら外部 (他者) と接触し相互作用を繰り返すことで会得される、あるいは創出される自己生成的な秩序が規範形成の中核である。外部との相互作用のためには、境界が外部に開かれ、他者との多様な関係性を生み出すことが求められる。菜園づくりは、物理的にも社会的にも開かれた場である。・住棟間という他者の視線に曝されやすい場所に位置し立ち入りが自由なこと、・菜園の場が相互に隣接連続すること、・利用機会がすべての居住者に均等に与えられ利用者が特化しないこと、・ヒトとヒトをつなぐ (例えば、お裾分け、菜園での立ち話、相互扶助等) 契機を産出していること等、多面的な開放性が多様な関係性をデザインしている。

いま一つの規範をつくり出しているのは、個々の菜園に対する住み手の噂や評価である。菜園という共通性のある枠組みの中での個性や差異は、住み手の噂や評価によって相対化される (24・26)。例えば、「草茫々の畑は嫌な感じ、花を植えていると良い感じがする (27)」という評価は、美しい菜園は目標に、荒れた菜園は反面教師になり得ることを示唆している。「通りがかりの知らない人でも『きれいですね』と誉めてくれる (25)」は、自らの菜園づくりの適切さを確認することになる。こうした住み手の評価を可能にするのは、他

者の目に曝されるといった視覚的・動線的な開放性と菜園という共通の土俵が用意されていることである。

(3) 駐車システムの特徴

一方、駐車場の利用方法にも、自律的な側面が窺われる(表-12: 以下文中の〈番号〉は表中の番号に対応)。駐車場は、菜園や空き地を転用して設置されている。駐車台数が増加していた時期は、菜園が減少していたが、近年高齢者の入居が増えるにつれて、一部の駐車場が空き地となり、菜園に戻される状況もある。菜園と駐車場の両方向の転用やへた地状の空き地の活用は、保有台数が駐車可能台数を上回ったときに生じる混乱を避け、共用空間の合理的な活用方法を示唆している〈1～3〉。階段室単位よりも住棟単位で駐車方式が決められていることが多く、管理単位は状況に応じて柔軟に変化していることが窺われる。一部階段室グループでは事前に混乱を回避するために、話し合いによって駐車スペースを各世帯に専用的に割り当てるような配分が見られる〈4〉。

しかしながら、多くの住棟や階段室は、空いている場所に自由に駐車する方式を採用している。駐車場の管理が厳しく求められている今日の一般的状況に対して、本団地は、保有率が少ないこと(51%)もあるが基本的に管理しない状態で維持されている〈5〉。そこにはいくつかの暗黙の了解が存在している。駐車場所は習慣的に決まっており、住み手は各々の位置を認知しそこには駐車しない〈6〉。但し、他車がその場所に駐車している場合には、とりあえず別の場所に駐車する〈8〉。こうしたフレキシブルな駐車方式には、「領有」意識が作用しており、駐車スペースの抑制に寄与する巧みな方法である。

表-12 駐車システム(住み手の典型意見)

【駐車場への転用】	【暗黙の了解】
1: 以前畑だったところをその使用者が退去後、駐車場にした。(14-17) 2: 植木を移し替えて駐車場にした。(10-15) 3: 2台目の駐車場は、転出者の後をもらった。(10-15)	〈駐車場所の認知〉 6: 場所は決まっていないが、誰がどの場所に停めるか知っていて、そこには停めない(17-12) 7: 他の車が出られないところにはおかないという暗黙のルールがあるようだ(18-9) 〈来客への配慮〉 8: 来客の車は空いている所に適当に停める。客が帰るまで、別のところに停めている(4-4)
【駐車方式】	【トラブルと対処】
〈場所の固定〉 4: 駐車する場所は車をもっている人同士(階段室)で話し合って決めた。(10-15) 〈自由駐車〉 5: 駐車スペースは特に決まっていない。いつも自分が停めるところに他の車があると、とりあえず別の場所に停める(13-9)	9: よその畑に車を停める人がいる、注意すると喧嘩になるので黙っている(17-8) 10: 客の車を空いているところに停めたら、いつもそこに停めている人に文句いわれた。そこで、9棟全体で来客用の車の札を作った(9-5)

一方、駐車場所等に関するトラブルが発生した場合でも、個人対個人の問題に帰せず、住棟単位での話し合いで、例えば来客用のプレートを作成するなどの解決策が講じられている（10）。

（４）維持管理からみた菜園づくりの意義と評価

菜園づくりにおいては、明文化された規約や組織的な管理は一切見られず、住戸改変に見られるような管理という固苦しい概念は存在していない。そのために、菜園づくりを実践している住み手には管理主体であるという意識や逆に管理されているという意識がないままに、しかし結果的に共用空間全体の維持管理に全面的に関わっている。即ち、生き甲斐や楽しみ活動としての菜園づくりそのものがダイレクトに集住環境の維持管理に連動するという構図である。維持管理活動が住み手に楽しみをもたらし、義務感や負担感から自由な維持管理が展開されている。併せて、「菜園をつくることで、全体清掃時の草取りの手間が省ける」というように、菜園づくりはフォーマルな維持管理活動に伴う負担を実質的に低減することにも寄与している。

一方、菜園利用者が、非利用者に比べて、草取りや清掃などの日常的な共用空間の維持管理活動をより活発に行っており、菜園づくりは集住環境全体に対する関心を高め、環境への働き掛けを促進するといえよう。

共用空間を維持管理することを単にフォーマルな管理手法に帰することなく、多義性のある創造活動へと展開するところに住み手の自律的な維持管理活動の特性がある。

その際、維持管理は、空間（領域）的・人（主体）的に個のレベルに分化しており、個が自律的・協調的に作用し合いながら有機的で秩序ある全体を創造している。これは、「自律分散システム」と軌を一にする。そこでは、トップダウン的なシステムに比して個々の動きの自由度やパーソナル性が活かされ、柔軟性のある維持管理がみられる。そのために、個々の自由な菜園づくりを通して個性的な場が生み出される。それらが協調・集積することにより、共用空間は多様性と緑環境による統一感のある全体性とを同時に獲得している。変化に富みつつ纏まりのある有機的な集住環境が生み出されている。

ここでの住み手による自律的な維持管理活動は単なる物的環境としてモノの価値を保全することに留まらず、ヒトとヒトの関係、自己実現などの多面的な価値を創造している。

Ⅱ—3 高密度住市街地における共生価値生成の構造に関する研究

—価値の顕現化に向けての住環境計画—

Ⅱ—3—1 はじめに

(1) 研究の背景と目的

既成市街地を対象として、「弱い計画性」^{*1}を評価する住環境研究の領域が拡大しつつある中で、住民の住意識や主体性に基づく住環境整備の計画手法が求められている。これに呼応して、「人間を取り巻く住環境の属物的構造と生活する住民の属人的な意識構造という 2 つの側面から住環境の評価が行われるようになり」^{*2}、住民の意識や評価を物理的環境と関連させることで、住環境の客観的評価に新たな視点を提示する研究が見られる。その反面、こうした研究手法に内在する問題点も指摘される。第 1 には、住民の住意識や環境評価などの心理的側面を扱う上で、本来住環境形成に対して、能動的に関わるべき「住民を単なるデータ」^{*3}として客体化すること。第 2 に、物理的因子と心理的因子の相関関係を定量的に把握することは、一定の有効性が認められるが、空間と人間は二項対立的かつ静態的な対応関係として捉えられ、「住民の自力更新など動態的な人間と空間の相互作用」^{*4}の視点が欠如している。第 3 に、定量的分析の限界として、因子の限定性による人間・空間の歪小化の問題があげられる。

「弱い計画性」に最も良く適合している典型である高密度住形態の既成市街地を対象とする研究を概観すると^{*5}、高密度住形態に起因する物理的住環境の劣悪性に着眼し、劣悪な住環境を抽出しその改善方法を提示するか、劣悪な環境を形成した要因について分析し、その変容過程や存在形態を認識論的に解明する研究手法が多々見られる。

そもそも住環境計画が、日照、通風、防災、交通、景観等の物理的環境要素別の解析とそれを目的とそれを反映した物的環境整備手法に傾斜すると捉えることは、「物的偏重」(physical bias)、「物象主義」(physicalism) 等と、すでに批判されてきており^{*6}、それは「空間形態と社会過程の連続的な相互作用の働く動的なシステムと考える」^{*7}ことが今日の見方であろう。住民の主体性と空間形態の相互作用に着眼するならば、さらに進んで、吉武が人間の側の環境への心理的順応過程の分析で明らかにしたように^{*8}、人と人の関係や住み手の内発的な個性創出から生成する生活に価値を見い出すアプローチは、物的主義の価値観を乗り越える可能性をもっている。

そのような接近法は、住み手の「行動と環境との間に相互に発見・啓発し合う関係を容認する相互浸透的な考え方 (transactionalism)」^{*9}を意味し、住み手間に集住の「創造的気運を醸成」することに生活の価値を見い出す意識を高めることになる。そうした生活価

値観は、住み手と他者を含めた住環境との間に、直接的な相互触発の関係が能動的に生起し続ける中から、合理性・機能性を越えて醸成される人間関係や住環境に生活の本質的意味を見い出すことといえる。

これを「共生価値」と呼ぶならば、これからの住環境計画において、物的環境価値だけでなく、共生価値の顕現化とその増殖へ向けての計画手法の構築が望まれる。なぜなら、共生価値重視の考え方は、家族の解体や人間関係の希薄化、あるいは他律的システムが浸透する文明全体の動向に抗がって、漸進的に人と人、人と空間の関係化を自律的に深化し続けるからである。

以上のような背景をもとに、本研究では、自然発生的に高密度住形態をとる既成市街地を積極的に評価し、そこでの近隣関係や住環境の仕組みや魅力を解明しつつ、物的環境の劣悪性を乗り越える役割を果たす共生価値生成の構造と人と人の関係及び、人と空間の関係から明らかにし、共生価値づくりの視点から、住環境計画への基礎的知見を得ることを目的とする。あわせて、共生価値生成の条件として、全体に対する秩序感をもちつつ、各自が伸びやかな自己表現を行なう自律的住まい方の作法を提示し、その有効性と意義について考察する。

(2) 調査概要

－1 調査対象地区の概要

北九州市の K 地区は、自然発生的に高密度住形態をとる既成市街地である。当地区の概要を表 1、図 1、2 に示す。当地区は、住戸の狭小、過密性、不良住宅率の高さ、接道条件の悪さなど、物理的住環境に問題が大きく、また同和地区として、長年、社会的差別を受けてきた。一方、そこでの生活に着目すると、濃密な人間関係、住戸近傍空間への生活感に満ちた表出や溢れ出し、有機的路地のネットワーク（図 2）など、物的環境を補完し、劣悪性を克服するような豊かな住まい方が見られ、共生価値生成の構造把握の上で、最適な地区である。また、1991 年度完了を目指して、小集落地区改良事業が進行中で、事業前後の近隣関係や、住環境の比較による事業手法の評価も検討しうる。

－2 調査方法

本研究の目的に沿って、近隣関係の活発さや有機的路地等の特性を基準に 7 ブロックと、最も人通りの多い辻空間 1 ヶ所を選定した（表 2、図 3）。ブロック毎に各々、1/3 の世帯数を家族構成等が偏らないように抽出し、個別訪問により、世帯主や主婦を対象に、地域生活や住まい方等のヒヤリングと家具採集、及び、路地への生活のあふれ出し・表出の観察調査を行った。調査は、1987 年 12 月に行なった。（調査世帯数：46 戸）

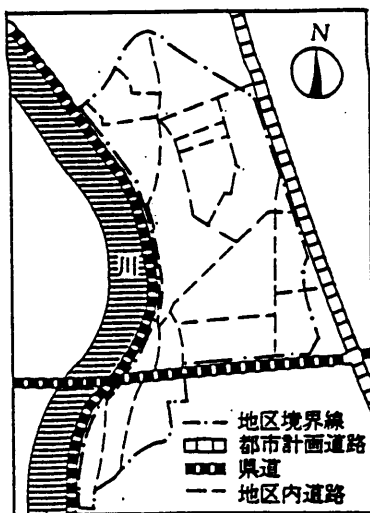


図1 地区の骨組

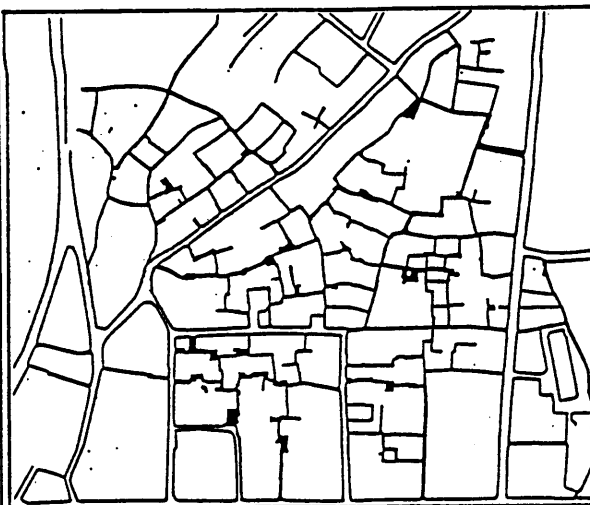


図2 K地区の路地系図

表1 K地区の地区特性

人 口	4,800人
面 積	1,920戸
住戸数	34ha
住宅不良度	57.8%
戸当り住宅地規模	92.8㎡
宅地接道状況	
1.8~4.0M	30.5%
1.8M 未満	10.7%

表2 調査対象区域の特性

- A: 計画上、歩行者専用道路となる部分。店舗、集会所が面しており、これらは存置となる。
日常から沿線住民が路上に集う姿が目立つ。
- B: 生活感を感じられる表情のある路地。
- C: 『共用の庭』的空間であり、周辺は兄弟及び親戚関係もある。今年の盆にはこの空間が生きていた。
(盆の準備作業のため)
- D: 地区のメインストリートの一つであり、人の行き来の多い「三尺道」。沿線の家の人との顔合せ、声のかけあい生まれる。計画上は歩行者専用道路。
- E、F: 兄弟及び親戚関係にある家の集まり。
- G: 同一地主からの借地人で、結束力のある集まり。
- H: 『辻』的空間であり、人の活力が最も感じとれる所。風呂屋があるので、かなり広い範囲から人が集まって来る。

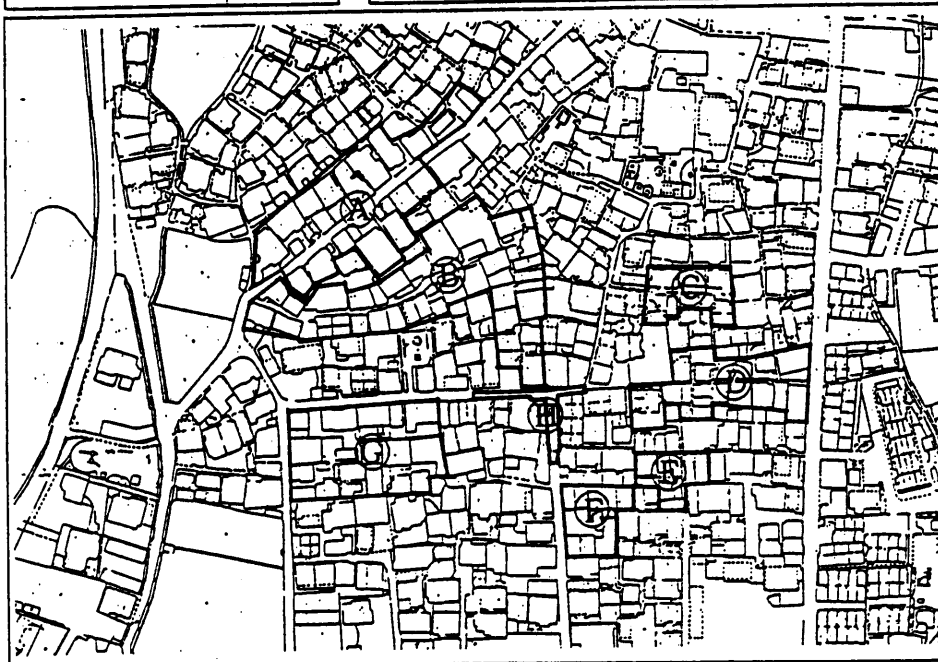


図3 調査対象区域

Ⅱ—3—2 近隣関係における共生価値生成の構造

劣悪な住環境の乗り越えをモメントとした、人と人の相互作用に伴う「共生価値」生成の構造と、そこから増殖する新たな価値を解明するため、地域生活の実態・意識に関する住民の意見を集約して表 3、4、5 に示した。そこには、相互扶助、協調、楽遊の 3 つの基本的な共生価値が見出せる。以下、各々の内実化を図り、生成の構造とその意義について分析する。

(1) 相互扶助

—1 生活の開放性（典型意見：8、9、15）

各家庭生活は、完結的・閉鎖的でなく、他者に向かって開き合い、自己の生活に対して、他者が依存を求めて、あるいは扶助を差しのべて立ち入るのを許容することによって成立している。それは、自他の生活の境界を、様式と領域の両面において「入れ子」化することであり、他者の生活を制限する相互干渉ではなく、他者の生活を尊重し保障し合う「相互補完」の生活交流の基盤となるものである。

—2 偶発性への対処（典型意見：12、22、23）

火災や行方不明捜索等の非常時に留まらず、意見 12 の様な日常の偶発的出来事に、機敏に反応し、対処する態度が育まれている。それは、外に向かう意識を持続的に発し、小さな生活の変化を捉える住み手の「外なる目」の存在を示唆している。それが「外出時にも鍵をかけない」（意見 6）といった安心感につながる。

—3 弱者の保護（典型意見：11、13、16、18）

相互扶助の基本的モチベーションは、弱者に対する思いやりであるが、特に、子供・老人・病人・金の必要な人などは、保護されるべき対象として重視され、地域による多様な援助が行われている。家庭のみならず地域に帰属する子供や、地域で生活する単身老人などから、人と地域、あるいは世代間を越えた人と人の強い結び付きがみられ、「老若提携型の自律的福祉」の典型を示している。

—4 全日制コミュニティ^{*10}：近隣関係の基盤

相互扶助は日常・非日常、子供・老人、物・行動といった場面、主体、方法を問わず生活の多様なレベルに浸透し、地域社会や個々の生活を維持する上で有効に機能している。人と人の関係化を図る上での基本的条件である他者への思いやりを契機とした相互扶助が基盤となって、協調や楽遊の共生価値が生成される。

(2) 協調生活

他者との共同性や調整を志向する協調の内実化として、「共同感性」^{*11}が育まれている。

〈柔らかなプライバシー〉と〈集住マナー〉は、他者に対する寛容性を伴った開放的なブ

プライバシーの概念（意見 24）と、自己規制（意見 29）という他者の生活を保護し、その便宜を図ることへ向けての二重のチェックとして作用している。そこには、他者の生活を保障するために自己のプライバシーの枠を状況に応じて変化させる「プライバシーの相対化」が図られ、共に住む関係を潤滑化している。

また、環境に向けての協調には、自分のためのメンテナンス（意見 32）や庭作り（意見 34）によって、環境が整えられ、それが結果的には、他者や全体で共有されるメカニズムが生成している。それは、「建築協定」のように、全体を一定のルールで規定し、個々を従属させるのではなく、全体に対する秩序感のもとに、個々の自律的行為が集積して、全体の環境が形成されるという「全体と部分の呼応関係」に支えられている。

（3）楽遊生活

楽遊の典型として、路地における老人を中心とした〈集い〉（意見 36）に着眼すると、本来の意味である相互交流による娯楽や情報交換等に加えて、特に屋外という点からの多様な意味がある。一つには、「ストリートウォッチャー」としての価値であり、集い行動が、そのまま周辺に対する自然監視を果たしている。その結果、住民の安心感という新たな価値を生み出す。二つ目には、住戸の通風・日照の劣悪性や狭小性に起因した、路地へのネガティブな集い行為のあふれ出しが、集い行為を通じて「楽しみに転換」していることである。三つ目には、固定的な集団編成による閉鎖的な集いではなく、道行く人が気軽に参加できる「開放的集い」であり、随時、離合集散が展開されている。

Ⅱ—3—3 共生価値から見た住戸近傍空間の特性

ここでは、住戸近傍空間に着目して、高密度性に伴う住環境の劣悪性を克服するような空間構成や使われ方の特性及び、両者の相互作用により生成される共生価値について分析を行う。

(1) 住戸の開放性（内と外の連続性）

内外空間の接続性を分析するために、その接点としての玄関土間から、日常的に利用される居室〔居間、台所（DK を含む）〕のうち、どの居室に直接アクセス可能かを指標として、地区内の住宅（29 例）を「居間型」、「居間＋台所型」、「台所型」に分類した（図 4）。あわせて玄関を介して外部空間と接続する日常的居室数の最も多い「居間＋台所型」の中から典型事例を抽出し、玄関の具体的な使われ方の把握（図 5）を行なった。空間上の特性の一つに玄関戸は、通風性の向上、狭あいな路地の通行の安全性保障及び、ハレの空間としての格式性を意図して、引き戸（引違い・方引き）になっている。

二つ目は、玄関土間と LDK の間にバッファ空間としての玄関ホールや廊下等が全く見られず、玄関土間と LDK を直接連続させていることである。その原因として、四つ間取りに代表される農村住宅の平面の継承と、住戸の狭小性や通風性が考えられる。

そうした玄関の特性は、本来の意図を越えて、結果的に内外空間の接続性を強化することで、住戸を外に向けて開放し、両者の一体化を促進する作用をもっている。それは同時に、住戸の私性の希薄化と外部空間の公共性の希薄化という二つの意味をもつ。内外一体化された玄関まわりは、第二のリビングスペースとして活用され、外に向けての生活を展開するとともに、他者との交流を触発する。そして、「前の道を人が通っても気にならず、むしろにぎやかで良い」というふうに、住戸の私性の希薄化が積極的に評価されることにつながる。また、敷地の狭小性により当地区に広く見られる居室や縁側が路地に直接面することも、住戸の外に向けての開放性をより一層強める（図 6）。

そうした、住戸の開放性に伴う内外空間の一体化によって、如何なる行為が促進され、そこにどのような共生価値が生成されるのであろうか。前述の典型事例 2 例により得られる結果を表 6 にまとめた。住戸や敷地の狭小性や、通風の劣悪性等を解消することから導かれた住戸の開放性が、人と人の関係や人と環境との能動的関係化を促進している。そして、路地と住戸、公空間と私空間、あるいは自己と他者の間に、衝突ではなく調合のメカニズムを生成している。

(2) 空間増殖による有機的空間の創造

高密度住市街地を形成する基本単位としての住戸の開放性と内外一体化した生活の関係を踏まえて、ここでは、複数の住戸の対面及び囲みによる外部空間形成の特質を、空間増

表3 基本的価値意識

● 基本的特徴
<定住志向> ○1: ここで生活できなければ、よそでは住んよ ここがいちばん住みやすい。
<考え方> ○2: 北方は、助け合いが今でも続いている。 ○3: 「もやいおうて」とは、助け合って、皆で 話し合ってとか、一人で買えないものを皆 で、金を出し合っ買って買うという、なじみの ある言葉。 ○4: 濃密なつきあいは伝統

表4 相互扶助の住民意見

● 日常生活の側面	＜子守り＞	＜仁義例れ＞
<自然監視・防犯> ○5: 一日中いないときは鍵をかけ、隣近所に声 を掛け、ちょっと出るときは、何もしない ○6: 鍵を掛けて出ていくと笑われる。 ○7: 軒先に物を出しっぱなしにしても安心。	○13: よその子どもの子守りをする。 ○14: 小さい時から、面倒を見てもらっている	○19: 体を張る（経済的ではなく）に義はおしま ない。
<食事> ○8: 昔は、学校から帰ってきたら隣近所で食わ せてもらっていた。今のカギっ子でも、よ その家で御飯を食べれる。	<植木・メンテナンス> ○15: 外出して、夜遅く帰ると、隣の人が、植木 に水をかけてくれる。	<冠婚葬祭> ○20: 盆踊りの仕出しの時は、兄弟、友達、近所 の人など皆、仕事を休んで、おばちゃんた ちが50人程手伝う。 ○21: 葬式は、隣組で米や金を出し合っ、仕事 を分担
<おすそわけ・貸借> ○9: みその貸し借りでも何でもする。「友達が 頼みたいなもの。」	<無尽・助け無尽> ○16: お金が必要な人（＝世話人）がケジをひか なくても一番最初にとることができるのは 助け無尽。	<火災・災害> ○22: ボヤの時、隣近所の人を集めて、バケツリ レーで火を消した。お互いに火事が起こる と大変なので、隣家同士、気を使い合っ ている。
<老人の暮らし> ○10: 人がよく隣組手になるので老人がぼけな い ○11: 老人ホームに入った話は聞いたことがない 気配や隣近所で食事の面倒を見ている。 ○12: 年寄りの顔を2、3日見ないと訪ねていく	● 非日常生活の側面	<行方不明・捜索> ○23: 父が行方不明になったとき、4町内が一 緒になって（約700人）山狩りを3日間し てくれた。皆、親身になってくれる。
	<一般> ○17: 何かがあった時に、すぐに人が寄ってきて 動く。	
	<病氣> ○18: 病氣などをした時に、皆の思いやりが分か る。私は良かったと思っている。	

表5 協調・楽遊の住民意見

△: 協調行動 □: 楽遊行動

● 日常生活の側面	＜集住マナー＞	＜路地＞
<柔らかなプライバシー> △24: 家の前の路地を通る人も通られる人も、お 互い嫌なのではない。 △25: 通り土間を通る時は、「いま御飯かー。」 「食べていくかー。」くらいに声を掛け合 う程度で、別に気にしていない。 △26: 夏場は家の中が見えても窓は開けっ放し。 互いに気性が知れ、全く気にならない。 △27: 隣近所、皆、ひっぱらけておく。	△29: カラオケは、10時半になったらやめる。 △30: 火の元は、近所に迷惑をかけないように自 覚してやる。	△35: 半分ずつ土地を出し合っ路地をつくった （出し合いの道）
<プライバシー> △28: 家の裏の方は、裏の家がこっちを向いて いるので閉じている。	<メンテナンス> △31: 10数年前までは、町内で道、公園、あぜ 道を清掃して、大半の人は参加していた。 △32: 家の前の路地を、毎朝・夕清掃する。 △33: 外の炊事場。どの家もかたづけられている	<集い> □36: S宅は、路地に椅子や縁台もあり、涼むた めにおばちゃんたちがよく座っている。 □37: 老人がよく集まるところは、物干し台の下 □38: 散髪屋でよく遊んでいた。大人から子供ま で集まって一日中将棋を打っていた。
	● 非日常生活の側面	<盆踊り> □39: 「いい踊り（盆踊り）ができちよるよ」と 聞けば、見に行く。
	<植木> △34: 通行人が心地和み、楽しく道を通れるように 道路沿いに、立派な庭をつくった。	

殖の変容過程と使われ方から分析し、そこに内在する共生価値について解明する。

「カド」と呼ばれる共私行為の混在した庭を有する農村集落形態（図 7）から、約 30 年前から農業の衰退や分家による空間増殖によって、対面型、囲み型の住居群配置が生成した（図 8、9、10）。

その変容過程には、住民の住環境形成における自律的意識が見てとれる。それは、「カド」に存在していた他者の通り抜けの機能を路地に転換して継承することや、住戸が近傍空間を含めて、各々独立、完結せずに、対面型を採用することなどに見られる、他者や全体との整合や秩序化を志向する態度を有すること。同時に、自己更新力や個性を最大限に発揮した住環境の形成を志向することを併せもつことである。そうした自律的「環境態度」¹²に基づいて、ここでは有機的空間が創造し得た。

住戸相互の関係を見ると、玄関の向きだけでなく、日常的居住空間である居間が、相互に開いて対面している。対面性は、両者の視覚的交流を促進しつつ、相互の生活の交流を誘導する。とともに、その間に生成された路地空間全体を、各々が自己のセミプライベート空間として対象化する。即ち、各住戸に帰属する外部空間の領域感を空間全体に拡大し、結果として、各々の意識が重層構造をもつ共同化が図られる。そこには、「カド」に比して実質的面積が大幅に縮小した外部空間を、広く使おうとする意識の顕現化が見られる。

加えて、路地の共同化・セミプライベート化による住み手の集約的な維持管理によって、外部空間縮小という面積の問題が、質の向上へと転換されている。ともすると、空間の増殖は、全て高密度化を助長する負の要因として捉えられがちであるが、住民の自律的環境形成という共生価値の根源をなす側面は、示唆に富む。

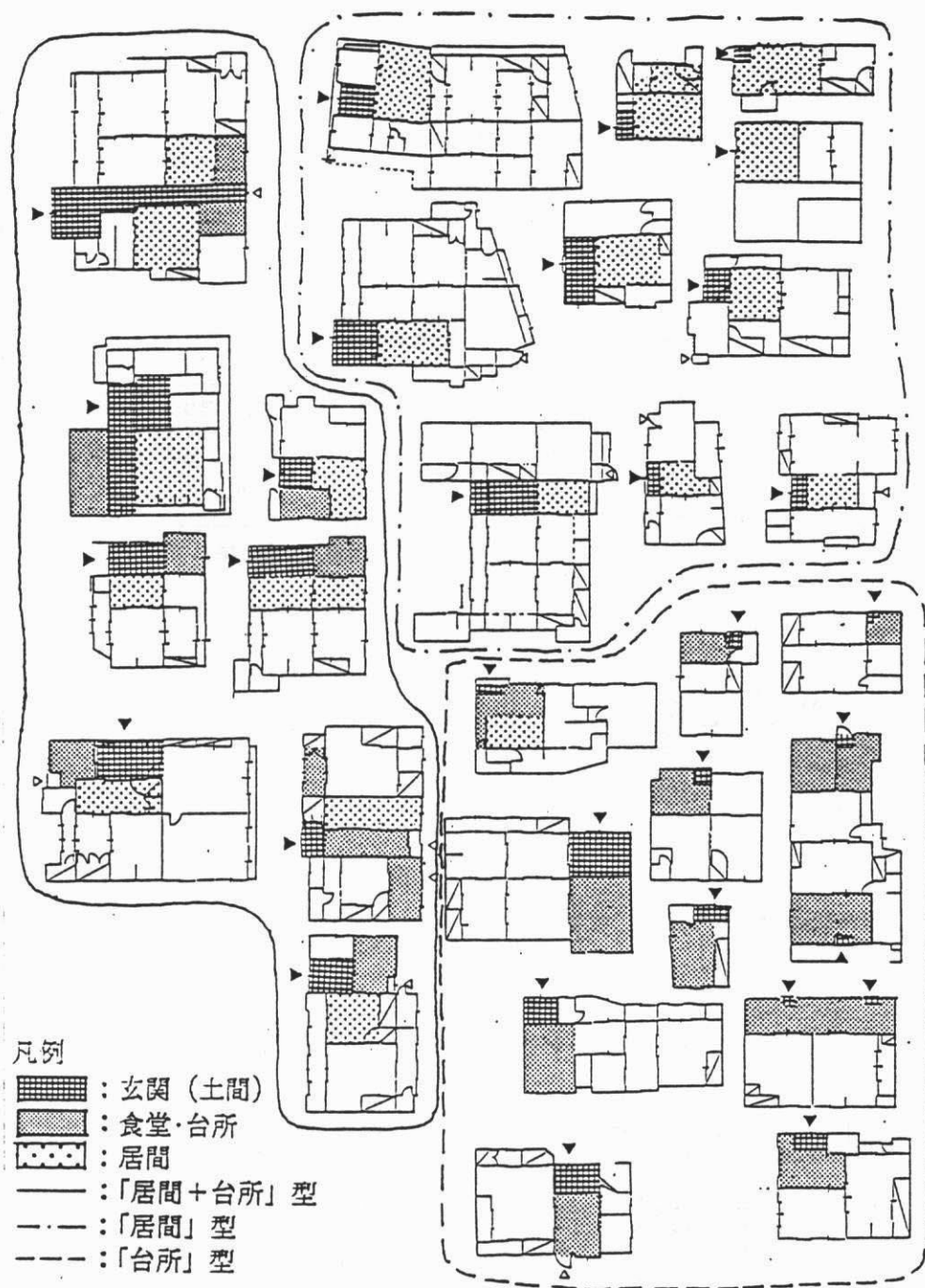


図4 玄関とLDKの関係による住戸類型

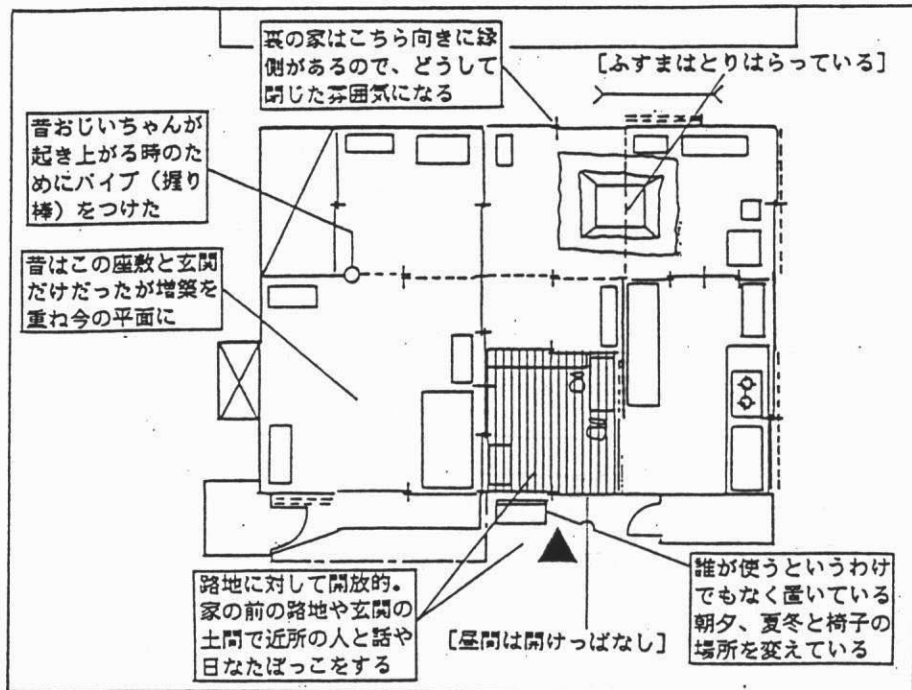


図5 住宅の開放性の典型事例 (1)

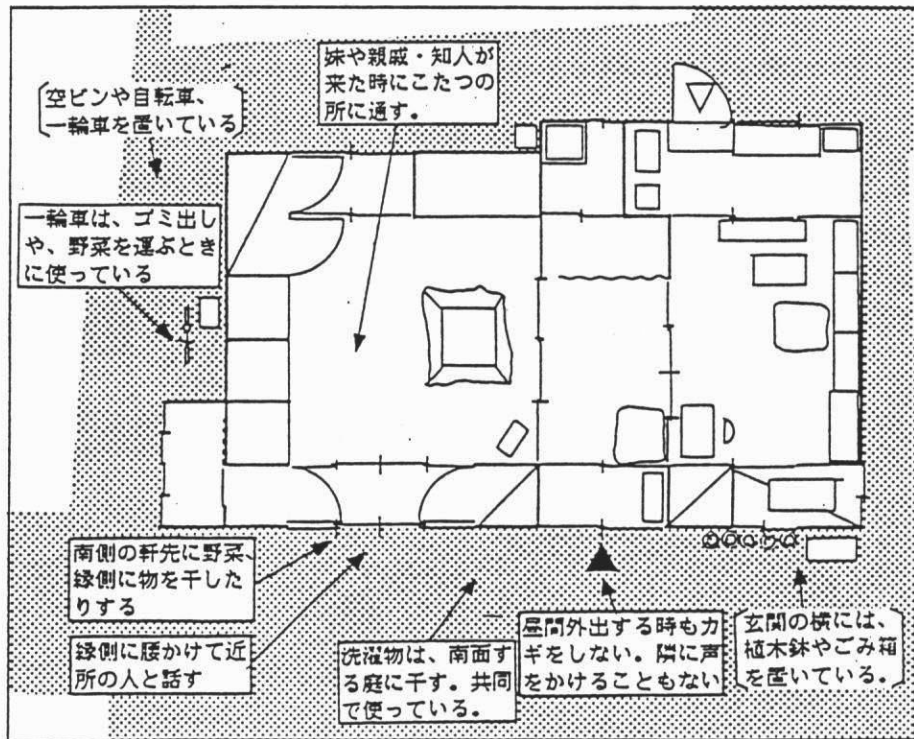


図6 住宅の開放性の典型事例 (2)

表6 住戸の開放性から生成される共生価値

要因		促進される行為		共生価値
◎住戸の開放性				
住戸の共性の強化	➡	外に向けての生活展開	➡	見られても気に ならない
住戸の私性の希薄化		自由な出入りと会話		相互交流
路地の私性の強化		路地に対する居住者の視線		安心感
路地の共性の希薄化		住宅に対する近所の視線		共同感性
		雨天時に近所の人洗濯物 を取り込む		相互扶助の促進
		植木や生活用品の路地への あふれ出し、表出		路地の活性化
		毎日路地の掃除		生活力の表現
				個性創出



図7 「カド」の原型

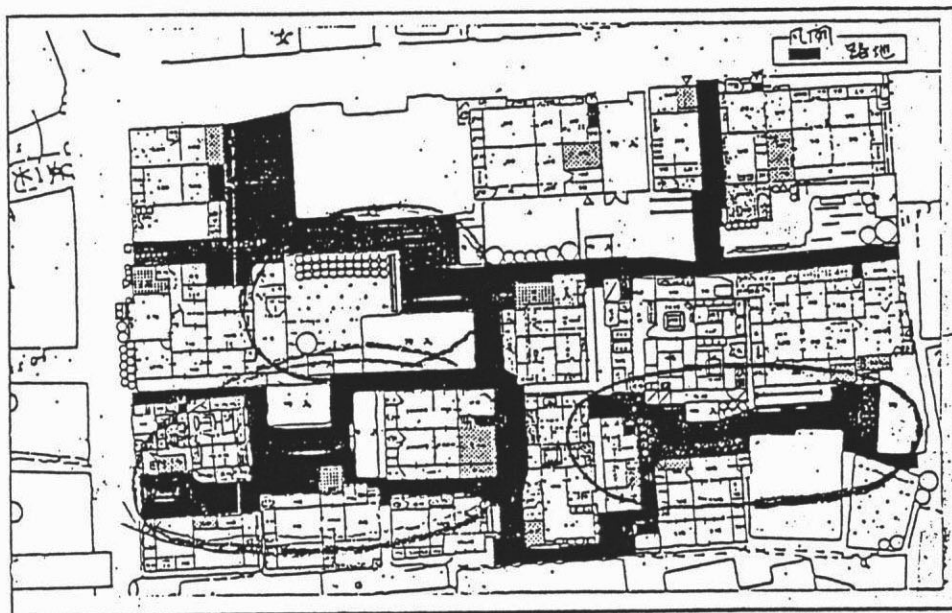


図8 有機的路地への変容

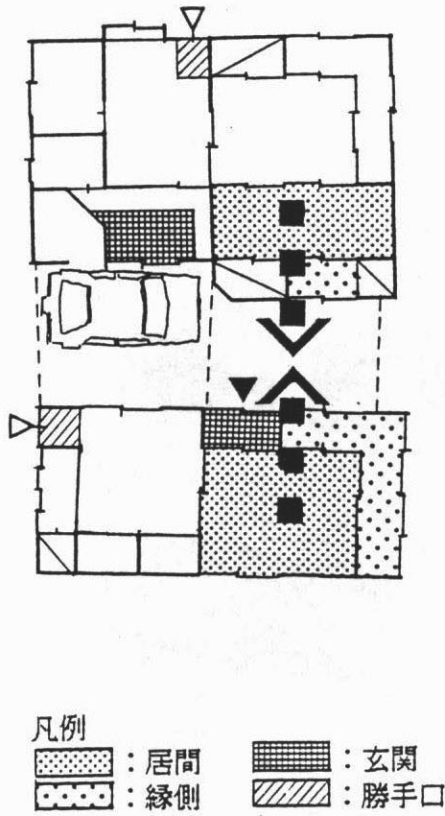


図9 対面型増殖

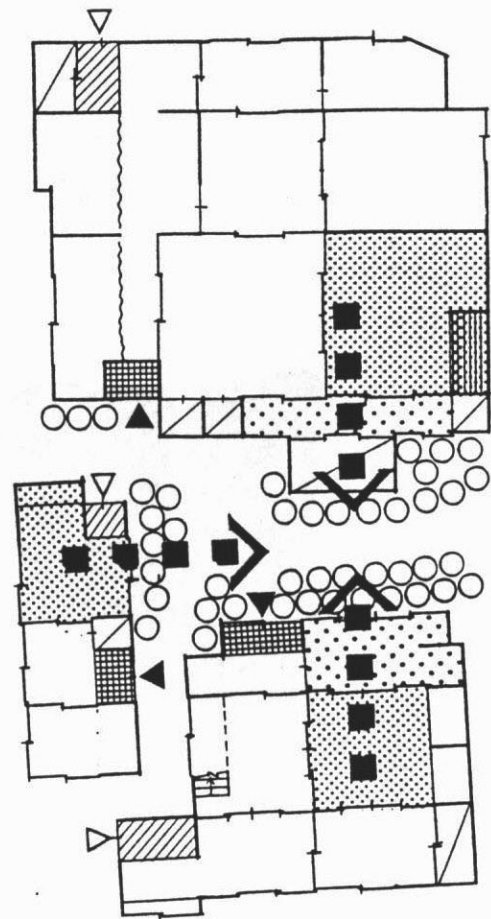


図10 囲み型増殖

II-3-4 まとめ

共生価値の実態、その生成のための条件、及び共生価値づくりの計画のあり方について考察することで、まとめにかえたい。共生価値は、基本的には機能性や合理性に対峙して、不合理性や不便性の中に、逆説的に見いだされる価値のことである。

人と人の関係から共生価値が生成し、増殖する条件を考察すると、一つには、固定的なプライバシーの概念ではなく、プライバシーの「入れ子構造」「相対化」といった、他者との関係から柔軟に変化し、擦り合わせを行なう心的態度である。二つ目には、「外なる目」「ストリートウォッチャー」といった、自然に、あるいは無意識のうちに、他者との関係を志向する態度である。三つ目には、「部分と全体の呼応関係」「老若提携」にみられる人と人の連続による価値の伝達や増殖のネットワークである。換言すれば、全体や他者との関係化の中から、自己を相対的に位置づけることで、全体に対する秩序感をもちつつ、その結果として、自己発現を目指す自律性が、共生価値生成の条件である。

では、共生価値を生み出すための「かたち」（空間）は如何にあるべきか。それは、空間づくりにおいて、住み手の自律性を促す仕掛けを内在させることである。そのためには、一つは、人と人、人と空間の「多重の関係性」を計画することと言える。即ち、人と人、人と空間が、相互規定的にぶつかり合うのではなく、相互の柔軟性によって、調合する関係のデザインである。そのためには、「領域間になじみ」のある計画が求められよう。それは、人の柔軟な感性を無限に受け止める空間づくりでもあり、住み手の自律性を触発する。

それと関連して、二つ目は、「余地のある」計画が求められよう。それは、計画の放棄を意味するのではなく、住み手が環境に対して、能動的に働きかける余地と契機を計画的に付与することであり、そこに、住み手の自律性を増殖する。

三つ目には、「有機性」を計画することであろう。有機性の計画とは、自律した部分の確立と、その個性化と全体としてのヘテロな混在による多様化を図ること。加えて、そうした部分が相互に関連するネットワーキングにより、重層的全体性を形成することである。空間の自律的部分と住み手の自律的態度が、相互に触発し合いながら、全体に向かう回路が、そこに開かれている。

<注>

- *1 『住環境研究の動向』（日本建築学会住環境小委員会、1989年）所収の第1章・高見沢邦朗論文（pp. 1-7）を、北原理雄は「強い計画性から弱い計画性」へのパラダイム転換と解釈しなおした（「住環境景観」をテーマとした研究の動向に関する考察—1975～1988、『1989年度第24回日本都市計画学会研究論文集』p. 481）
- *2 前出『住環境研究の動向』所収の第9章・小林重嗣論文、p. 115
- *3 前出『1989年度第24回日本都市計画学会研究論文集』所収の北原論文中、P. 485
- *4 延藤安弘、横山俊祐、古川智博「コーポラティブ住宅の計画研究としての方法的位置づけ—ユーコートの特質とその計画原理（1）」日本建築学会計画系論文報告集第396号、1989年2月、p. 14
- *5 前出『住環境研究の動向』所収の第3章・高見沢実論文、pp. 30—45
- *6 西山康雄『イギリス都市計画の歴史的構造—物象主義の系譜—』（博士論文）1977年11月、pp. 26—36
- *7 D. Harvey, *Social Justice and the City*, Edward Arnold, 1973、（*6中のp. 28による）
- *8 古武泰水「建築計画学への試み」鹿島出版会、pp. 113—142、1987年
- *9 高橋鷹志「人間—環境系の計画手法」『建築雑誌』vol. 104, No. 1288、1989年8月号、日本建築学会、pp. 145—146
- *10 中筋修『都住創物語』住まいの図書館出版局、1989年、pp. 47—50
- *11 「共同感性」とは、「集まって住むことに伴うネガティブ・チェックとポジティブ・チェックを日常的になしうる気づきのこと」（延藤安弘『集まって住むことは楽しい—住宅でまちをつくる』鹿島出版社、1987年、p. 246）
- *12 「環境態度」とは、「自己をとりまく複数多様な環境を全体関連的に自覚し、それに積極的に働きかけていくこと」（同上）